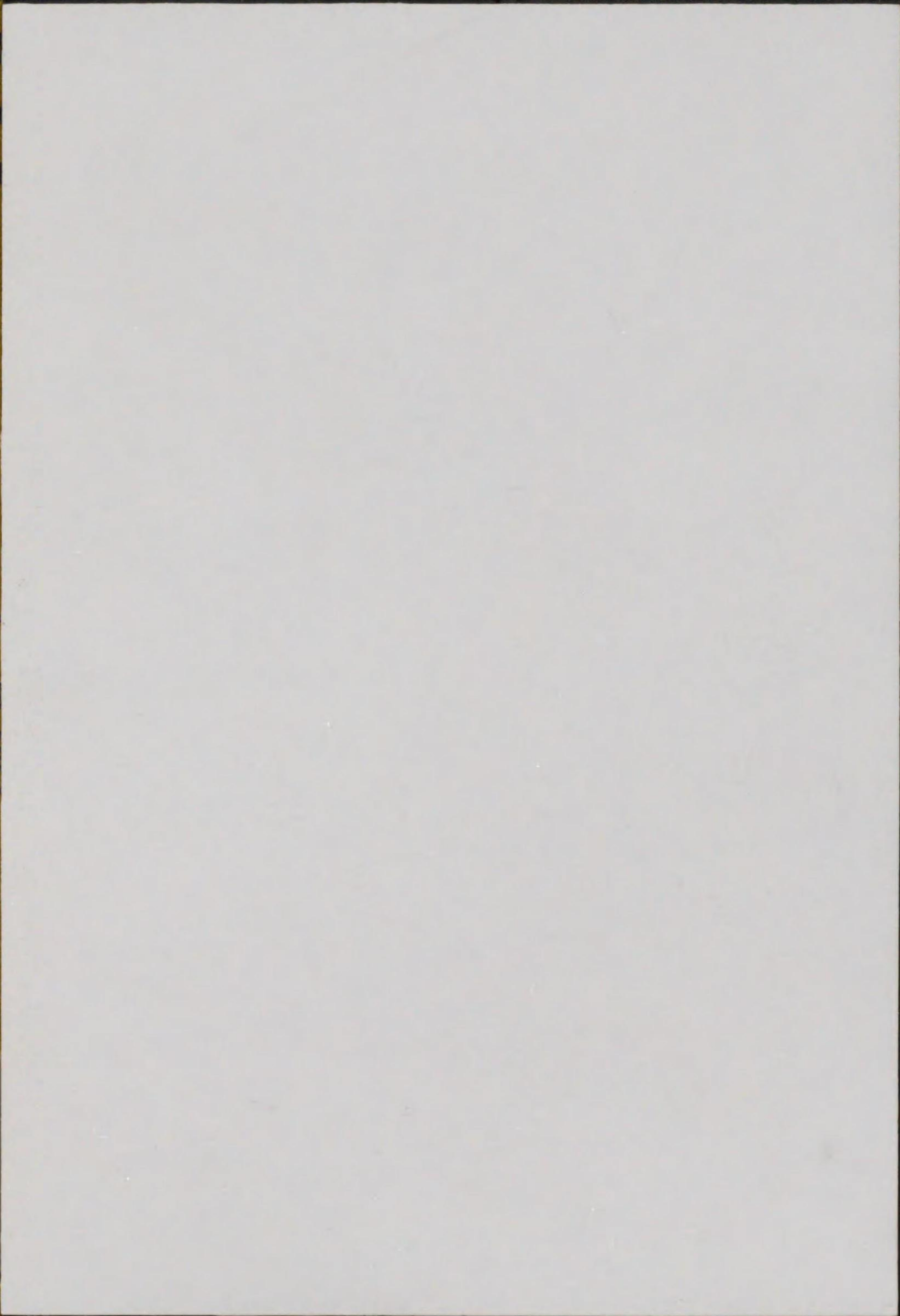
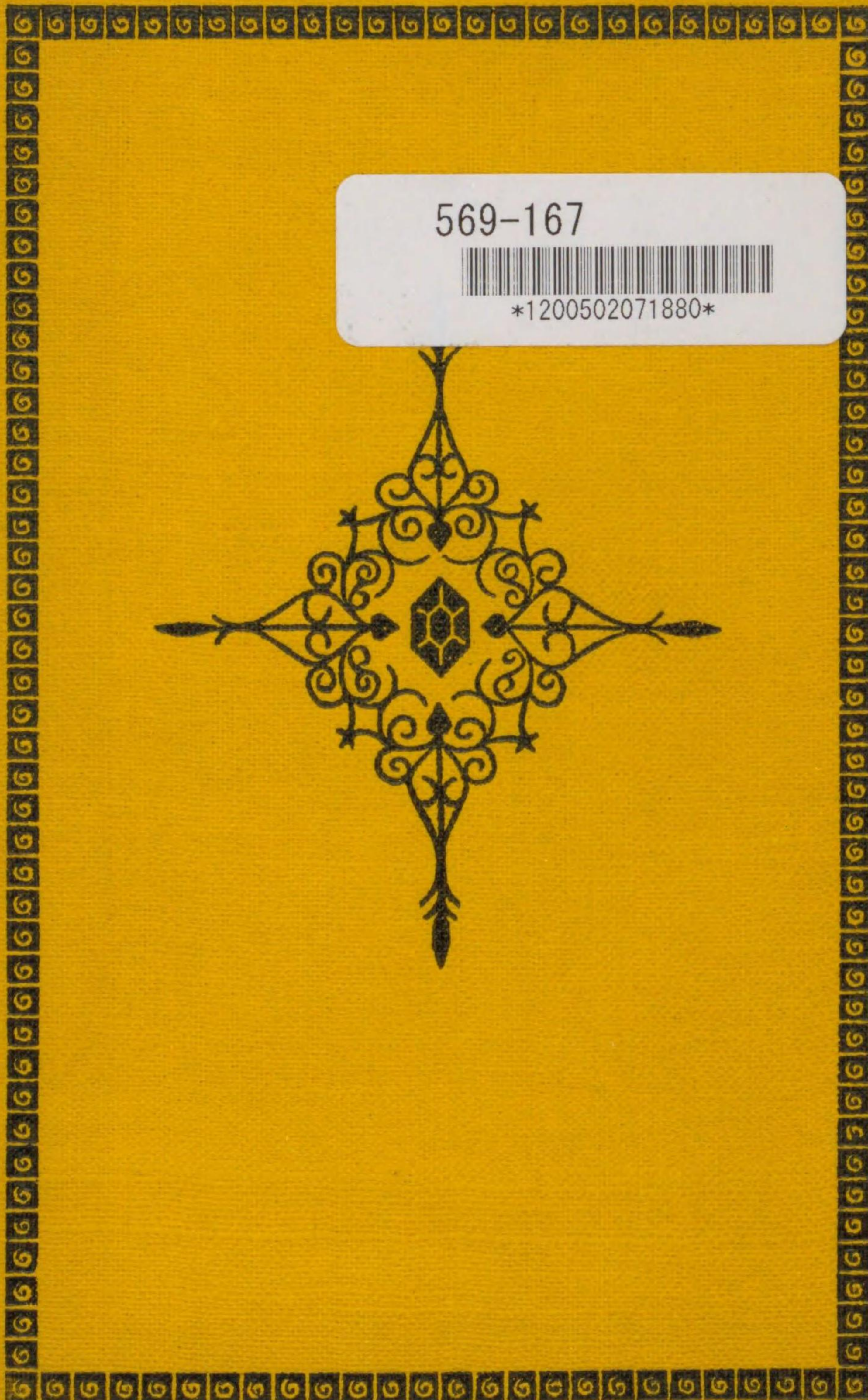
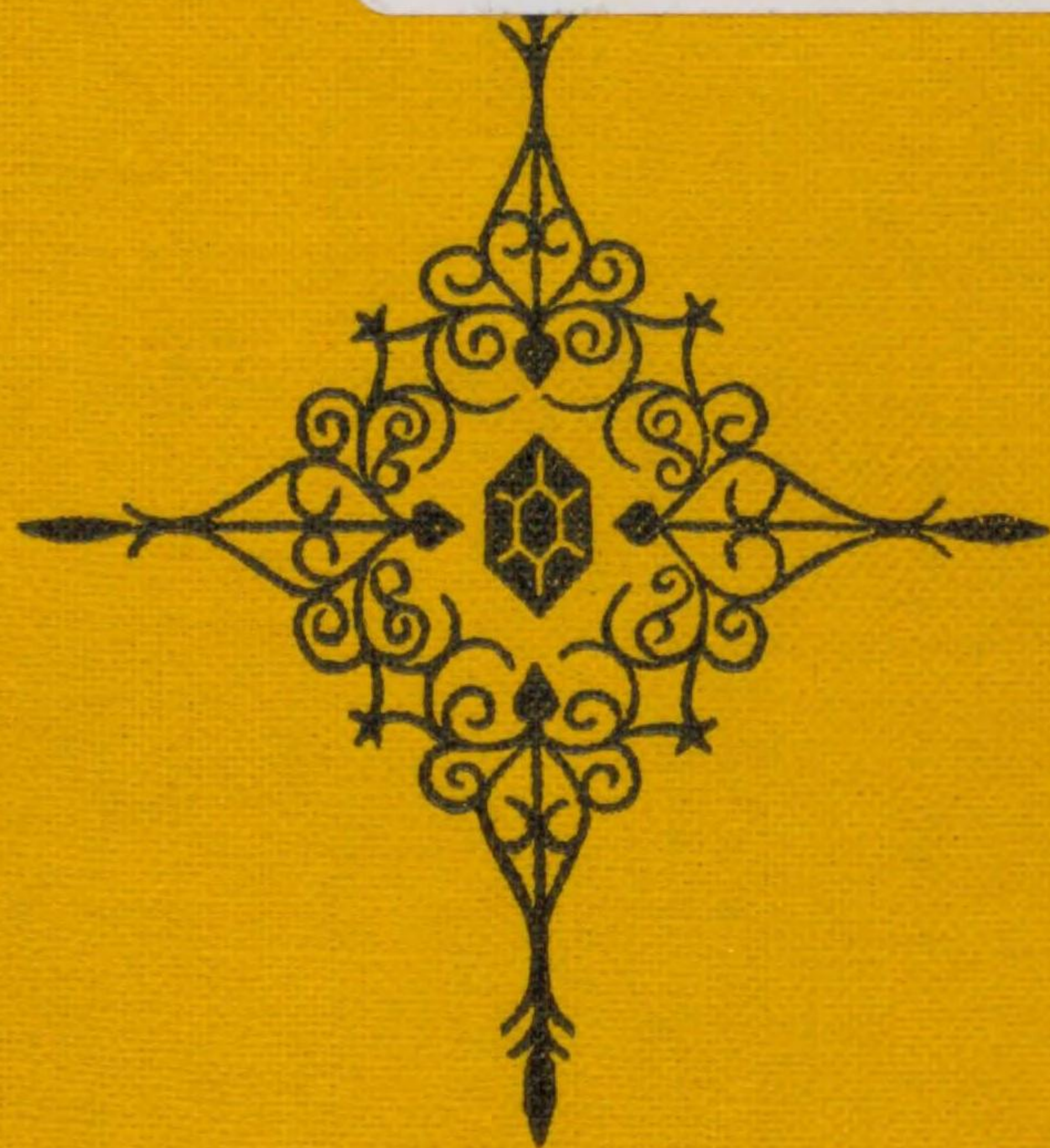


569-167



1200502071880





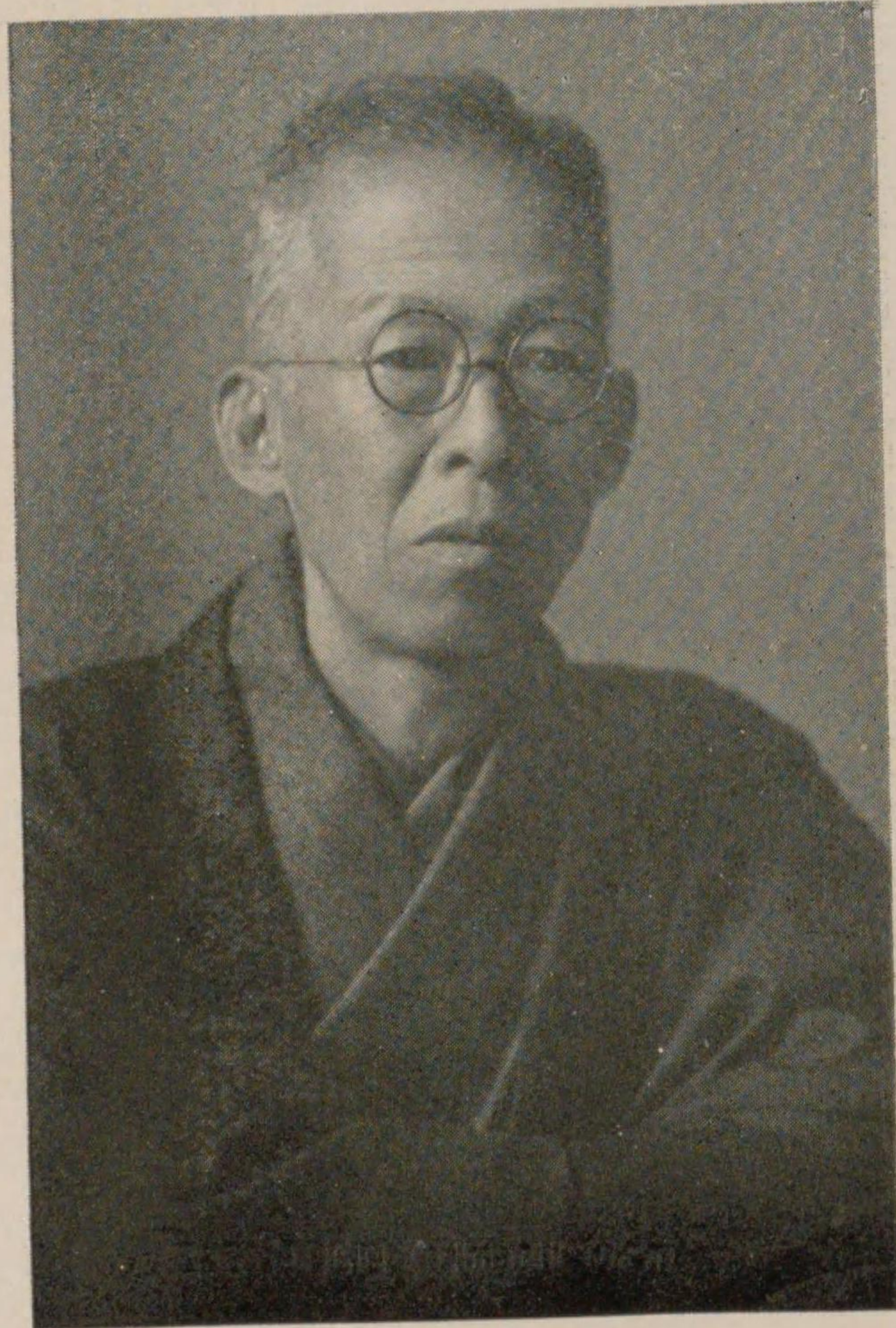
集全說小偵探本日

6

集堂綺本岡



社造改



者 著

569

167



I 種

W



1200502071880

異人の首

一

文久元年三月十七日の夕六つ頃であつた。神田三河町の半七が用達から歸つて来て、女房のお仙と差向ひで夕飯をくつてゐると、妹のお糸がたづねて来た。お糸は文字房といふ常盤津の師匠で、母と共に外神田の明神下に暮してゐた。

「いゝ陽氣になりました。」と、お糸はまだ白い齒をみせて笑ひながら會釋した。「姉さん、今年はもうお花見に行つて……。」

「いゝえ、どこへも……。」と、お仙は笑ひながら答へた。「なにしろ、内の人が忙がしいもんだから、あたしもやつぱり出る暇がなくなつてね。」

「兄さんもまだ……。」

「この御時節に、のんきなお花見なんぞしてゐられるものか。からだが二つあつても足りねえく

らゐるだ。」と、半七は云つた。「お花見の手拭や日傘をかつぎこんで来ても、今年は御免だよ。」

「あら、氣が早い。そんなことで来たんぢやないのよ。」と、お糸はすこし眞面目になつた。「兄さん。ゆうべの末廣町の一件をもう知つてゐるの。」

「末廣町……。なんだ、ぼやか。」

「冗談ぢやあない。ぼやぐらゐるをわざ／＼御注進に駆けつけて来るもんですか。ぢやあ、やつぱり知らないのね。燈臺下暗しとか云つて自分の繩張内のことを……。」

「ゆうべのことなら、もう俺の耳に這入つてゐる筈だが……。ほんたうに何だ。」と、半七も少し眞面目になつて向き直つた。

「それを話す前に、實はね、兄さん。この二十一日に飛鳥山へお花見に行かうと思つてゐるんです。なんだか世間がさう／＼しいから、いつそ今年はお見あはせにしようかと云つてゐたんですけれど、やつぱり若い衆たちが納まらないので、いつもの通り押出すことになつたんです。向島はこのごろ酔つ拂ひの浪人の素葉拔きが多いといふから、すこし遠くつても飛鳥山の方がよからうと云ふので、子供たちや何かで三十人ばかり揃つたんですが、なるだけ一人でも多い方が景氣がいゝから、なんとか都合がつくなら姉さんにも……。」

「なんだ、なんだ。お花見はいけねえと初めから云つてゐるぢやあねえか。それよりも、その末廣町の一件といふのは何だよ。」

「だから、兄さん。」と、お糸は甘えるやうに云つた。

「お糸さんも如才がない。」と、お仙は笑ひ出した。「お花見のお供と取つけえべえかえ。」

「姉さんばかりでなく、誰か五六人ぐらゐる誘つて来て……。ね、よござんすか。」

藝人には見得がある。とりわけて女の師匠は自分の花見の景氣をつけるために、弟子以外の團體を狩り出さうとして、しきりに運動中であるらしい。彼女はその交換條件として、ある材料を兄さんのまへに提供しようといふのであつた。半七も笑つて首肯した。

「よし、よし、そりやあ種次第だ。ほんたうに種がよければ、十人でも二十人でも、五十人でも百人でも屹と狩集めてやる。先づ種あかしをしる。」

「きつとですね。」

念を押して置いて、お糸はかういふ出来事を報告した。ゆうべ末廣町の丸井といふ質屋へ恐ろしい押借が来たといふのである。丸井はそこらでも舊い暖簾の店で、ゆうべの四つ半頃（午後十一時）に表の戸をたたく者があつた。もう四つを過ぎてゐるので、丸井では戸をあけなかつた。

御用があるならば明日の朝出直してくださいと内から答へると、外では矢はり叩きつゞけてゐた。さうして、銀座の山口屋から急用で来たといつた。山口屋は嫁の里方であるので、もしや急病人でも出来たのかと、店の者も思はず戸をあけると、黒い覆面の男二人が無提燈でずつと這入つて来て、だしぬけに主人に逢はせると云つた。かれらは黒木綿の羽織に小倉の袴をはいて、長い刀をさしてゐた。このごろ流行る押込みか押借りと見たので、番頭の長左衛門は度胸を据ゑてそれへ出て、主人は病氣で宵から臥せつて居りますから、御用がござりますならば番頭の手前へ仰せ聞けくださいと挨拶すると、ふたりの侍は顔を見あはせて、屹と貴様にこの返事が出来るかと念を押した。その形勢がいよ／＼穩かでないので、店の若いものや小僧共はみな顫へてゐるなかで、長左衛門は主人に代つてなんでも御返答をつかましますと立派に答へた。

度胸のいゝ返事に、侍どもは再び顔を見あはせたが、やがて、その一人が重さうにかゝへてゐる白木綿の風呂敷づつみを取り出して、長左衛門の眼さきに置いて、これを形代として金三百兩を貸してくれ、利分は望み次第であると云つた。いよ／＼押借りであるとききはめた番頭は、かれらがなにを取り出すかと見てゐると、その風呂敷からは血に染みた油紙があらはれた。更に油紙を取り除けると、そのなかからは一つの生首が出たので、番頭もぎよつとした。ほかの者共

はもう息も出なかつた。

それが彼等をおどろかしたのは、單に人間の首であるといふばかりではなかつた。それは日本人の首とはみえなかつた。髪の毛の紅い、鬚のあかい、異國人の首であるらしいことを知つたとき、かれらは一倍強く脅かされたのであつた。侍どもはその生首を番頭のまへに突きつけて、これを見せたらば諄く説明するにも及ぶまい、われ／＼は攘夷の旗揚げをするもので、その血祭に今夜この異人の首を刎ねたのである。迷惑でもあらうが、これを形代として軍用金を調達してくれと云つた。相手が普通の押借りであるならば、一人頭に五兩づつも呉れて遣つて、體よく追ひかへす目算であつた番頭も、人間の首、殊に異人の首を眼のさきへ突きつけられて、俄に料簡を變へなければならなくなつた。

攘夷の軍用金を口實にして、物持の町家をあらし廻るのは此頃の流行で、麻疹と浪士は江戸の禁物であつた。勿論、そのなかにはほんたうの浪士もあつたであらうが、その大多數は偽浪人の偽攘夷家で、質のわるい安御家人の次三男や、町人職人のならず者どもが、俄作りの攘夷家に化けて、江戸市中を嚇しあるくのであつた。おなじ押借りのたぐひでも、攘夷のためとか御國の爲とか云へば、これに勿體らしい口實が出来るので、小柄口な五衛右門や定九郎はみな攘夷家に

早變りをしてしまつた。しかし相手の方もだん／＼にその事情を知つて來たので、この頃では以前のやうにこの攘夷家をあまりに恐れないやうになつた。いはゆる攘夷家も蝙蝠安や斬られ與三郎と同格に認められるやうになつて來た。丸井の番頭長左衛門が割合におちつき拂つてゐたのもやはり彼等を見縊つてゐたからであつた。

併しそれが勘ちがひであつたことを、番頭も初めて發見した。かれらは所謂攘夷家の群ではなくて、ほんたうの攘夷家であるらしかつた。かれらは口の先でいたづらに紋切型の臺詞をならべるのでは無くて、生きた證據をたづさへて乗込んで來たのであつた。その血祭といふ異人の首は、鮮血に染みたまゝで油紙のうへに据ゑられてゐるのであつた。度胸のいゝのを自慢にしてゐる長左衛門も、だん／＼に顔の色をかへて、何物にか押付けられるやうに、その頭をおのづから下げた。もう斯うなつては七分の弱味である。そのあひだに二三度の押問答はあつたものゝ、所詮かれは攘夷家の請求する三百兩の半額も謹んで差出すのほかはなかつた。侍どもは流々納得して歸つた。歸るときに、形代であるから此首を置いてゆくと云つたが、番頭は平にあやまつて頼んで、この怖ろしい質物を持つて歸ることにして貰つた。

この報告をうけ取つて、半七は溜息をついた。

「ふむう。そりやあ初耳だ。おれは些つとも知らなかつた。だが丸井ではなぜそれを黙つてゐるのかな。さういふことがあつたら、この時節柄、きつと届け出るといふことになつてゐるんだが……。わからねえ奴等だな。」

「それがね、兄さん。」と、お糸は更に説明を加へた。「その浪人たちが引揚げるときに、おれ達の企ては途中で洩れては一大事だから、今夜のことは決して他言するな。萬一これを洩したら同志の者どもが押寄せて来て、主人をはじめ一家内みなごろしにするから然う思へど、さんく嚇かして行つたんですとさ。それだから丸井の家では店中のものに口止めをして、誰にも話さないことにしてゐたんですよ。」

「それをおまへが又どうして知つた。」

「そりやあ神田の半七の血を分けた妹ですもの。」

「ふざけるな。眞面目に云へ。御用のことだ。」

丸井の祕密をお糸が知つてゐるにはかういふわけがあつた。丸井の店の初藏といふ若い者がお糸のところへ時々遊びにくるので、お糸は飛鳥山の花見に加入することを頼むと、初藏は一旦承知して歸つたが、けふの午過ぎになつて急に斷りに來た。かれは師匠に怨まれるのを恐れて、

ゆうべの出來事を一切打ちあけた。何分にもこの矢先では店を出にくいから、かならず悪く思つてくれるなど、彼はしきりに云譯をして歸つた。單に違約の云譯のためならば、まさかそんな大袈婆な嘘はつくまい。これは屹とほんたうのことに相違ないとお糸は云つた。半七もさう思つた。

併しこのことが自分の口から洩れたと知れては、自分も迷惑、初藏も迷惑するであらうから、兄さんに如才もあるまいが、それはかならず内所にして置いてくれとお糸は念を押して歸つた。歸るときに、かれは更にまた念を押した。

「姉さん。二十一日には屹度ですよ。是非誰かを五六人誘つてね。」

二

半七は夕飯を早々にすませて、すぐに末廣町の丸井の店をたづねた。丸のなかに井の字の暖簾を染め出してあるので、普通に丸井と呼び慣はしてゐるが、ほんたうは井澤屋といふのである。表向きに乗込んで詮議しては却つて要領を得まいと思つたので、半七は番頭の長左衛門を表へよび出して小聲で訊いた。

「どうもゆうべは飛んだことだつたね。」
 むかしから質屋は兎かく犯罪事件にかゝり合の多い商賣であるから、丸井の番頭は半七の顔をよく識つてゐた。

「もうお耳に這入りましたか。」と、彼はすこし眉をよせながら云つた。

「む。すこし聞き込んだことがある。そこで、番頭さん。あいつ等のきまり文句で、これを他言すると仕返しに来るの、火をつけて焼き拂ふのといふが、そんな心配は決してねえから、なにも彼も正直に云つてくれねえぢやあ困る。なまじひ隠し立てをして、あとで飛んだ引合を食ふやうなことがあると、却つて店の爲にならねえからね。」

「はい、はい。御もつともでございます。」

相手が相手であるから長左衛門も正直に申立てるより外はないと覺悟したらしく、半七に對して一々明確に答へたが、事件の道筋はお糸の報告とおなじことであつた。浪士は覆面をしてゐたので、その人相はよく判らなかつたが、どちらも三十格好の男であるらしかつた。いくらか作り聲をしてゐるらしいので、これもよくは判らなかつたが、その音聲に著るしい國訛りは聞えないやうであつたと長左衛門は云つた。かれらが持參の生首といふのは確に異人の首に相違なかつた

と答へた。それは自分ばかりでなく、現にその場には手代格の若いものが三人、小僧が二人居あはせて、誰もかれも皆それを異人の首と認めたのであるから、おそらく間違ひはあるまいと云つた。「このごろ流行物の押借りかと思つて、初めは多寡をくゞつてゐたのでございますが、なしる異人の生首をだしぬけに出されましたので、わたくしはびつくりしてしまひました。」と、長左衛門はその怖ろしいものが今でも眼のさきに泛んでゐるやうに顔をしかめて囁いた。

半七は黙つて聽いてゐた。もう此上に詮議もないらしいので、今夜はこれだけにして長左衛門に別れた。勿論、二度と押掛けて来るやうなこともあるまいが、彼等が今夜も萬一出直して來たらずぐに自分のところへ知らせしてくれ。決して隠して置いてはならないと、くれぐれも云ひ聞かせて歸つた。

家へ歸ると、子分の松吉が待つてゐて、ゆうべ深川富岡門前の近江屋といふ質屋へ二人づれの浪人が押借りに來て、異人の首を突きつけて攘夷の軍用金百兩をまきあげて行つたと報告した。

「仕様のねえ奴等だ。」と、半七は舌打ちした。「實は今もそれで末廣町まで足を運んで來たんだ。」

「ぢやあ、末廣町にもそんなことがあつたんですかえ。」

「そつくり同じ筋書だ。」

その説明を聴かされて、松吉も舌打ちした。

「まつたく仕様がねえ。そんなことをして方々を押し歩いてるやあがる。だが、親分。生首を持つて歩いてるやうぢやあ、そいつ等は眞者でせうか。」

「さうかも知れねえ。」

半七はかんがへてみると、松吉は紙入れから小さい紙につんだものを大切さうに出してみせた。それは紅い髪の毛であつた。

「これは近江屋の入口の土間に落ちてゐたのを拾つて来たんですよ。」と、松吉は得意らしく説明した。「なにか手がかりになるものはねえかと、わしも蚤取眼でそこらを詮議すると、土間の隅にこんなものが一本落ちてゐたんです。店の掃除をするときに掃き落したんでせう。」

「む。」と、半七はその紙を手のうへに擴げて見た。「異人の首の髪の毛らしいな。」

「さうです、さうです。奴等が首を持ち出して拵くりまはしてゐるうちに、一本か二本ぬけて落ちたのを誰も気がつかずにゐて、今朝になつて小僧どもが掃き出してしまつたんでせう。どうです、何かのお役に立ちませんかね。」

「いや、悪くねえ。いゝ見付物だ。おめえにしちやあ大出来だ。そこで、深川へ押込んだのは昨

夜の何時だ。」

「五つ頃ださうですよ。」

「まだ宵だな。それから末廣町へまはつたのか。一晚のうちによく稼ぎやあがる。」と、半七は再び舌打ちした。「なにしろ、これはおれが預かつておく。」

「ほかに御用はありませんかえ。」

「さうだな、先づこの髪の毛をしらべて見なけりやあならねえ。すべての段取りはそれからのことだ。あしたの午ごろに出直して来てくれ。」

松吉を歸したあとで、半七は一本のあかい毛をいつまでも眺めてゐた。それがほんたうの異人の髪の毛であるか、あるひは何かの薬か繪の具で染めたものであるか、それを確めた上でなければ、どうにも見當の着様がなかつた。

半七はあくる朝、八町堀同心の屋敷をたづねて、神田と深川の出来事を報告した。世の中のみだれてゐる江戸の末であるから、それがほん者の攘夷家の偽浪士か、八町堀の役人達にも容易に判斷を下すことが出来なかつた。いづれにしても半七の意見に附いて、先づその髪の毛を鑑定させることになつて、ある蘭法醫のところへ送つて検査させると、それは日本人の毛髪を薬劑や顔

料で染めたものではないらしい、さりとて獣の毛でもない、おそらく異國人の髪の毛であらうといふ鑑定であつた。

例の偽浪士がどこかの墓をあばいて、死人の首を取り出して、その髪の毛を塗りかへるか、あるひは一種の蠶をかぶせて、顔も好加減に化粧して、異人の首らしく巧にこしらへて、それを抱へてあるいてゐるのではないかと半七も初めは疑つてゐたのであるが、果してほんたうに異人の毛であるとすれば、かれも更にかんがへ直さなければならなかつた。しかしこの當時、江戸に在住の異國人は甚だ少数である。公使領事のほかに二三の書記官や通辭があるばかりで、亞米利加は麻布の善福寺、英吉利は芝高輪の東禪寺、佛蘭西は三田の濟海寺、阿蘭陀は伊皿子の長應寺、普魯西亞は赤羽の接遇所、露西亞は三田の大中寺に、公使館または領事館を置いてゐるが、これらは幕府に届け出でのあるもので、そこに住む者の姓名もみな判つてゐる。そのなかの一人が首を取られたとすれば、すぐにも知れる筈である。かれらの方でも黙つてゐる筈がない。彼のヒュースケンの暗討一件をみても判つたことで、彼等からは幕府にむかつて嚴重の掛合を持ち込んでくるに相違ない。それが今に至るまでなんの音沙汰もないのをみれば、その首の持主が江戸在住のものでないことは容易に想像された。

「それぢやあ濱かな。」

半七は自分の意見をのべて、奉行所の許可をうけて、その月の二十一日に江戸を出發することになつたので、お糸は兄嫁を花見に誘ひ出すどころではなかつた。却つて自分が神田三河町の兄の家へ見送りに來なければならなくなつた。横濱までわづかに七里と云つても、その頃ではやはり一種の旅であつた。

「兄さん。御機嫌よろしう。途中も氣をつけてね。」

その聲をうしろに聞きながら、半七は自分の松吉をつれて朝の六時半（午前七時）頃に神田三河町の家を出た。ほかの子分たちも高輪まで送つて來た。この頃は毎日の晴天つゞきで、綿入れの旅はもう暖か過ぎるくらゐであつた。品川の海の空はうららかに晴れ渡つて、御殿山のおそい櫻も散りかゝつてゐた。

「親分。今頃の旅はようがすね。」と、松吉はのんきさうに云つた。

「まつたくだ。これで御用がなけりやあ猶好いんだが、さうもいかねえ。まあ、濱見物をするつもりで出かけるんだな。」

「さうですよ。わたしは是非一度行つてみたいと思つてゐたんですよ。」

一昨年（安政六年）の六月二日に横濱の港が開かれると、すぐに海岸通り、北仲通り、本町通り、辨天通りが開かれる。野毛の橋が架けられる。あくる萬延元年の四月には太田屋新田の沼地をうづめて港崎町の遊廓が開かれる。外国人の商館が出来る。それからそれへと目ざましく發展するので、この頃では横濱見物も一つの流行ものになつて、江戸から一夜どまりで見物に出かける者もなかく多かつた。年のわかき松吉は御用の旅で横濱見物の出来るのでよるこんで、江戸をたつ時から威勢がよかつた。半七は去年も一度行つたことがあるので、先づ大抵の見當はついてゐるが、日増しに開けてゆく新しい港の町が一年のあひだに何う變つたかと、これも少からぬ興味をそゝられて、暮春の東海道を愉快にあるいて行つた。

その頃は高島町の埋立もなかつたので、ふたりは先づ神奈川の宿にゆき着いて、宮の渡しから十六文の渡し船に乗つて、平野間（今の平沼）の西をまはつて、初めて横濱の土を踏んだのは、その日の夕七時半（午後五時）頃であつた。すぐに戸部の奉行所へ行つて、御用の探索で来たことを一應とゞけて置いて、半七はそれから何處かの宿屋を探しに出ると、往來で一人のわかい男に逢つた。

「三河町の親分ぢやありませんか。」と、彼はうす暗いなかで透しながら聲をかけた。

三

半七と松吉も立ちどまつた。

「やあ、三五郎か。いゝところで逢つた。實はどこかへ宿を取つて、それからおめえのところへ行かうと思つてゐたんだ。」と、半七は云つた。

「そりやあ丁度ようござんした。松さんもいつも達者で結構だ。まあ、なにしろ往來で話も出来ねえ。そこらまで御案内しませう。」

三五郎は先に立つて行つた。かれは高輪の彌平といふ岡つ引の子分で、江戸から出役の興力に附いて、去年から横濱に来てゐるのであつた。江戸にゐるときに半七の世話になつたこともあるので、かれは今夜久しぶりに出逢つた親分と子分を疎略には扱はなかつた。近所の料理屋へ案内して、三五郎はなつかしさうに話し出した。

「どうも皆さんに御無沙汰をしてゐて相済みません。ところで、おまへさん達は唯の御見物ですかえ。それとも何かの御用ですかえ。」

「まあ、御用半分、遊び半分よ。」と、半七は何げなく云つた。「なにしろこゝも無暗に開けてくる

らしいね。江戸より面白いことがあるだらう。」
 「まつたく急に開けて来たのと萬國の人間があつまつて来るので、随分いろ／＼の變つた話がありますよ。」

このあひだも露西亞の水兵が二人づれで、神奈川の近在へ散歩に出て、ある百姓家で葱を見つけて十本ほど買ふことになつたが、買手も賣手も詞が通じないので、手眞似で對談をはじめた。賣手の方では相手が異人であるから、思ふさま高く賣つてやれといふ腹で、指を一本出してみせた。それは一分といふのであつた。それに對して買手は一兩の金を出した。指一本を一兩と思つたのである。賣手も流石にびつくりして、それでは違ふと首をふつてみせると、買手の方ではまだ不承知だと思つたらしい、その一兩を投げ出して、十本の葱を引つかゝへて逃げ出した。賣手はいよ／＼おどろいて、違ふ違ふと呼びながら追つてゆくと、近所の者がそれを聞きつけて駆けあつまつて来たので、買手はいよ／＼狼狽して一生懸命に逃げ出した。水兵のひとりには浅い溝川へ滑り落ちて、泥だらけになつて這ひまはつて逃げた。葱十本を一兩に賣つて、しかも買手が命から／＼逃げてゆくなどといふことは、こゝらでも前代未聞の椿事と噂された。

こんな話をそれからそれへと聽かされて、半七も松吉もこみ上げて来る笑ひを止めることが出来なかつた。話す人も聽く人もしきりに笑ひながら猪口の遣り取りをしてゐると、三五郎はやがて少し眞面目になつて云ひ出した。

「だが、そんな可笑しい話ばかりでなく、色々うるさいこともありますよ。なにしろ異人ばかりでなく、日本でも諸國から色々な人間が寄りあつまつて来てゐますからね。どうも人氣が殺伐で、喧嘩する奴がある。悪いことをする奴がある。それにね。」と、かれは更に顔をしかめた。「例の浪士といふ奴が異人を狙つて這入り込んでくる。尤も神奈川の關門で大抵扼ひとめてゐる筈なんです、どこを何うくぐるか、やつぱり時々にくぐれ込んでくる。ほん者ばかりでなく、偽者もまじつてくる。這奴等が一番厄介物ですよ。このあひだ中も攘夷の軍用金を出せなんて云つて押借りをしてあるく奴がありましたね。」

「そいつ等はどうした。みんな引きあげたか。」と、半七は訊いた。

「それがいけねえ。」と、三五郎は頭を掉つた。「みんな同じ奴らしいんですがね。」
 かれの話によると、横濱でも去年の暮頃から軍用金押借の一組が横行する。勿論、それがほん者か偽者かよく判らないが、いつでも二人づれで異人の生首をかゝへてくる。それを形代に軍用金を貸せと嚇かして、小さい家では三十兩か五十兩、大きい家では百兩二百兩をまきあげて行く。

被害者のうちには後の祟りを恐れてそれを祕密にしてゐる者もあるので、委しいことは知れないが、少くも十五六軒はその災難に逢つてゐるらしい。こんな奴等はこの上になにを仕出すか知れないといふので、戸部の奉行所でも嚴重に探索をはじめた。三五郎も一生懸命に駆けまはつてゐるが、どうしても彼等の足跡を見つけ出すことが出来ない。それにはどうも弱つてゐると彼も溜息まじりで云つた。半七と松吉は顔を見あはせた。

「それでおめえはその生首といふのを何う思ふ。こゝらの異人で、そんなに首を取られた奴があるのか。」と、半七は又訊いた。

「あればすぐに知れる筈ですが……。」

「それぢやあ近い頃に病氣で死んだ者があるか。」

「それも無いさうです。」と、三五郎は首をかしげてゐた。「それだからどうも判らねえ。わたしの鑑定ぢやあ、屹とどこかの墓場あらしをして、日本の死人の首をなんとか巧くこしらへて來るんだらうと思ふんですよ。嚇かされる方は頼へあがつてゐるから、それが異人か日本人か、確な首實檢が出来るもんですか。ねえ、さうぢやありませんか。」

かれも半七が最初の鑑定とおなじ見込みを付けてゐるのであつた。しかし今の半七はそれに耳を假すことは出来なかつた。おなじ墓場あらしでも、或は異國人の死首を掘り出してくるのではないかといふ疑ひはあつたが、近ごろ病死した者がないとすれば、その疑ひもすぐに煙のやうに消えてしまはなければならなかつた。半七は薄く眼をとぢてたゞ黙つてゐると、三五郎の方から云ひ出した。

「そこで、親分。おまへさんはほんたうに遊びですかえ。ひよつとすると今の一件が江戸の方へも響いて、その様子を見とゞけに來たんぢやありませんかえ。」

「は、流石に眼が高え。實はそれだ。」と、半七も正直に云つた。

「いや、ありがてえ。おまへさんが來てくれりやあ千人力だ。」と、三五郎は急に威勢が附いたらしかつた。「實はわたしも手古摺つてゐるんだ。親分、後生だから好智慧を授けておくんせえ。」

「好智慧と云つてもねえが、見込みをつけて江戸から乗り込んで來た以上、たゞ手ぶらでも引揚げられねえ。そこで、三五郎。近い頃にどこかの異人館で物を取られたことはねえか。」

「さうですな。」と、三五郎は又もや首をかしげた。「物を取られた奴は幾らもあるが、どれも皆んなこつちの人間ばかりで、異人館へ押込んだ泥坊はないやうですな。」

「ほかに異人館から何か訴へに來たやうなことはねえか。」

「別にかうといふほどの事もありませんが、たしか先月だとおぼえてゐます。英吉利のトムソンといふ商館から奉行所の方へこんなことを内々で頼んで來ましたよ。自分のところで使つてゐるロイドといふ若い番頭が、去年の夏頃から港崎町の岩龜へ無暗に遊びに行つて、随分暴つぽい金を使ふらしいが、商館の方で渡す給金だけぢやあ逆も足りる筈がない。と云つて、當人はほかに澤山の金を持つてゐるとも思へないから、その金の出所がどうも不審だ。なにか商館の方の帳面づらを胡麻かして、ぬけ商ひでもしてゐるんぢやあないかと、主人の方でも色々にしらべてゐるが、いづれ日本人を相手の仕事に相違ないから、そつちの奉行所の方でも内々でしらべてくれと斯う云ふんです。そこでわたしも探索してみると、まつたくそのロイドといふ奴は岩龜の夕顔といふ女に熱くなつて、むやみに金をふり撒いてゐるらしいんです。」

「そのロイドといふのはどんな奴だ。」

「なんでも英吉利のロンドンの生れで、年は二十七ださうですが、日本語もちよいと器用に出來て、遊びつ振りも悪くないので、岩龜では評判がいゝさうですよ。」

三五郎は笑つてゐた。かれはこの問題に就てあまり深い注意を拂つてもゐないらしかつたが、半七は決してそれを聞き逃さなかつた。

「そのロイドといふ奴はいつも一人で出かけるのか。」

「勝藏といふボーイがいつも一緒に出かけつてゐたやうです。それが主人に知れたもんですから、勝藏の方は二月の末に暇を出されたさうです。どうで異人館奉公するやうな奴ですから、なんでも江戸の食ひつめ者で、こいつが初めにロイドを案内して行つて、面白い味を教へたらしいんです。いくら異人だつてかういふ奴等に煽てられちやあ、自然に泳ぎ出す氣にもなりませんよ。罪な奴ですな。」と、三五郎はやはり笑つてゐた。

「その勝藏といふ奴はそれから何うした。やつぱりこゝらにうろ付いてゐるのか。」

「さあ、どうですかね。」

「それを早くしらべてくれ。そいつにも誰か友達があるだらう。異人館をお拂ひ箱になつて、それからどうしたか。江戸へ歸つたか、こつちにゐるか。よく突きとめて來てくれ。大してむづかしいこともあるめえ。」

「あい。ようがす。なるたけ早く聞き出して來ませう。」

「しつかり頼むぜ。」

こゝの勘定は半七が拂つて、三人は料理屋の門を出ると、宵闇ながら夜の色は春めいて、生あ

た、かい風が微酔の顔を撫でた。半七は去年泊つた上州屋へゆくことにして、こゝで三五郎に別れた。

「親分。その勝藏といふ奴が可怪いんですかえ。」と、松吉は四五間あるき出してから小聲で訊いた。

「むゝ。もうこれで大抵判つた。ロイドといふ奴を引き擧げりやあ世話はねえんだが、異人ぢやあ何うも面倒だからな。まあ、いゝ。折角乗り込んで来た甲斐があつた。」と、半七は星あかりの空を仰いで笑つた。

四

あくる朝、二人がまだ起きないうちに、三五郎が上州屋へたづねて来た。

「馬鹿に早えな。濱の人間は違つたものだ。」と半七は寢床のうへに起き直つた。

「久しぶりで逢つた親分に叱言を聞いちやあ詰まらねえから、大急ぎでゆうべのうちに調べあげて来ましたよ。」と、三五郎は自慢らしく云つた。「その勝藏といふ奴は今月の初め頃までこつちにぶら付いてみました。なんでも小半月ばかり前に江戸へ歸つたさうです。」

半七は胸算で日數をかぞへた。さうして、江戸には勝藏の身寄りか友達でもあるのかと訊くと、かれは江戸の深川に寅吉といふ友達がある。差當りそれを頼つて行つたらしいと、三五郎は答へた。

「寅吉なんていふのは幾らもあるが、その商賣は判らねえかしら。」

「さうですね。たゞ寅吉とばかりで、その商賣までは知つてゐる者がねえのでこまりました。」と、三五郎は小鬚をかいだ。

「ロイドと一緒に岩龜に入り浸つてゐたやうぢやあ、勝藏にも馴染の女があるだらうな。」と、半七は云つた。

「あります、あります。小秀といふ女で、勝藏の野郎も大分のぼせてゐたらしいんです。ぢやあ、これから岩龜へ出張つて行つて、その女をしらべてみませうか。ひよつとすると、彼奴のゆく先を知つてるかも知れません。」

「いや待て。むやみに騒いぢやあいけねえ。」と、半七は遮つた。「さういふわけなら女を調べるまでもねえ。ひよつとすると、當人がまた舞ひ戻つてゐるかも知れねえ。迂濶に手をつけて感付かれちやあ玉無しだ。まつ晝間おれ達がどや／＼押掛けて行くのは拙い。まあ、日のくれるまで氣

長に待つてゐて、客の振をして岩龜へ行つて見ようぢやねえか。」

「それがようがすな。こゝまで漕ぎ付けりやあ、そんなに急ぐことはねえ。」と、松吉は云つた。

「今日はゆつくり濱見物でもして、日が暮れてから仕事にかゝるんですね。」

そこらをひとわり見物して、三人は夕方に歸つて來た。

「どうします。眞直にあがりますか。」と、案内者の三五郎は云つた。「岩龜は遊ばなくつても可いんです。たゞ見物だけでもさせるんですから。兎もかくも見物のつもりで揚がつてみて、それからの都合にしたらどうです。」

「それもよからう。こゝへ來たら土地つ子のお指圖次第だ。」と、半七は笑つた。

「大門のなかには柳と櫻が栽ゑてあつて、その青い影は家々のあかるい灯のまへに緩くなびいてゐた。その白い花は家々の騒がしい絃歌に追ひ立てられるやうにあわたしく散つてゐた。三人は青い影を縫ひ、白い花を浴びてゆくと、まだ宵ではあるが遊蕩の客と見物人とが入りみだれて、押合ふやうな混雑であつた。

「よし原の花時よりも賑かだな。」

さういふ半七の袂をひいて、三五郎は俄にさゝやいた。

「あ、あれ、あすこにゐる奴がロイドです。」

教へられてよく見ると、大きな柳の下にひとりの異人が立つてゐた。瘦形の彼は派手な縞柄の洋服をきて、帽子を深くかぶつて、手には細いステッキを持つてゐた。差當り何うするといふわけにも行かなかつたが、こゝで幸ひにロイドをみつけた以上、半七はその監視を怠ることは出来なかつた。かれは三五郎と松吉に眼でしらせて、すこしく混雑の群から離れた。三人は櫻のかけにたゞずんで、若い異人の舉動をうかゞつてゐた。

「そこが岩龜ですよ。」と、三五郎は又教へた。ロイドは岩龜の店先から二三間距れたところに立ち暮して、誰かを待ちあはせてゐるらしかつた。

果して岩龜の店口から二人づれの男が出て來た。そのあとから引手茶屋の女が附いて來た。それをみると、ロイドは柳の蔭からつか／＼と出て行つて、立塞がるやうに二人のまへにその瘠せた姿をあらはすと、かれはそこに立ちどまつて何か小聲で話し合つてゐるらしかつたが、やがて二人は茶屋の女に別れて、ロイドと一緒にあるき出した。

「あの一人が勝藏ですよ。」

三五郎に教へられて、半七はうなづいた。かれは三五郎と松吉にさゝやいて、異人と二人の男

とのあとを追つてゆくと、廓内はいよ／＼人の出盛る時刻となつて、やゝもすると其混雑のなかで相手を見うしなひさうになつたが、丈のたかい異人を道連れにしてゐるので、勝藏等はその尾行者の眼から逃れることが出来なかつた。大門を出ると路はだん／＼に暗くなつた。駕籠屋や煮賣酒屋の灯の影がまばらにつゞいて、埋立地を出はづれる頃からは更に暗い田圃路になつた。そこらでは早い蛙が一面に鳴いてゐた。

先に立つてゆく三人はしきりに小聲で話してゐたが、やがてその聲が高くなつて、ロイドは片言で云つた。

「日本の人、嘘云ふあります、わたくし堪忍しません。」

「なにが嘘だ。さつきからあれほど云つて聞かせるのが判らねえのか。」

「判りません、判りません。あなたの云ふこと、みな嘘です。」と、ロイドは激昂したやうに云つた。「あの品、わたし大切です。すぐ返してください。」

「返せと云つても、こゝに持つてゐねえのは判り切つてゐるぢやあねえか。」

かういふ押問答が繰返された後に、勝藏等はロイドを突き退けて行かうとするのを、かれは追ひかけて引き戻した。ひとりの異人と二人の日本人とは狭い田圃路で格闘をはじめた。それをみ

て、半七は子分等に聲をかけた。

「異人は打つちやつて置いて、勝藏ともう一人の奴を取つて埋まへろ。」

三五郎と松吉はすぐに駆け出して行つて、有無を云はせずに二人の日本人を取押へた。ロイドはおどろて一目散に逃げ去つた。

これで問題は解決した。

異人の生首を引つさげて攘夷の軍用金をまきあげてゐた浪人組は、果して勝藏とその友達の寅吉であつた。食ひつめ者の勝藏は江戸から横濱へ流れ込んで、トムソンの商館のボーイに雇はれてゐるうちに、日本の事情によく通じない外國人を胡麻かして、かれは少しく懐ろを温めたので、すぐに港崎町の廓通ひをはじめて、岩龜樓の小秀といふ女を相方に、身分不相應の大盡風を吹かせてゐたが、所詮はボーイの身の上でそんな贅澤遊びが長く續く筈はないので、からは年の若い番頭のロイドを誘ひ出して、自分の遊び友達にすることを考へた。勿論、かれはその案内役で、一切の勘定はいつでもロイドに負擔させてゐた。

ロイドが馴染んだのは夕顔といふ若いおとなしい女であつた。彼はこの日本のムスメに若い

に塗つた。

かうして出来あがつた異人の首を、勝藏がいよく持ち出すことになつたが、自分ひとりでは工合がわるい。さりとてロイドを連れてゆくことが出来ないで、かれは江戸へ行つて友達寅吉をよんで来た。寅吉は深川に住んで、表向きは鑛掛け銃前直しと市中を呼びあはせてゐるが、博奕も打つ、空巢狙ひも遣る、かういふ仕事には適當の道連れと見たので、勝藏はひそかに其相談を持ちかけると、それは面白からうと寅吉もすぐに同意した。かれらは覆面の偽浪士となつて、去年の夏頃から横濱市中で二十軒餘を荒しあつた。その金高は千五百兩を越えてゐるのを、ロイドと三人で分配してゐた。トムソンの商館では勿論そんな祕密を知らなかつたが、勝藏の品行がよくないのと、彼がロイドの遊び仲間であることを覺つたので、二月の末にたうとう彼を放逐することになつた。

トムソンを放逐されたことは左のみ驚きはしなかつたが、自分たちの仕事に度重なつて、奉行所の詮議がだん／＼嚴重になつて来たのを勝藏は恐れた。商館を放逐されたのも或は奉行所から何かの注意があつたのではないかと危まれた。かれは寅吉と相談して、四月のはじめに一先づ横濱を立退くことにしたが、その時ロイドには無断で商賣道具の蠟人形を持って行つてしまつたの

魂をかきみだされて、去年の夏頃から毎晩のやうに通ひつめたので、商館から受取る月々の給料は勿論、本國から幾らか用意して来た金も残らず港崎町へ運んでしまつた。横濱に来てゐる同國人のあひだにも義理のわるい負債が嵩んだ。それでも日本のムスメを忘れることが出来ないで、かれは悶々の胸をかゝへて苦しみ惱んでゐるうちに、悪魔がかれの魂に巣くつた。

彼が先づ發議したのか、あるひは勝藏が思ひ付いたのか、その邊の事情は確でないが、勝藏はロイドの發案であると主張してゐる。いづれにしても二人がひそかに相談の末に、此頃はやる偽攘夷家の押借りを巧らんだのである。しかし偽者の多いことは世間でも大抵知つて来たので、單に口先で嚇したばかりでは睨みが利かないと思つて、かれ等は眞の攘夷家であることを證明するために、あはせて相手を威嚇するため、異國人の生首をたづさへてゆくことを案出した。勿論、ほんたうの生首などが無暗に手に入るわけでもないのであるが、それには屈竟の道具があつた。ロイドは蠟細工の大きい人形を故郷から持つて来てゐた。それは上半身の胸像のやうなもので、大きさは普通の人間とおなじく、髪の毛も長く植ゑてあつた。その蠟細工は頗る精巧に造られてゐて、ほんたうの人間のやうだと勝藏もふだんから驚嘆してゐたのであるが、それを今度の役に立てることになつて、ロイドはその首を打ち砕いた。喉の切口や頬のあたりには糊紅をしたゝか

である。江戸ではまだこの新手を知るまいと思つたので、かれらはその首をかゝへ出して神田や深川で例の軍用金を徴収した。さうして、一晚のうちに首尾よく二百五十兩を稼いだので、二八はすぐに吉原へ繰込んだが、その遊びが何うも面白くなかつた。やつぱり神奈川がいゝと勝藏が云ひ出すと、寅吉も同感であつた。神奈川の遊びの味を忘れられない彼等は、からだの危いのを知りながら又もや港崎町へ引返してくると、岩龜樓でロイドに出逢つた。

ロイドはかれらの顔を見ると、すぐに蠟人形をかへしてくれと迫つた。こゝには持つてゐないと云つても、ロイドは承知しなかつた。人出入りの多いところでそんなことを云ひ合つてゐて、萬一人の耳に這入つたらおたがひの身の破滅であるから、兎もかくも表へ出てくれと勝藏が云ふと、ロイドは一足先に出て往來に待つてゐた。勝藏と寅吉もつゞいて出た。三人は一緒に大門を出て、暗い路をたどりながら話した。勝藏はもう少し人形をこちらへ貸して置いてくれ、さうすれば二三百兩の金をつけて戻すと云つたが、ロイドはそれを信用しなかつた。無齒で人のものを持つてゆくやうなお前達はその約束を實行する筈がないと彼は云つた。しかしロイドの方にも同類の弱味があるので、勝藏は多寡をくゝつて取合はなかつた。三人のあひだには遂に同士討の格闘が起つた。かれらは自分達のうしろに黒い影の附纏つてゐるのを知らなかつた。

半七の繩にかゝつて、勝藏と寅吉は白狀した。かれらも最初は強情を張つてゐたのであるが、舶來の人形の首——この一句に膽を挫がれて、脆くも一切の秘密を吐き出してしまつたのであつた。

それについて、半七老人はわたしに斯う語つた。

「まへにも申す通り、異人の首がむやみに手に入るわけのものぢやあるまい。若しほんたうに首を取つたとすれば一大事で、疾うに奉行所の耳へも這入つてゐる筈です。だが、偽首となると髪の毛がわからない。その紅い毛は日本人の毛ぢやあない。と云つて、獸の毛でもない。勿論唐蜀黍でもないと云ふ。そこでわたくしは舶來の人形ではないかと不圖考へたんです。その前の年に横濱へ行つて、實によく出来てゐる舶來の人形を見せられたことがありますから、この種はどうも横濱から出てゐるらしいと思つて、乗り出してみると案の通りでした。勝藏と寅吉はなかく強情を張つてゐましたが、わたくしが唯一言「貴様たちが商賣道具につかつてゐる舶來の人形はどこから持ち出した。あのロイドから借りて来たか。」と云ひますと、奴等は蒼くなつて顫へ出して、みんなべら／＼としやべつてしまひましたよ。ふたりは死罪になりました。ロイドは外國人

ですから、うつかりと手をつけるわけにも行かなかつたんですが、同類ふたりが擧げられたのを聞いて、ピストルで自殺したさうです。人形の首は深川の寅吉の家の床下に隠してあつたのを探し出して、丸井と近江屋の番頭をよび出して見せますと、まったくそれに相違ないと申立てました。その首は参考のために保存して置かうといふ意見もあつたんですが、たうとう叩き毀してしまつたと云ふことです。」

あま酒賣

「また怪談ですかえ。」と、半七老人は笑つた。「時候は秋で、今夜は雨がふる。まつたくあつらへ向きに出て来るんですが、こつちに何うもおあつらへ向きの種がないんですよ。なるほど、今とちがつて江戸時代には怪談が澤山ありました。わたくしも色々な話をきいてゐますが、商賣の方で手がけた事件に怪談といふのは少いものです。いつかお話をした津國屋だつて、大詰へ行くとあれです。」

「しかしあの話は面白うござんしたよ。」と、わたしは云つた。「あんな話はありませんか。」
 「さあ。」と、老人は首をかしげてかんがへてゐた。「あれとは又、すこし行方が違ひますがね。こんな變な話がありましたよ。これはわたくしにも本當のことがよく判らないんですがね。」
 「それはどんなことでした。」と、わたしは催促するやうに云つた。

「まあ、待つてください。あなたはどうも気がみじかい。」
老人は人をじらすやうに悠々と茶をのみはじめた。秋の雨はひしゃく、云ふやうな音をたて、降つてゐた。

「よく降りますね。」

外の雨に耳をかたむけて、あたまの上の電燈をちよつと仰いで、老人はやがて口を切つた。

「安政四年の正月から三月にかけて可怪なことを云ひ觸らすものが出来たんです。それはどういふ事件かと云ふと、毎日暮六つ——俗にいふ「逢魔が時」の刻限から、ひとりの婆さんが甘酒を賣りに出る。女のことですから天秤をかつぐのぢやありません、穢い風呂敷につゝんだ箱を肩に引つけて、あま酒の固練りと云つて賣りあるく。それだけならば別に不思議はないんですが、この婆さんは決して晝間に出て来ない。いつでも日が暮れて、寺々のゆふ六つの鐘が鳴り出すと、丁度それを合圖のやうにどこからかふらふらと出て来る。いや、それだけならまだ不思議といふ段には至らないんですが、うっかりその婆さんのそばへ寄ると、屹と病人になつて、軽いのも七日や十日は寝る。ひどいのは死んでしまふ。實におそろしい話です。その噂がそれからそれへと傳はつて、氣の弱いものは逢魔が時を過ぎると錢湯へ行かないといふ始末。今日の人達はそんな馬鹿な事があるものかと一口に云つてしまふでせうが、その頃の人間はみんな正直ですから、そんな噂を聞くと慄毛をふるつて怖がります。しかも論より證據、その婆さんに出逢つて煩ひつた者が幾人もあるんだから仕方がありません。あなた方はそれをどう思ひます。」

私にはすぐに返事が出来ないで、たゞ黙つて相手の顔を見つめてゐると、老人は左もこそと云つたやうな顔をして、しづかにその怪談を説きはじめた。

その怪しい婆さんを見た者の説明によると、かれはもう七十を越えてゐるらしい。麻のやうに白く黄い髪を手拭につゝんで、頭のうしろで、しっかりと結んでゐた。筒袖かとも思はれるやうな袂のせまい袷の上に、手織縞のやうな綿入れの袖無し半纏をきて、片袂を端折つて藁草履をはいてゐるが、その草履の音が忌にびしやびしやと響くと云ふことであつた。しかしその人相をよく見識つてゐる者がない。かれに一度出逢つたものも、うす暗いなかに浮き出してゐる梟のやうな大きい眼、鳶の口嘴のやうに尖つた鼻、骸骨のやうな白い黄い齒、それを別々に記憶してゐるばかりで、それを一つにまとめて人間らしい者の顔をかながへ出すことは出来なかつた。

かれは唯ふらくと迷ひ歩いてゐるのではない、あま酒を賣つてゐるのである。なんにも知らず

にその甘酒を買つた者も澤山あつたが、その甘酒に中毒したものはなかつた。又その甘酒を買つた者がことごとく病みついたと云ふわけでもなかつた。往來でうつかり出逢つた者のうちでも、なんの祟も無しに済んだものもあつた。つまりめい／＼の運次第で、ある者は祟られ、あるものは無難であつた。いづれにしても婆さんの方からは何事を仕向けるのでもない。たゞ黙つてゆき違ふばかりで、不運の者はその一刹那におそろしい災難に附纏はれるのであつた。

眼にも見えないその怪異に取憑れたものは、最初に一種の瘧疾にかゝつたやうに、時々ひどい悪寒がして苦しみ悩むのである。それが三日四日を過ぎると更に怪しい症状をあらはして來て、病人はうつむいて兩足を長くのばし、兩手を腰の方へ長く垂れて、さながら魚の泳ぐやうな、蛇の蜿くるやうな奇怪な形をして這ひまはる。さりとて家中を這ひまはるのでもない。大抵は敷蒲團の上を境として、その上を前へうしろへ、右へ左へ蜿打つのである。それが魚といふよりは寧ろ蛇に近いので、看病の人たちは皆うす氣味悪がつた。思ひなしか病人の眼は蛇のやうにも忌らしくみえて、口からは時々紅い舌をへらくと吐く。かうした氣味の悪い症状を三日五日もつゞけた後に、病人の熱は忘れたやうに冷めてけろりと本復するが、病中のことはなんにも記憶してゐない。なにを訊いても知らないといふ。併しそれらは軽い方で、重いになるとその

奇怪の症状を幾日もつゞけてゐるうちに、たうとう病み疲れて漢搔死の淺ましい終りを遂げるのもあつた。それが僅かに一人や二人であつたならば、蛇を殺した祟りとも云はれさうなことであつたが、なにをいふにも大勢であるために、その病人をことごとく蛇を殺した人間と認めるわけには行かなかつた。殊にそのなかには蛇を殺すどころか、繪に描いた十二支の蛇を見てさへも身をすくめるやうな若い娘達もあつたので、蛇の祟りと決めてしまふことは出来なかつた。

「と云つても、あの蜿くる姿はどうしても蛇だ。」

こつちに祟られるやうなおぼえがなくても、向うから祟るのであらう。蛇にみこまれるといふ傳説は昔から澤山ある。どう考へてもあの婆んはやはり蛇の化身で、なにかの意味で或男やある女を魅むに相違ない。この説が結局は勝を占めて、怪しい老婆の正體は蛇であると決められてしまつた。それが更に尾鱗を添へて、ある剛膽な男がそつと彼の婆さんのあとをつけて行くと、かれは不忍池の水を渡つてどこへか姿を隠したなどと、見て來たやうに吹聴する者もあらはれて來た。不忍の辨天に參詣して巳の日の御守をうけて來たものは、その禍を逃れることが出来るなど、まことしやかに説明する者もあらはれた。

それが町方の耳に這入ると、役人達も打つちやつて置くわけには行かなくなつた。由來、かや

うな怪しい風説を流布して世間をさわがす者は、それ〴〵處罰されるのがこの時代の掟であつたが、それが跡方もない風説とのみ認められないので、先づその本人のあま酒賣を詮議することになつた。しかし彼女の立廻る場所がどの方面とも限られてゐないので、江戸中の岡つ引一同に對してかれの素性あらためを命ぜられ、次第によつては即座に召捕つても苦しからずと云ふことであつた。

八町堀同心伊丹文五郎は半七をよんで囁いた。

「今度の一件を貴様はどう思ふか知らねえが、悪くすると磔のお仕置ものだぞ。その積りでしつかり遣つてくれ。」

「クルスでございますかえ。」

半七は人差指で十字の形を空に書いてみせると、文五郎はうなづいた。

「さすがに貴様は眼が高い。蛇の祟なんぞはどうも眞に受けられねえ。ひよつとすると切支丹だ。奴等がなにか邪法を行ふのかも知れねえから、そこへ見當をつけて穿鑿してみろ。」

こつちも内々そこに目星をつけたので、半七はすぐに受合つて歸つた。併しどこから先づ手を着けていゝのか、彼も流石に方角が立たないので、家へ歸つてからも眼をとちて考へてゐたが、

やがて臺所の方にむかつて聲をかけた。

「おい、誰かそこにゐるか。」

「あい。」

臺所につゞいた六疊の間に、大きい火鉢を取りまいてゐた善八と幸次郎とがばら〴〵と起つて來た。

「おめえ達はあま酒の婆さんを知つてゐるか。」と、半七は訊いた。

「出つくはしたことはありませんが、噂だけは聞いてゐます。」と、善八は答へた。

「伊丹の旦那からの御指圖だ。どうにかしにやあならねえ。この一件は俺ばかりぢやねえ、みんなも總がかりで遣る仕事だからなんでも早い勝だ。そこであんまり智慧のねえ話だが、まあお定まりの段取りで仕方がねえ。お前達はこれから手わけをして、甘酒の卸賣をする間屋をみんな探してくれ。婆だつて自分の家であま酒を作るわけぢやあるめえ。屹とどこかで毎日仕入れて來るんだらうから、さういふ變な婆が來るか來ねえか、方々の店で聞合はせてくれ。こんなことは誰もがみんな手をつけることだらうが、こつちも心得のために一應は念をついて置かにやならねえ。」

ふたりの子分を出して遣つて、半七は午飯を食つてしまふと、三月末の春の日はうららかに暗れてゐた。家にぼんやりと坐つてもゐられないので、半七はどこを的とも無しに神田の家を出て、百本杭から吾妻橋の方角へ、大川端をぶらぶらと歩いてゆくと、向島の櫻はまだ青葉にはなり切らないので、遅い花見らしい男や女の群がときどき通つた。その賑やかな群のあひだを苦勞ありさうにしよんぼりとうつむき勝に歩いてゐる一人の若い男が、その蒼ざめた顔をあげて半七の姿をふと見付けると、なんだか臆病らしい眼を、ながら彼のあとを窺とつけて来るらしかつた。

最初は素知らぬ顔をしてゐたが、こつちの横顔をぬすむやうに窺ひながら三四間ほども附いて来るので、半七も勃然として立停まつた。

「おい、大哥。私になにか用でもあるのかえ。花見時に人の腰を狙つてくると、巾着切りと間違へられるぜ。」

睨み付けられて男はいよく怯えたらしい低い聲で、ごめんなさいと丁寧に挨拶して、そのまゝそこに立竦んでしまつた。氣障な野郎だと思ひながら、半七もそのまゝ通り過ぎたが、よほど行き過ぎてから彼はふと考へた。あの若い男の人相や風體は巾着切りなどではないらしい。勿論

こつちでは見覚えのない男であるが、或は向うではこつちの顔を見知つてゐて、なにか話し掛けようとしながらも、つい氣怯れがしてそのまゝに云ひそびれてしまつたのではあるまいか。もしさうならば暴い詞をかけるのではなかつたと、半七は少し氣の毒になつて元來た方をふり返ると、男の姿はもう見えなかつた。

二

それから二日目の七つ下り（午後四時過ぎ）に、善八と幸次郎が半七の長火鉢のまへに鼻をそろへた。二人はほかの子分達とも申合せて、江戸中の問屋を片端から調べてあるいたが、その怪しい婆さんは毎日おなじ家へ仕入れに來ないらしい。最初のうちは本所四つ目の大阪屋といふ店へ半月以上もつゞけて來たが、その後ばつたりと來なくなつた。近頃ではやはり四つ目の水戸屋といふ店へ三日ほどつゞいて來たが、水戸屋ではかれの噂を知つてゐるので、若い者のひとりが見えがくれにそのあとを尾けると、かれは浅草の方角に向つて遅々とたどつて行つた。併しどこまで行つても際限がないので、こつちも仕舞には根負けがして途中から空しく引返して來た。かういふ譯で、かれの居所はたしかに突き留められなかつた。こつちに尾けられたことを彼女はお

そらく覺つたのであらう、そのあくる日から彼女はその瘦せた姿を水戸屋の店先に見せなくなつた。それは三月初めのことで、その後はどこの問屋を立廻つてゐるか、誰も知つてゐる者はないとのことであつた。

「ところで、親分。ついでに妙なことを聞き出して來たんですがね。」と、善八は云つた。「やつぱりその婆にかゝり合のあることなんですが、なんでも五六日まへの午過ぎださうです。淺草の馬道に河内屋といふ質屋があります。その女中のお熊といふのが近所へ使に出ると、眞蒼になつて内へかけ込んで來て、自分の三疊の部屋をびつしやり閉切つてしまつて小さくなつて竦んでゐたさうです。なんだか變だと思つてゐると、誰が見つけたか知らねえが、河内屋の裏口に變な婆が來てそつと内をのぞいてゐると云ふので、番頭や小僧が行つて見ると、なるほど忌に影のうすい婆が突つ立つてゐる。變だとは思つたが、眞晝間のことだから大きな聲で呶鳴り付けると、婆は忌な眼をしてこつちをじつと見たばかりで、素直に何處へか行つてしまつた。行つてしまつたのは好いが、その晩から番頭ひとり小僧一人が瘡疾のやうに急にふるへ出して、熱が高くなる、蒲團の上をのたくる。醫師にみせても容態はわからない。相手が變な婆であつたもんだから、それも屹と例のあま酒婆だつたといふことで家中のものは悚毛をふるつてゐるさうです。その

の時に出てみたのは、番頭ふたりと小僧一人だつたんですが、ひとりの番頭だけは運よく助かつたとみえて、今になんにも祟がなく、ほかの二人が人身御供にあがつた譯なんですが、妙なこともあるぢやありませんか。してみると、その婆は夜ばかりでなく、晝間でもそこらにうろついてゐるに相違ねえと云ふので、近所の者もみんな蒼くなつてゐるんですよ。」

「さうして、そのお熊といふ女はどうした。それには別條ねえのか。」

「その女中にはなんにも變つたことはないさうです。なんでも使に行つて歸つてくると、その途中から變な婆がつけて來て、薄つ氣味が悪くつて堪らねえので、一生懸命に逃げて來たんだと云ふことです。」

「お前はその女を見たのか。」

「見ません。なんでも河内屋へ出入りの小間物屋の世話で住み込んだ女で、年は十九か廿歳くらいだが、臺所働きには些つと惜いやうな代物ださうですよ。」

「その小間物屋といふのは何といふ奴だ。」と、半七はまた訊いた。

「その小間物屋はわたしが識つてゐます。」と、幸次郎は代つて答へた。「徳といふ野郎で、徳三郎か徳兵衛か知りませんが、まだ二十二三の生つ白い奴です。道樂者で江戸にもゐられねえんで、

小間物をついで旅商ひをしてゐたんですが、去年の七八月ごろから江戸へまた舞ひ戻つて来て、どこかの二階借りをして相變らず小間物の荷を擔ぎあるいてゐるやうです。」

「さうか。よし、判つた。ぢやあ、お前はその徳といふ野郎の居所をさがして引つ張つて来てくれ。おれはその馬道の質屋へ行つて、もう少し種を洗つてくるから。」

「わつしも行きませうか。」と、善八は顔をつき出した。

「さうよ。又どんな用がねえとも限らねえ。一緒にあゆんでくれ。」

「ようがす。」

善八を案内者につれて、半七が馬道へゆき着いた頃には、このごろの長い日ももう暮れかゝつて、聖天の森の影もどんよりと陰つてゐた。

「なんだか忌な空合になつて来ましたね。」と、善八は空を仰ぎながら云つた。

「む。まつたく忌な空だ。今夜は一つ降るかも知れねえ。」

旋風のやうな風が俄にどつと吹き出して、往來には眞白な砂煙が渦をまいて轉げまはつた。

ふたりは片袖で顔を掩ひながら、町家の軒下を傳つて歩いてゐると、夕ぐれの空の色はいよゝく黒くなつて来て、どこかで雷の聲がきこえた。

「おや、雷が鳴る。妙な陽氣だな。」

そのうちに、ふたりはもう河内屋の暖簾の前に来たので、善八はすぐに格子をくゞつて、帳場にゐる番頭に聲をかけた。

「もし、番頭さん。親分が少し用があるんだ。こゝぢやあいけねえから、表までちよいと顔を貸してくんねえ。」

「はい、はい。」

四十五六の番頭か帳場を出て来て、暖簾の外に立つてゐる半七に挨拶した。

「お前さんがこゝの番頭さんかえ。」と、半七は手拭で顔の砂をはらひながら訊いた。

「左様でございます。利八と申して河内屋に三十四年勤めてをります。どうぞお見識り置きを……。」

「そこで利八さん。早速だがお前さんに些つと訊きたいことがある。この間、こつちの裏口を變な婆さんが覗いたとか云ふぢやありませんか。」

「はい。とんだ災難で、番頭ひとり小僧一人が今にどつと寝付いてをります。」

利八の話によると、番頭と小僧はけふまで熱が下らないで、生殺しの蛇のやうに蛻うち廻つて

ある。奉公人どもは氣味を悪がつて誰も寄附かないので、主人と自分とが代る／＼に看病してゐるが、なか／＼三日や四日では癒りさうもない。世間の噂を綜合してかんがへると、その時の怪しい婆さんはどうも彼の甘酒賣らしく思はれる。實はきのふの午過ぎにも、その婆さんらしい女が店の前をうろ付いてゐるのを近所のものが認めたとか云ふので、この上にも重ねてどんな禍があらうかと、自分たちも内々恐れてゐると、かれは小聲で半七に訴へた。

「それからお前さんの家にお熊といふ女があるさうですね。」

「はい。西國生まれださうで、年は明けて十九でございます。丁度去年の九月、今までの奉公人が急病で暇をとりまして、出代り時でもないもんですから、差當りその代りの女に困つて居りますところへ、手前方へ質を置きにまゐります徳三郎といふ小間物屋さんが、時にこんな女があるから使つてくれないかと申しますので、丁度幸ひと存じて雇ひ入れましたやうな譯でございますが、人柄も悪くなし、人間も正直でよく働きます。で、これはよい奉公人を置きあてたと申して、主人を始めわたくし共も喜んでをります。」

「こつちに親戚でもあるんですかえ。」

「なんでも芝の方の御屋敷の足輕を頼つてまゐつたのださうでございます。と申しますと、まこ

とに不念のやうで恐れ入りますが、なにぶん手前どもでも困つてゐる矢先でもあり、徳さんが萬事をひき受けると申しますものですから、その上に委しくも身許を詮議いたしませんで……。」

と、利八は小鬚をかきながら答へた。

「その後、そのお熊になんにも變つた様子はないんですね。」

「別に變つたこともございせんが、一度その婆さんにあとを尾けられてから、表へ出るのをひどく忌がるので困ります。尤もそれは無理もありませんので、大抵の使にはほかの小僧を出して居りますが、當人も別に病氣といふわけでもございせんから、家の内ではいつもの通りに働いてをります。御用があるなら唯今呼んでまゐりませうか。」

「いや、呼んぢやあまづい。」と、半七は首を振つた。「うら口へまはつて窺と覗くわけにやあ行きませんか。」

「よろしうございます。丁度夕方でございますから、臺所ではたらいで居ります筈です。どうぞ隣の露地からお這入りください。」

利八に教へられて、半七はせまい露地の溝板を踏んでゆくと、この二三日なまあたゝかい天氣がつゞいたので、そこらではもう早い蚊の唸る聲がきこえた。半七は手拭を取つて頬被りをし

て、草履の足音を忍ばせながら、河内屋の水口に身をよせてみると、ひとりの若い女が手桶をさげて出て来た。うす暗い夕闇のなかにもその白い顔だけは浮き出してみえた。と思ふ途端に、彼女はそこに忍んでゐる半七の姿を見付けてあわただしく小聲で訊いた。

「徳さんかえ。」

徳さんといふ男の地聲を知らないで、半七は早速に作り聲をするわけにも行かなかつた。かれは頼被りのまゝで無言にうなづく、若い女は摺り寄つて来た。

「おまへさん、この頃どうして来てくれないの。あれほど約束したのを忘れたのかえ。」

こつちが矢張り黙つてゐるので、女はすこし可怪く思つたらしい、だしぬけに片手をのばして半七の頼被りを引き剥つた。うす暗いなかでもその人違ひをすぐに発見したらしく、かれはあれつと叫びながら手桶を抛り出して内へ逃込んだ。

手拭も一緒に抛り出されたので、半七はそれを拾つて泥を掃つてみると、その頭の上を大きい雷ががら／＼と鳴つて通つた。

三

表へ出ると、利八と善八とが待つてゐた。今鳴つた雷の音につれて、雹のやうな大粒の雨がぱら／＼と落ちて来たので、利八はしばらく雨やどりをして行けと勧めたが、半七はそれを斷つて、そのかはりに番傘を一本借りて出た。

「親分、相合傘ぢやあ凌げさうもありませんぜ。」と、善八は云つた。

「まあ、仕方がねえ。尻でも端折れ。」

雷はだん／＼に烈しくなつて、傘をたゞき破るかと思ふやうな大雨がどろ／＼と降りそゞいで来た。ふたりの鼻のさきに青い稲妻が走つた。

「親分、いけねえ。意氣地がねえやうだが、もう歩かれねえ。」

善八がひどく雷を嫌ふことを半七もかねて知つてゐると、時刻も丁度暮六つ頃であるので、かれは雨宿りながらにそこらの小料理屋へ這入つて、兎もかくも夕飯を食ふことにしたが、雷はそれから小一晌も鳴りつゞいたので、善八は口唇の色をかへて縮み上つてしまつた。彼は眼の前にならんでゐる膳を見ながら、好きな酒の猪口をも取らなかつた。話を仕掛けても碌々に返事もしなかつた。

小間物屋の徳三郎とお熊との關係はもう判つた。徳三郎は旅商ひに出てゐるあひだに、どこか

でお熊と馴染になつて、かれを誘ひ出して江戸へ歸つて来たが、差當りは女の始末に困つて、河内屋へ奉公に住み込ませたに相違ない。それと同時に、このあひだ大川端で自分に聲をかけようとした若い男は、その徳三郎であつたらしくも思はれて来た。かれは蒼ざめた顔をして、自分に何事を訴へようとしたのか。半七は色々に想像を描いてみると、雷の音もだん／＼に遠ざかつて善八は生き返つたやうに元氣が出た。

「親分、すまねえ。先づこれではつとしゃした。まだ移り換へもしねえうちから酷い目に逢ひましたよ。」

「い、鹽梅に小降りになつたやうだ。早く飯を食つてしまへ。」

早々に飯を食つてそこを出ると、夜は五つ（午後八時）を過ぎてゐるらしかつた。雨はもう小降りになつてゐるが、弱い稲妻はまだ善八をおびやかすやうに時々ふたりの傘の上を滑つて通つた。雷門の方へ爪先を向けた半七は急に立停まつた。

「おい、もう一度河内屋へ行つて見ようぢやねえか。考へると、どうも少し氣になることがある。もう雨もやんだから、この傘を返しながらお熊といふ女はどうしてゐるか訊いてくれ。」

二人はまた引返して河内屋へ行つた。善八だけが内へ這入つて、お熊はどうしてゐるかと番頭に訊くと、利八はやはり臺所にある筈だと答へた。しかし念のために見て來ませうと云つて、かれは帳場から起つて行つたが、やがてあわたゞしく戻つて來て、お熊の姿はどこにも見えないと云つた。善八もおどろいて、すぐに表へ飛び出して注進すると、半七は舌打ちした。

「まづいことをしたな。どうもあの女が可怪いと思つたんだ。いつそあの時すぐに引き擧げてしまへばよかつた。畜生、どこへ行つたらう。」

どつちへ行つたかその方角が立たないので、二人はぼんやりと門口に立つてゐると、どこかで女の聲がきこえた。

「甘酒や、あま酒の固練り——。」

物に魔はれたやうに二人はぎよつとした。さうして、その聲のする方角を一度に透してみると、今の強い雨でこの店も大戸を半分ぐらゐは閉めてしまつたが、そのあひだから流れ出して來る灯のひかりは往來のぬかるみを薄白く照して、雷門の方から跣足でびし／＼あるいて來る女の黒い影がまぼろしのやうに浮いてみえた。世間にあま酒を賣つてあるくものは幾人もある。殊にその聲があまりに若くしく牙えてひゞくので、半七は少し躊躇したが、兎もかくも善八を促して路ばたの軒下に身をひそめてゐると、聲の主はだん／＼に近寄つて來た。かれはあま酒

の箱を肩にかけて、びしょ濡れになつてゐるらしかつた。ふたりは呼吸をのんで窺つてゐると、かれは河内屋のまへに来て吸ひ付けられたやうに俄に立停まつた。聲の若々しいのに似合はず、彼女がたしかに老女であることを知つたときに、半七の胸は浪を打つた。

かれは先づ河内屋の表をうかゞつて、更に露地口の方へまはつた。半七もそつと軒下をぬけ出して、露地の口からのぞいて見ると、彼女は河内屋の水口にたゞずんで、しばらく内を窺つてゐるらしかつたが、やがて又引返して表へ出て來た。こゝですぐに取押さへようか、もう些つと放し飼にして置いてその成行を見とゞけようかと、半七は鳥渡思案したが、結局黙つてそのあとを尾けてゆくことにした。善八もつゞいて歩き出した。二人はさつきから跣足になつてゐるので、雨あがりのぬかるみを踏んでゆく足音が相手の注意をひくのを恐れて、わざと五六間も引き退つて忍んで行つた。

河内屋の露地を出てから、彼女はあま酒の固練りを呼ばなくなつた。かれは往來のまん中を黙つて俯向いてゆくらしかつた。

「親分。たしかに彼女でせうね。」と、善八はさゝやいた。

「河内屋を覗いて行つたんだから、あの婆に相違ねえ。」

云ふうちに彼女の姿は消えるやうに隠れてしまつたので、ふたりは又おどろいた。善八は少しおぢ氣が付いたやうに立竦んだ。吉原へゆくらしい駕籠が二挺つゞいて飛ぶやうにこゝを駆けぬけて通ると、その提灯の火に照されて、かれの瘦せた姿は又ぼんやりと暗やみの底から浮き出した。その途端に、かれは思ひ出したやうに一聲呼んだ。

「あま酒の固練り——。」

この聲がしづかな夜の往來に冴えてひびくと、通りぬけた駕籠の一挺が俄に停まつた。ひとりの武士らしい男が垂簾を刎ねて出て、彼女のそばへつか／＼と進み寄つた。さうしてなにか小聲で二言三言押問答をしてゐたかと思ふと、白い双のひかりが提灯の火にきらりと映つて、婆は抜打ちに斬り倒された。かれは聲も立てないで、枯木を倒したやうに泥濘のなかに横はつた。武士は刀を納めて再び駕籠に乗らうとするところへ、半七は駈寄つてその棒鼻を遮つた。

「しばらくお待ちくださいまし。わたくしは町方の者でございます。只今のは試し斬でございますか。それとも何か仔細がございますか。」

たとひそれが武士であらうとも、みだりに試し斬などをすれば立派な罪人である。次第によつては、かれも切腹の罪科を免れない。相手を斬つて巧く逃げ負せればいゝが、それが町方の眼に

止まつたりすると、甚だ面倒になる。飛んだところを見つけられて、武士はひどく迷惑したらしく、しばらくは口籠つて躊躇してゐると、まへの駕籠からも一人の武士が出て来た。どちらも若い武士であつたが、新らしく出て来た一人は幾らか物慣れてゐるらしく、半七にむかつて我々は決して試し斬ではないと辯解した。併しその仔細を云ふわけには行かない。屋敷の名を明かすわけにも行かない。どうかこのまゝ見逃してくれと彼はしきりに頼んだが、半七は素直に承知しなかつた。一旦自分の眼にとまつた以上、見すゝの人殺しを見逃すことは出来ないといひ張つた。それは勿論正當の理窟であつたが、もう一つには折角こゝまで追ひつめて来た大事の捕物を、横合から不意に出て来て玉無しにされてしまつたと云ふ置腹がまじつて、半七は飽までも意地悪くこの武士を窘めにかゝつた。

窘められて、相手はいよく困つたらしく、結局は金づくで内済にしたいやうなことで云ひ出したが、半七はどうしても肯かないで、たうとう彼等二人は再び駕籠にのせて、無理無體に近所の自身番へ引摺つて行つた。婆を斬つた若い武士はもう覺悟を決めてゐるらしかつた。

「たとひなんと申されても、屋敷の名を明かすわけにはまゐらぬ。達て役人に引渡すとあれば、手前はこれにて切腹いたす。」

かうなると、半七もなんだか可哀想にもなつて来て、いつまでも彼等を窘めてもゐられなくなつた。かれは他の武士を表へよび出して、諭すやうに囁いた。

「あなた方が辻斬でないことは私も大抵察してゐます。ふたり連れで駕籠にのつて、辻斬をしてあるのは珍しい。それにさつき見てゐると、あの婆さんが甘酒の固練りといふ聲を聞くと、急に駕籠を停めさせて彼方のお武家が出て行つた。それにはなにか譯があるらしい。あなた方はあの婆さんを御存じなんですかえ。御存じならば話してください。その譯さへわかれば、なにも無理に御屋敷の名を聞くにも及びません、實を云ふと、わたくしはこの間からあの婆さんを尾けてゐるんです。それを横合からだしぬけにばつさり遣られてしまつちやあ私の役目が立ちません。そこを察して正直に話してください。くどくも云ふやうだが、譯さへわかれば決して御迷惑はかけませんから。」

武士はそれでもまだ澁つてゐたが、半七から色々に説き賺されて、彼もやうく納得したらしく、内へ引返して一方の武士と何かしばらく囁き合つてゐるが、結局思ひ切つてその事情を打明けることになつた。

「では、屋敷の名は申さんでも宜しうござるな。」と、彼はかさねて念を押した。

「よろしうございます。」

なんとかして、彼等に口を明かせなければならぬので、その白状を聞かないまへに半七は安受合に受合つてしまった。さうして、これから彼等がどんな祕密を打明けるかと、兩方の耳を引立てゝみると、恰もそこへ足早にかけ込んで来た者があつた。

「あゝ、親分。好いところに來てゐて呉んなすつた。小間物屋の野郎め、飛んだことをしやあがつて……。女を殺しやあがつた。」

それは小間物屋の居所をさがしに行つた幸次郎であつた。

四

幸次郎は小間物屋の徳三郎の居所をさがして、田町に近い荒物屋の二階へたづねてゆくと、かれは生憎に留守であつた。また出直して來ようと思つて表へ出ると、恰も彼の雷雨が襲つて來たので、近所の知人の家へかけ込んで雨やどりをして、小降りになるのを待つて再びたづねてゆくと、下の婆さんはゐなかつた。そつと窺ふと、二階には微に人の唸るやうな聲がきこえたので、彼は猶豫なしに駈けあがると、うす暗い行燈のまへに、若い女が血みどろになつて俯向き

に倒れてゐた。そのそばには徳三郎が血に染みた短刀を握つて、喪心したやうにぼんやりと坐つてゐた。どう見ても、かれが女を殺したとしか思へないので、幸次郎はその刃物をたゞき落してすぐに繩をかけた。徳三郎は別に抵抗もしなかつた。

倒れてゐる女をあらためると、まだ微に息が通つてゐるらしかつたので、幸次郎は近所のものと呼びあつめて醫師を迎ひに遣つたが、その醫師の來ないうちに女は息が絶えてしまった。その出來事を報告するために、幸次郎は細付の徳三郎を近所のものに張番させて、とりあへずこゝへ駈付けて來たのであつた。

婆殺しと女殺しと二つの事件が同時に出來して、しかもそれが何かの糸を引いてゐるらしくも思はれたので、半七はすぐに徳三郎を自身番へひき出させた。眞蒼になつて牽かれて來た徳三郎は、たしかに大川端で出逢つた若い男であつた。

「おい、徳三郎。おれの顔を識つてゐるか。」

徳三郎は無言で頭を下げた。

「おれはまだ見ねえが、殺した女は河内屋のお熊だらう。とんでもねえことを仕出來しやあがつた。手前なんで女を殺した。素直に申立てろ。」

「親分さん。それはお目違ひでございます。」と。徳三郎は喘ぐやうに云つた。「わたくしは決して女を殺しは致しません。お熊は自分で乳の下を突きましたのでございます。わたくしが慌てゝ刃物をもぎ取りましたけれど、もう間に合ひませんでございました。」

「その短刀は女が持つてゐたのか。」

「いえ、わたくしの品で……。」と徳三郎は云ひ淀んだ。

「はつきり云へ。」と、半七は叱つた。「手前の短刀をどうして女に渡したんだ。手前もまた商賣柄に似合はねえ、なんで短刀なんぞを持つてゐるんだ。」

「はい。」

「何がはいだ。はいや炭團ぢや判らねえ。しつかり物を云へ。お慈悲に冷てえ水を一杯のまして遣るから、逆上せを下げた上でおちついて申立てろ。いゝか。」

善八が持つて來た茶碗の水を飲みほして、徳三郎は初めて一切の事情をときれくに申立てた。かれは浅草で相當な小間物屋の忰に生まれたが、放蕩のために身代を潰して、一旦は江戸を立退くことになつた。やはり小間物の荷をかついで、旅商ひに諸國を流れ渡つてゐるうちに、彼は京大阪から中國を経て九州路まで踏み込んだ。さうして、ある城下の町にしばらく足を止めて

ゐるあひだに、かれはその城下から一里ばかり離れた小さい村の若い女と親しくなつた。女は彼のお熊であつた。お熊はお綱といふ老母と二人暮しであつたが、この村の習ひとして他土地のものとは決して婚姻を許さない掟になつてゐるので、お熊は母をすてゝ逃げた。徳三郎もはじめは旅先のいたづらに過ぎない色事で、その女を連れ出して逃げるほどの執心もなかつたのであるが、かれに魅まれたが最後、もう何うしても逃げることに出来ない因果に絆られてゐた。お熊の家はこの土地でいふ蛇神の血統であつた。

こゝらには蛇神といふ怖ろしい血統があつた。その血をうけて生まれた者は一種微妙の魔力を有つてゐて、それらの眼に強く睨まれるとその相手はたちまち大熱に犯される。單にそればかりでなく、熱に悶えて苦んでさながら蛇のやうに蜿うちまはる。蛇神の名はそれから起つたのである。しかし彼等はいかに眼を大きくして睨んだからと云つて、それだけでは決して相手に感應させるわけには行かない。それにはかならず強い感情を伴はなければならぬ。妬む、憎む、怨む、羨む、呪ふ、慕ふ、哀む、喜ぶ、懼れる、さうした喜怒哀樂の強い感情が漲つたときに、これらの眼の光は怖るべき魔力を以て初めて相手を魅することが出来るのである。したがつて、かれら自身も故意にその魔力を應用することは出来ない。あいつを一つ苦めて遣らうなどと悪戯半

分に睨んだところで、決してその効果はあらはれない。要するにそれは彼等の心の奥から湧き出してくる自然の作用で、自分自身にも無理に抑へることも出来ず、無理に働かせることも出来ず、唯その自然にまかせるより外はないのである。この村の者が他土地の者と結婚しないのも、この不思議な血統が重なる原因であつた。

徳三郎も初めてお熊に逢つたときに、この怪しい熱病に苦められて、お熊の手あつい看病をうけた。病が癒つてからその秘密を発見したが、今更どうすることも出来なかつた。捨て、逃げようとしても、お熊はどうしても離れない。それを無理にふり放さうとすれば、お熊の睨む眼が怖ろしかつた。もう一つには、女が蛇神の血統であることを自分から正直にうち會けて、どうぞ見捨て、くれるなど泣いて口説かれた時に、かれの心も弱くなつた。所詮はこれも因果とあきらめて、徳三郎はお熊を連れて逃げることに決心した。

かれの決心を強めた他の動機は、彼のおそろしい蛇神も箱根を越せば唯の人間になつてしまつて、なんの不思議を見せることも出来ないといふ傳説を土地の老人から聞き知つた爲であつた。それならば左のみ恐れることもないといふ傳説を土地の老人から聞き知つた爲であつた。九州の蛇神も江戸の土を踏めば唯の女になつたらしく、氣のせるか彼女の腫のひかりも柔かになつた。

お熊は容貌のよい、情の深い女で、ほかに頼りのない身の上を男に投げかけて、かれ一人を杖とも柱とも取纏つてゐるのを、徳三郎は慘らしくも思つた。かうして二人の愛情はいよく濃かになつたが、なにぶんにも小問物の擔ぎ商ひをしてゐる現在の男の瘦腕では、江戸のまん中で女と二人の口を養つてゆくのがむづかしいので、相談づくの上でしばらくは分れ／＼に働くことゝなつて、お熊は男の口入れで河内屋に住み込んだ。幸ひにその奉公先と徳三郎の宿とが遠くないので、お熊は主人の用の間をぬすんで時々男のところをたづねてゐた。

それで小半年は先づ無事に過したが、今年の春になつてこの若い二人の魂をおびやかすやうな事件が突然出来た。二月のなかばの夕方に徳三郎は商賣から歸る途中、浅草の廣徳寺前でひとりの婆さんに逢つた。婆さんはあま酒の固練りを賣つてゐたが、それはたしかにお熊の母のお綱であつた。彼女は眼捷く徳三郎を見つけて、つか／＼と寄つてその袂を引つ掴んで、娘はどこにゐるかすぐに返せと叫んだ。徳三郎は死神に出會つたよりも怖ろしくなつて、殆ど夢中であれを突き倒して逃げた。その晩から彼は大熱を發して、十日ばかりも蛇のやうに腕うち廻つて苦しんだ。

箱根を越せば蛇神の祟りはないと云ふものにはならなくなつた。お綱はわが子のゆくへを尋

ねて、九州から江戸まで遙々と追つて来たのであらう。その強い執着心を思ひやると、徳三郎はいよく怖ろしくなつて来たので、彼はお熊に因果をふくめて娘を母の手に戻さうと覺悟したが、お熊はどうしても肯かなかつた。男にわかれて國へ歸るほどならば、寧ろ死んでしまふと泣き狂ふので、徳三郎も持餘した。そのうちに怪しい甘酒賣の噂はだん／＼に高くなつて、それはお綱であることを徳三郎とお熊だけは知つてゐた。お熊は母に見付けられないやうにその出入りを注意してゐたが、徳三郎はどうかんがへても不安に堪へなかつた。世間の評判が高くなるほど彼の恐怖はいよく強くなつて、再びお綱に見つけられたが最後、今度こそはおそらく自分の命を奪られるであらうと恐れられた。かれは實に生きてゐる空もなかつた。

かうした不安の日を送るうちに、彼は大川端で偶然に半七に出逢つた。半七の方ではかれを識らなかつたが、徳三郎の方ではその顔を見識つてゐたので、いつその事情を何も彼もうち明けて彼の救ひを求めようかとも思つたが、やはり氣怯れがして到頭云ひそびれてしまつた。しかし運命はだん／＼に迫つて来た。お綱は根よく江戸中を探しまはつてゐるうちに、娘が河内屋に忍んでゐることを此頃いよく覺つたらしく、そこらに度々さまよつてゐるばかりか、現に河内屋の番頭や小僧が蛇神の祟りを受けたといふ事實を見せられて、徳三郎の恐怖はもう絶頂に達した。

彼は身のおそろしさの餘りに、更に怖ろしい決心をかためて、今度お綱に出逢つたらばいつそ彼女を殺してしまはうと思ひつめた。徳三郎は短刀を買つて、それを懐ろにして毎日商ひに出歩いてゐた。

彼が借りてゐる荒物屋の二階へ今夜もお熊が忍んで来て、二人にとつては重大の問題がまた繰返された。徳三郎は短刀を女にみせて、自分の最後の決心をうち明けた。しかし自分も好んでそんなことをしたくない、人を殺したことが露顯すれば自分も命をとられなければならない。こゝでお前がわたしのことを思ひ切つて、すなほに母の手に戻つてくれれば、三方が無事に済むのである。どうぞこれまでの縁とあきらめてくれと、彼は色々にお熊を説きなだめたが、女は強情に承知しなかつた。彼女は泣いて泣いて、ものすごいほど狂ひ立つて、いきなり男の短刀を奪ひ取つて、自分の乳の下に深く突き透したのである。蛇神の血をひいた若い女はかうして悲惨の死を遂げた。

「さりとては残念なこと。もう少し早くば、その娘だけは助けられたものを……。」と、ふたりの武士はこの悲しい戀物語を聞き終つて嘆息した。「この上はなにを隠さう。われ／＼はその蛇神の女と同國の者でござる。」

彼等もやはり西國の某藩士で、蛇神のことはかねて知つてゐた。このごろ江戸中をさわがす怪しい甘酒賣の女は、どうしても彼の蛇神に相違あるまいと江戸屋敷の者もみな鑑定してゐた。ついでには早晩その女が捕はれて、なにがし藩の領分内にはそんな奇怪な人種が棲んでゐるなどと云ひ傳へられては、結局當屋敷の外聞にもかゝはることであるから、見つけ次第に討ち果せと重役から若侍一同た對して内密に云ひ渡されてゐたので、かれら二人は今夜その使命を果したのであつた。しかし半七に對して、明らさまにその事情を説明するときは、自然に屋敷の名をも出さなければならぬのと、もう一つには時と場所が悪い、かれらはよし原へ遊びにゆく途中であつた。武士氣質の強い彼等の屋敷では、遊里に立入ることを嚴禁されてゐた。かれらは半七に意地わるく窘められて、屋敷の名や自分たちの身分を明かすよりも、寧ろ死を撰ばうと覺悟したのであつた。

「これでこの一件も落着きました。」と、半七老人は一息ついた。「かう譯が判つてみると、誰が科人といふのでもありません。その時代の習、武士もかういふ事情で斬つたと云ふことであれば、やかましく云ふわけにも行きません。わたくしもその事情を察して内分にすることにしました

が、八町堀の旦那だけには一通りを報告して置きました。徳三郎はこれぞといふ科もないんですが、なにしろ這奴が女を引つ張り出して來たのが本で、こんな騒ぎが出來したんですから、遠島にもなるべきところを江戸拂ひで軽く濟みました。さうして、もう一度旅へ出るつもりで、江戸をはなれますと、神奈川に泊まつた晩からまた俄に大熱を發して、たうとうその宿屋で藻掻死に死んでしまつたさうです。とんだ因果で可哀さうなことをしました。それでも徳三郎は本人ですから仕方がないとして、ほかの人達がなぜ祟られたのか判りません。おそらく前に云つたやうな理窟で、ふと摺れ違つたりした時に、向うで何か羨ましいとか小癩に障るとか思つて、じつと見つめると、すぐにこつちへ感じてしまふので、向うでは別に祟るといふほどの考へはなくても、自然にこつちが祟られるやうな事になつてしまつたのでせう。なんだか薄氣味の悪い話です。一體その蛇神といふのは何ういふものか、よく判りませんが、わたくしの懇意な者に九州の人がありまして、その人の話によりますと、四國の犬神、九州の蛇神、それは昔から名高いものださうです。嘘のやうなお話ですが、彼地にはまつたくかういふ不思議の家筋の者があつて、ほかの家では決してその家筋のものと縁組などをしなかつたと云ひます。それについてまだ色々な不思議のお話もあります。まあこのくらゐにして置ませう。むかしはこの國にも斯ういふ不思議

な傳説が澤山あつたのですが、今日ではそんな噂もまつたく絶えてしまひました。學者方に聞かせたら、それも一種の催眠術だとも云ふかも知れせんね。」

お照の父

—

「いつか向島でお約束をしましたことがありましたつけね。」

「お約束……。なんでしたつけ。」と、半七老人は笑ひながら首をかしげてゐた。

「そら、向島で河童と蛇の捕物のお話。あれを今日は是非うかゞひたいんです。」

「河童……。あゝ、なるほど、なるほど。あなたはどうも覚えがよい。あれはもう去年のことでしたらう。しかも去年の櫻時——とんだ保名の物狂ひですね。なにしろ、さう強情におぼえてゐられちやあ、泷もかなはない。かうなれば、はい、はい、申上げます、申上げます。これぢやあ何うも、あなたの方が十手を持つてゐるやうですね。はゝゝゝゝゝ。いや、冗談は措いて話ませう。御承知の通り、兩國の川開きは毎年五月の廿八日ときまつてゐたんですが、慶應の元年の五月には花火の催しがありませんでした。つまり世の中がさうぐしくなつたせいで、もうその

頃から江戸も末になりましたよ。」

老人は昔を忍び顔に話し出した。

「その廿八日の午過ぎでした。いつもの年ならわたくしも子分どもを連れて、兩國界隈を見廻らなければならぬんですが、今年川開きも見あはせになつたと云ふので、まあ樂ができると思つて神田の家に寝轉んでますと、一人の若い女が駆け込んで來たんです。」

女は女房のお仙をつかまへて何か泣きながら話してゐるらしかつたが、やがてお仙に連れられて半七の枕元へゐざり込んで來た。起き直つて見ると、それは柳橋のお照といふ藝妓の妹分です、お浪といふ今年十八の小綺麗な女であつた。

「やあ、浦島が晝寝をしてゐるところへ、乙姫様が舞ひ込んで來たね。」と半七は薄ら眠いやうな眼をこすりながら笑つた。「今年花火もお廢止だといふぢやあねえか。どうも不景氣だね。だんぐに世が悪くなるんだから仕方がねえ。それでもいつもの日とは違ふから、茶屋や船宿は些つとは忙がしからう。」

云ひながらよく視ると、柳橋の若い藝妓は島田を式のごとくに美しく結びあげてゐたが、顔には白粉のあともなかつた。自體がすこし腫れ眼縁の眼瞼をいよく泣き腫らしてゐた。花火はな

くとも今日は川開きといふ書入れの物日に、彼女はふだん着の浴衣のままで家を飛び出して來たらしかつた。

「どうしたんだ。姉さんと何か喧嘩でもしたのか。この頃はもう何か出來たとかといふ評判だから、それで姉さんといがみ合つたんぢやあねえか。そんな尻をおれの方へ持つて來たつて辻番が違ふぜ。」と、半七はからかふやうに相手の顔をのぞくと、お浪は嫣然ともしなかつた。

「いゝえ、お前さん。そんなところぢやないんですとさ。」とお仙も顔をしかめながら云つた。「姉さんが今、番屋に止められたと云つて、なあちやんが泣き込んで來たんですよ。どうしたんでせうねえ。」

「ねえさんが番屋へあげられた。」と、半七も團扇の手を休めた。「なにかお客の引合ぢやあねえか。」

「ぢやあ、親分さんはまだ御存じないんですか。」とお浪は眼を拭きながら云つた。

「なんにも知らねえ。おめえの家に何かあつたのかえ。」

「お父さんが今朝殺されたんですよ。」

お浪の話によると、今朝の六つ前（午前六時前）にお照の家の戸を軽くたたく者があつた。朝

寝坊の藝妓家では、臺所に近い三疊で女中のお瀧がやうく蚊帳を外してあるところであつた。戸をたたく音を聞きつけて、お瀧はすぐに入口へ出て行かうとすると、茶の間の六疊に寝てゐたお照の父の新兵衛が蚊帳の中からあわてゝ呼び止めて、出てはいけない、明けてはいけないと、小聲で叱るやうに云つた。叱られたお瀧も少し躊躇つてゐると、やがて表を叩く音は止んだ。と思ふと、今度は裏口の方から跳り込んで来たものがあつた。お瀧が起きると、すぐに水口の戸を一枚あけて置いたので、得體のわからない闖入者は薄暗がりの家の奥へ直幕地に飛び込んで、新兵衛の蚊帳のなかへ鼠のやうにくゞつて這入つた。年のわかいお瀧は呆氣に取られて眺めてゐると、かれは忽ち蚊帳から這ひ出して来て、もとの水口から馳出してしまつた。まだ起きたばかりで半分寢惚けてゐるお瀧には、何がどうしたのか判らなかつた。彼女はしばらくは夢のやうに突つ立つてゐたが、なんだか少し不安にも思はれるので、そつと茶の間へ這入つて蚊帳の中をのぞいて見ると、新兵衛の白地の寝衣には紅い血が一面に沁み出してゐた。

腰を抜かさなばかりに吃驚して、お瀧は二階へかけ上つた。二階には娘のお照と妹藝妓のお浪とが一つ蚊帳のなかに寝てゐるので、彼女は忙がはしく二人の女をよび起した。二人もおどろいて降りてみると、新兵衛は刃物で喉笛を切られてもう死んでゐた。三人は一度に聲をあげて

泣き出した。朝寢の町もこの騒ぎにおどろかされて、近所の人達もだん／＼に駈けてあつまつて来た。町役人から式の通りに變死の届を出して、與力同心も検視に出張した。

新兵衛は誰にどうして殺されたか、唯一の證人は女中のお瀧であるが、かれは十七の若い女で、寢惚けてゐたのと狼狽へてゐたので、勿論詳しいことは何にも判らなかつた。彼女が番屋で申立てたところによると、曲者は背の低い小兒のやうな怪物で、顔もからだも一面に黒かつたのを見ると、おそらく裸體であつたらしい。起つて歩くかと思ふと、這つてあるいた。それ以上にはお瀧はなんにも記憶に残つてゐないとのことであつた。併しこんな奇怪な曖昧な申立てを、係の役人は容易にほんたうとは受取らなかつた。お瀧はそのままに番屋に止められてしまつた。

お照もお浪も無論に調べられた。お浪は仔細ないと認められて一先づ釋されたが、お照は申口に少し胡亂の廉があるといふので、これも番屋に止められた。これだけのことが決つたのは、その日もやがて午に近い頃で、月番の行司や近所の人達がお照の家へ寄りあつまつて色々に評定を凝したが、差當りはどうするといふ分別も付かなかつた。この上は然るべき親分の力を藉りるよりほかはあるまいと云ふので、お照もお浪もかねて半七を識つてゐるのを幸ひに、お浪は着のみ着のまゝで神田まで駈付けたのであつた。

「そりやあ些つとも知らなかつた。十手に對しても申譯がねえ。」と半七もすこし驚かされた。「なにしろ變なものが飛び込んだものだね。子供のやうな眞黒なものかえ。」

「お瀧はさう云つてゐるんです。」と、お浪も腑に落ちないやうな顔をしてゐた。

「猿ぢやありませんかね。」と、お仙はそばから口を出した。

「やかましい。御用のことに口を出すな。」

叱り付けて、半七はしばらく考へた。猿芝居の猿が火の見の半鐘を撞いて世間をさわがした實例は、彼の記憶にまだ新らしく残つてゐる。しかし猿が双物を持つて人を殺しに来るとは、作話ならば知らぬこと、實際には滅多にありさうにもないやうに思はれた。

「それにしても、姉さんはなぜ止められたんだ。云取り方が拙かつたんだね。」

「さうでせう。止められると聞いたたら、姉さんは蒼い顔をして黙つてゐました。」

「ねえさんは一體どんなことを調べられた。おめえも一緒に رفتんだから、知つてゐるだらう。」

この間に對して、お浪は抄々しい返事をしなかつた。彼女はお仙が出してくれた團扇を弄くりながら、黙つて俯向いてゐた。

「おい、なにも彼も正直に云つてくれねえぢやあいけねえ。姉さんが助かるのも助からねえのも、お前の口一つにあることだ。何でもみんな隠さずに云つて貰ひてえ。姉さんはこの頃なにか親父と折合の悪いことでもあつたんぢやあねえか。」

「え、この頃は時々喧嘩をすることがあるんです。」と、お浪はよんどころなしに白狀した。

「情夫の一件かえ。」

「いゝえ、さうぢやないんです。」

「だつて、姉さんには米澤町の古着屋の二番息子が附いてゐるんだらう。」

「それはさうですけど、喧嘩の基はそれぢやないんです。家のお父さんが柳橋を引き拂つて、沼津とか駿府とか遠いところへ引越してしまはうと云ふのを、姉さんが忌だと云つて……。」

「そりや忌だらう。」と、半七は首肯した。「なぜ又、お前のところの親父はそんな可怪なことをだしぬけに云ひ出したんだ。なにか譯があるんだらう。」

「それは判らないんですが、たゞ無暗にこの土地にゐるのは面白くないと云つて……。それで妹さんとたび／＼喧嘩をしてゐるんです。あたしも仲へ這入つて困つたこともあります。なぜ引越すんだか、その譯が判らないんですもの。良いとも悪いとも云ひやうがありません。」

「をかしいな。すると、その矢先に親父が殺されたんで、姉さんが……眞逆に自分が手を下しもしめえが、なにかそれに係り合があるだらうと見込みを附けられたんだね。まあ、無理もねえ所だ。おれにしても先づそんなことを考へる。そこで、古着屋の二番息子はまだ呼ばれなかつたかえ。」

「呼びに行つたんでせう。ですけれど、ゆうべから何處へか行つて、まだ歸らないんださうです。」

「あの息子は何か云つたつけね。」

「定さんと云ふんです。」

「違えねえ。定次郎と云ふんだね。その定次郎はゆうべから歸らねえか。」

半七は腕を拱んだ。どういふ仔細があるか知らないが、おやぢの新兵衛は土地を賣つて他國へ行かうといふ。娘のお照は江戸を離れるのが忌なのと、もう一つには情夫に別れるのが辛いので、どうしても行かないと駄々を捏る。親子喧嘩がたび／＼續く。その揚句に新兵衛が何者にか寢込を襲はれて殺された。かう煎じ詰めてくると、男と女とが共謀か、それとも男ひとりの料簡か、どつちにしてもその下手人は彼の定次郎らしく思はれるのが、誰の眼にも映る暗い影であ

つた。それを正直に白状しないために、お照は番屋に止められたのであらう。半七もそれ以上には、差當つて目串の着けやうがなかつた。

唯こゝに一つの疑問として残つてゐるのは、なぜ彼の新兵衛が住み馴れた柳橋の土地を立退いて、沼津とか駿府とかの遠い國へ俄に引込まうと云ふのか、半七はその仔細を知りたかつた。

二

「お前は一つ家にゐたんだから、なにも彼も残らず知つてゐる筈だが、お前のところの親父は人から怨まれるやうな覺えがあるかえ。」と、半七は又訊いた。

むかしは知らないが、今は決してそんな事はないとお浪は確かに云ひ切つた。お父さんが正直で親切で、情ふかい人であることは、近所の人達がみんな能く知つてゐる。月の四日には屹と兩國の橋番の小屋へ行つて、放し鰻をして歸るのを例としてゐる。神まゐりにも行く、寺詣りにもゆく。それで博奕は打たず、酒は飲まず、かうした稼業には似合はないくらの堅氣な結構人である。若しも家のお父さんを怨む人があれば、それは外道の逆恨みか、但しは物の間違ひでなければならぬ。しかし今度の殺され方を見ると、どうしても物取りではない、意趣斬であるらし

い。それが自分にはわからないと彼女は云つた。
 「それほど結構な人間なら、土地にゐられねえやうな不義理をした譯もあるめえに、折角賣れ出した娘を無理に引摺つて、なぜ草深いところへ引込む氣になつたのか。どうしてもお前達には心當りがねえんだね。」

「どうも判りません。」と、お浪は矢はり頭を掉つた。「ですけれども、唯つた一度こんなことがあつたさうです。わたしが見た譯ぢやありませんけれども、お瀧の話には何でも先月の初め頃、もう日の暮れかゝる時分に一人の六部が家の前に立つて、なにか鐸を鳴らしてゐると、そこへ丁度お父さんが外から歸つて来て、その六部と顔を見あはせて何だか大變にびつくりしたやうな風だつたさうです。六部の方でもびつくりしたやうで、それから二人が小さい聲でしばらく立話をして、お父さんはその六部に幾らか遣つたらしいと云ふことです。その後にも日が暮れるとその六部が時々たづねて来て、一度は草鞋をぬいで茶の間へ上つて来たこともあるさうですが、あたし達はいつも其時にはお座敷へ出てゐたのでよく知りません。なんでもその六部が来るやうになつてから、お父さんは田舎へ行くと云ひ出したらしいんですが……。」

半七の眼は動いた。結構人と評判の高い老人と、なんだか怪しげな六十六部と、この間にどういふ糸が繋がつてゐるかを、横から縦から色々に想像してゐたが、やがて彼はお浪に訊いた。

「お前のところの親父は刺青をしてゐたつね。」

「えゝ。兩方の腕に少しばかり。」

「なにが彫つてゐる。」

「若い時の道樂で、こんなものは見得にも自慢にもならないと、なるだけ隠すやうにしてゐましたから、わたし達も能くは見たこともないんですが、なんでも左の方には紅葉、右の方には櫻が彫つてあつたやうです。」

「背中には何にもねえか。」

「背中は眞白でした。」

「ちやんは幾つだつけね。」

「たしか五十九だと思つてゐます。」

「姉さんは貰兒の筈だが、親父は江戸者ぢやあるめえね。」

「なんでも信州の方だとか云ふことですが、姉さんもよく知らないやうです。善光寺様の話を時

時にしますから、信州の方にやあ相違ないと思ひますけれど……。」
 訊くだけのことは大抵訊き盡したので、半七はお浪を歸した。いづれ後から行くから、それまでおとなしく待つてゐると云ふと、お浪はくれぐれも頼んで歸つた。
 「お仙。ちよいと出るから着物を出してくれ。なんだか蒸暑いと思つたら、少し陰つて来たやうだな。」

仕度をして門を出ると、半七は自分の幸次郎に逢つた。

「親分。柳橋の一件がお耳に這入つてゐますかえ。」

「やつと今聞いたんだ。申譯がねえ。なにしろ好い所へ面を持つて来てくれた。これから柳橋のお照の家まで行つてくれ。」

「ようがす。」

二人はすぐに柳橋へゆくと、お照の家には近所の人達があつまつて、何かごた／＼と騒いでゐた。待兼ねたやうに出て来たお浪を陰へ呼んで、半七はその後になんにも變つたことはないかと訊くと、別に變つたこともないが、もう少し前に古着屋の息子が来て、お照が番屋へ止められたといふ話を聞いて、眞蒼になつて歸つたとお浪は話した。

「どうもその古着屋のせがれが面白くないぢやありませんか。かまはず引きあげてしまひませうか。」と、幸次郎は囁いた。

「まあ、待て。おれも一旦はさう思つたが、まあそれは二の次だ。もう少しほかに穿鑿つて見る所がありさうだから、あんまりどたばたして方々へ塵埃を立てねえ方が好い。」

半七は内へ這入つた。女中のお瀧はどうしたと訊くと、今朝から番屋へ止められたまゝでまだ下げられないとの事であつた。お照も無論歸つて來なかつた。新兵衛の死體はもう検視が済んで、茶の間の六疊に横へてあつた。お照の下げられるのが遅いやうならば、この時節柄いつまでも佛を打ちやつては置かれないので、近所の者が寄りあつまつて何とか葬式を済ませなければならぬまいと云つてゐた。半七も一應は死人の傷口をあらためると、それは剃刀のやうな刃物で喉を扶つたらしかつた。

それから水口の方へまはつて、怪しい物の這入つて來たといふ路筋を調べてゐると、臺所の柱に黒い手の痕のやうなものが小さく薄く残つてゐるのを見つけた。半七は懐紙を把出して綺麗に拭き取つて、そばに立つてゐる幸次郎に其紙を窺と見せた。

「こりや何だ。」

「鍋墨のやうですね。」

「向う兩國に河童は何軒ある。」

「河童は……。と、幸次郎は考へた。「たしか一軒だと思つてゐます。」

「それぢやあ譯はねえ。」と、半七は微笑んだ。「お前はこれから其小屋へ行つて、河童を引きあげて來い。だが、まだ少し時刻が早い。商賣の邪魔をするのも可哀さうだから、もう些つと待つてゐると日が暮れるだらう。小屋の閉場のを待つてゐて、すぐに河童をあげるやうにしろ。」

幸次郎は心得て出て行つた。半七は茶の間へ戻つて、お浪に斷つて佛壇から過去帳を出して繰つてみると、月の四日のところに釋寂幽信士といふ戒名がみえた。新兵衛が兩國の川へ毎月放し鰻をするといふのは四日である。この四日の佛が新兵衛になにか特別の關係を有つてゐなければならぬと考へたので、半七はお浪に向つてこの佛はこゝの家の何者だと詮議したが、お浪はそれを知らないと言つた。併しこゝの家に取つては餘ほど大切の佛であるらしく、その日には新兵衛が手づから佛壇に燈明を供へて、なにかお念佛を唱へてゐたとのことであつた。

「ちやんはこの頃何處かへ行つたことがあるかえ。」

「いゝえ。もとから出嫌ひの人でしたが、この頃は些つとも外へ出ないで、内にばかり坐つてゐ

ました。さうして、なんだか人に逢ふのを忌がつてゐるやうでした。」と、お浪は云つた。

自分の鑑定がだん／＼に中つてくると半七は思つた。彼はもう一度新兵衛の死骸をあらためると、その左の二の腕には紅葉を一面に彫つてあつて、その蒼黒い葉のかげに入墨の痕がかくされてゐるのが確かに判つた。新兵衛はその過去に犯罪の暗い履歴を有つてゐて、その腕の刺青は入墨を隠すためであることも直に覺られた。彼はその罪を悔いて情ふかい結構人になつた。その罪をほろぼすために毎月の放し鰻をした。かれの犯罪は月の四日の佛に關係を有つてゐるらしいと半七は思つた。併しどうして其佛を見付け出してゐるか、半七もさすがに見當が付かなかつた。

そのうちに浅草の七つ（午後四時）がきこえたので、半七は兎も角もこゝを出て、向う兩國へはつて幸次郎の模様を見て來ようと、居あはせた人達に挨拶して門へ出ると、陰つた空のうへから紫の光がさつと迸走つて來た。おや、光つたなと思ふ間もなく、大粒の雨がどつと降り出したので、半七は舌打ちをしながら再び内へ引返した。

「たうとう降つて來た。」

「夕立ですから直に止みませう。」と、お浪は入口の戸を一枚閉めながら云つた。

よんどころなしに半七は茶の間へ戻つて又坐ると、稻妻が又光つて、雷の音がだん／＼に近く

なつて来た。打撒けるやうな夕立が飛沫を吹いて降込んで来るので、みんなも手傳つて方々の戸を閉めた。狭い家のなかには線香の煙がうづ巻いて漲つて、呼吸がつかまるほどに蒸暑いのを我慢して、半七も扇を使ひながら其處に時間を待つてゐると、雨はやがて小降りになつたので、お浪が傘を貸さうといふのを断つて出て、半七は手拭をかぶつて、尻を端折つて、ぬかるみを飛び飛びに渡りながら兩橋を越えた。

川向ふの觀世物小屋はもう大抵閉つてゐた。今の夕立が往來の人を追ひ拂つてしまつたらしく、ぐしよ濡れになつた蕪張りの小屋の前には一人も立つてゐる者はなかつた。半七は向側の心天屋の婆さんに訊いて、そこだと教へられた河童の觀世物小屋のまへに立つて見あげると、白藤源太らしい相撲取が柳の繁つてゐる堤を通るところへ、川の中から河童が飛び出して来て、その行先を塞ぐやうに兩手をひろげてゐる綱看板が懸けてあつた。

その頃の向ふ兩國にはお化や因果物や色々の奇怪な觀世物が小屋をならべてゐた。河太郎もその一つで、葛西の源兵衛堀で生捕つたとか、筑後の柳川から連れて来たとか、子供だましのやうな口上を並べ立てゝゐるが、その種はもう大抵の人にも判つてゐた。十三四歳の男の兒を河童頭に刺らせて、顔や手足を鍋墨で眞黒に塗つて、大きな口から紅い舌をべろりと出して、がら／＼

があと不思議な鳴聲を聞かせる。たゞそれだけの他愛もない藝であるが、それでも河童とか河太郎とかいふ評判に釣込まれて、八文の木戸錢を拂ふ觀客が少くない。半七はお照の臺所の柱に残つてゐた鍋墨の手形から、新兵衛殺しの下手人をこの河童小僧と鑑定したのであつた。表はもう閉まつてゐるので、裏木戸の方へ廻つてゆくと、樂屋の者もみな歸つてしまつて、樂屋番の爺さんが一人で後片附をしてゐるところであつた。

「おい、六助さん。お前この頃こゝへ来てゐるのか。」

「おや、親分さんですか。どうも御無沙汰をいたしました。」と、樂屋番の六助はあわて、挨拶した。

「お化の方はなぜ止したんだ。」

「へえ、どうもあの樂屋は風儀が悪うござんして、御法度の慰み事が流行るもんですから……。」

「爺さんもあんまり嫌ひな方ぢやあるめえ。時に家の幸次郎は見えなかつたかね。」

「幸さんはお見えになりました。いや、それで樂屋の者も心配して居りますよ。」

「河童を連れて行つたのか。」

「へえ、すぐに歸すとは仰しやいましたけれど……。河童がなか／＼素直に行きませんのを、無

理にだまして連れておいでになりました。」

「河童は幾歳で、なんといふんだえ。」

「本名は長吉と申しまして、十五でございます。」

「どこから拾つて来たんだ。親はねえのか。」

「なんでもこの一座が四五年前に信州の善光寺へ乗込んだ時に連れて来ましたので、お察しの通り両親はございません。おふくろに死なれて路頭に迷つてゐるのを、まあ拾ひあげて来ましたやうなわけで……。いえ、わたくしは能く存じませんが、なんでもそんな話でございます。」

「親父もないんだね。」

「へえ、親父は長吉が生まれると間もなく死にましたさうで。」

「變死かえ。」と、半七はすぐに訊いた。

「よく御存じで……。高い聲では申されませんが、何でも悪いことをしてお仕置になりましたさうで……。」

「ふむ。さうか。そこで此頃、河童のところへ誰かたづねて来た者はねえか。」

六助は少し考へてゐたが、やがて思ひ出したやうに首肯した。

「あります、あります。廻國の六部のやうな男が……。」

三

半七の商賣を知つてゐる六助は、訊かれるに従つて總てのことを饒舌つた。六部は四十近い、瘦せて脊の高い、眼つきの少し恐らしい男で、長吉の叔父だといふ話であつた。顔立の幾らか肖てゐるのを見ると、それは嘘ではないらしいと六助は云つた。その六部が昨日は普通の浴衣を着て、樂屋へふらりとたづねて来て、鰻を食はして遣るからと云つて長吉をどこへか連れ出した。

「その六部は何處にゐるのか知らねえか。」

「なんでも下谷の方にあるとか云ふことですが、宿の名は存じません。」

それ以上のことは六助もまつたく知らないらしいので、半七はこゝらで打切つて小屋を出た。それにしても幸次郎はどこへ河童を連れて行つたか。大方そこらの番屋へ引きあげたのであらうと、半七はその足で近所の自身番へ行つてみると、そこには幸次郎の姿も見えなかつた。それでも念のために店へ這入つて訊くと、自身番の親方は面目ないやうな顔をして答へた。

「實いそのことで幸次郎さんに大變怒られました……。なんとも申譯がございません。」

「どうしたんですね。」
 「河童に逃げられました。」と、親方は額の汗を拭いた。そこに居あはせた番太郎も小さくなつて俯向いた。

河童を取逃がした事情はかうであつた。先刻幸次郎が觀世物小屋から河童を引張つて来て、この自身番へあづけて行つた。自身番には店の側に一種の留置所ともいふべき六疊ほどの板間があつて、その太い柱に罪人を縄でつないで置くのが例であつた。河童もそこに繋がれてゐると、俄に大夕立が降り出したので、番太郎はあわて、自分の家へ歸つた。自身番の者共もおどろいて其處らを片附けた。店先の履物を取込む者もあつた。裏口の戸を閉めにゆく者もあつた。そのどさくさ紛れに河童は縄をぬけて逃げ出した。勿論、その逃げてゆく後姿を見つけた者はあつたが、人間の河童は陸でも身が軽いので、あれ／＼と云ふうちに既橋の方へ飛んで行つてしまつた。そこへ幸次郎が歸つて来た。

彼は柳橋へ半七を迎ひに出たのであるが、途中で夕立にふり籠められて、そこらの軒下に雨宿りをして、小降になるのを待つてお照の家へゆくと、どこで行き違つたか半七はもう出てしまつた後であつたので、また引返して自身番へくると、この始末である。幸次郎の怒るのも無理はなかつた。彼は腹立まぎれに居あはせた者どもを頭ごなしに叱り付けた。さうして、すぐに河童のあとを追つて行つた。

「そりやあ拙いことを遣つたもんだ。お前達の不行届で、なんと云はれても仕方がねえ。」と、半七は其話を聽いて眉をよせた。

「親分さん、實に申譯がございません。」

あやまつても詫びても今更取返しは付かない。こゝでぐづ／＼云つてゐるよりも、幸次郎に加勢して河童のゆくへを早く探し出す方が増したと思つたので、半七は草履を自身番にぬいで置いて、跣足になつて駆け出した。どこといふ的もないが、既橋の方角へ逃げたといふのを手がかりに、彼は川岸づたひに急いで行つた。

無暗に駆出して仕方がないので、彼はこんな小僧を見なかつたかと途中で訊きながら歩いた。すると、一軒の荒物屋へこの夕立の最中に一人の眞黒な小僧が飛び込んで来て、店先にかけてあつた菅笠を搔搔つて逃げたと云ふことが判つた。その小僧は笠をかぶつて小梅の方角へ行つたといふのを頼りに、半七は向島の方へ又急いだ。

雨はもう止んだが、葉櫻の堤は暗かつた。水戸の屋敷の門前で幸次郎のぼんやりと引返して來

るのに出逢つた。

「どうした。いけねえか。」

「自身番の疝氣野郎、飛んでもねえどちを組みやあがつて、お話にもならねえ。」と幸次郎は忌々しさを云つた。

「なんでも此方の方角へ来たらしいんですが、どうしても當りが付かねえには困りました。どうしませう。」

「仕方がねえ。」と、半七も溜息をついた。「だが餓鬼のこつた。まさかに草鞋を穿くやうなこともあるめえ。いづれ何處からか這ひ出して来るだらう。なにしろ、腹が空つて来た。そこから蕎麥でも手繰らう。」

二人は堤下へ降りて食物屋をさがした。蜷の看板をかけた小料理屋を見つけて、奥の小座敷へ通されて夕飯を喫つてゐるうちに、萩を一ぱいに植込であるらしい庭先もすつかり暗くなつて、庭も座敷も藪蚊の聲に占領されてしまつた。

「日が暮れたのに蚊いぶしも持つて来やあがらねえ。この村で商賣をしてゐながら、氣のきかねえ籠坊だ。これだから流行らねえ筈だ。」

武者苦者腹の幸次郎は無暗にぼん／＼と手を鳴らして、早く蚊いぶしをしろと怒鳴つた。女中は蚊いぶしの道具を運んで来て、頻にあやまつた。

「相済みません。店でお化の話をお聴いてゐたもんですから、ついうっかりして居りました。」

「へえ、お化の話……。そりやあお前の親類の話ぢやあねえか。」

「よせよ。」と、半七は笑つた。「ねえさん、堪忍してくんねえ。この野郎は少し酔つてゐるんだから。そこで、そのお化がどうしたんだ。こゝの家へ出る譯ぢやあるめえ。」

「あら、御冗談を……。たつた今、家の旦那が堤で見に来たんですつて、嘘ぢやない、ほんたうに出たんですつて、河童のやうなものが……。」

「え、河童だ。」と、幸次郎もまじめになつた。

半七はその主人をちよと呼んでくれと云つた。呼ばれて出て来たのは四十五六の男で、鬨越しで縁側に手をついた。

「御用でございますか。」

「いや、ほかぢやあねえが、お前さんは唯つた今、堤で何か變なものを見たさうだね。なんですえ。」

「何でございませうか。わたくしも悚然としました。相手がお武家ですから好うござんしたが、わたくし共のやうな臆病な者でしたら、すぐに眼を眩してしまつたかも知れません。」

「河童だと云ふが、さうですかえ。」と、半七は又訊いた。

「お武家は河童だらうと仰しやいました。まあ、斯うでございます、わたくしが業平の方までまゐりまして、その歸りに水戸様前から既うすこし此方へまゐりますと、堤の上は薄暗くなつて居りました。わたくしの少し先を一人のお武家さんが歩いておるでございまして。その又すこし先に、十四五ぐらゐかと思ふやうな小僧が菅笠をかぶつて歩いて居りました。」

「その小僧は着物をきてゐましたかえ。」

「暗いのでよくは判りませんでした。黒つぽいやうな単衣を着てゐたやうです。それが雨あがりの路悪の上に着物の裳を引摺つて、跣足でびちよ／＼歩いてゐるので、あとから行くお武家さんが聲をかけて——お武家さんは少し酔つてゐらつしやるやうでした——おい、おい、小僧。なぜそんなだらしのない装をしてゐるんだ。着物の裳をぐいとまくつて、威勢よく歩くと、うしろから聲をかけましたが、小僧には聞えなかつたのか、やはり黙つてびちよ／＼歩いてゐるので、お武家はちつと焦つたくなつたと見えまして、三足ばかりつか／＼と寄つて、おい、小僧。かう

して歩くんだと云ひながら、着物の裳をまくつて遣りますと……。その小僧のお尻の両方に銀のやうな二つの眼玉がひかりと……。わたくしは慄然として立竦みますと、お武家はすぐにその小僧の襟首を引つ掴んで堤下へ投げ出してしまひました。さうして、はゝあ河童だと笑ひながらすた／＼行つておしまひなさいました。わたくしは急に怖くなつて、急いで家へ逃げて歸つてまゐりました。」

半七は幸次郎と眼をみあはせた。

「さうして、ての化物はどつちの堤下へ投げられたんですえ。」

「川寄りの方でございます。」

「なるほど不思議なことがあるもんですね。」

勘定を拂つて、二人は早々にそこを出た。

四

「親分。そのお化といふのは河童ですね。」と、幸次郎は囁いた。

「ちげえねえ。たしかに河童だ。」

粗忽しい武士はほんたうの河童だと思つたかも知れないが、それは河童の長言に相違ないと半七は思つた。兩國の河童は眞黒に塗つた尻の右と左に金紙や銀紙を丸く貼りつけて、大きい眼玉と見せかけ、その尻を無作法に観客の方へむけて四つ這ひに這ひまはるのを一つの藝當としてゐる。酔つてゐる武士と、臆病な亭主とは、ゆう闇の薄暗がりて其尻の眼玉におどろかされたのであらうが、半七から観れば、その尻の光つたと云ふのが却つてほんたうの化物でない證據であつた。「なにしろ、早く堤下へ行つてみようぜ。」

亭主の教へてくれたのは此處らであらうと見當をつけて、二人は隅田川に沿うた堤下に降りると、岸と杭とのあひだに挟まつて何か黒いものが横はつてゐるらしかつた。幸次郎はすぐに引摺りあげて見ると、果してそれは河童の長吉であつた。かれは武士に手ひどく投げつけられた機に、樹の根か杭で脾腹を打たれたのであらう、片足を水に浸して息が絶えてゐた。杭に挟まれたのが此方に取つては勿怪の幸ひで、左もなければ下流の方へ遠く押流されてしまつたかも知れなかつた。

「ほんたうに死んだのぢやあるめえ。そこらまで負つて行つてやれ。」と、半七は云つた。

河童を負つて幸次郎は堤へあがつた。半七は先へ立つて元の料理屋へ引返すと、家中の者はおどろいて騒いだ。怖いもの見たさで女中達もそつと覗きに來た。

「おい、御亭主。氣の毒だがこの河童の始末をして貰ひてえ。泥だらけの此姿ぢや座敷へ入れることが出来ねえ。」

半七の指圖で、店の者は手桶に水を汲んで來た。河童の正體は大抵わかつたので、亭主も急に強くなつた。彼は家内のものと一緒になつて、河童の顔や手足を洗つてやつた。尻の銀紙を發見したときに、亭主も思はず噴き出した。

かうした手當には馴れてゐるので、半七は河童を奥の小座敷へかつぎ込んで介抱すると、長吉はやがて呼吸を吹き返した。半七は更に用意の薬を飲ませた。水を飲ませた。

「やい、河童。しつかりしろ。もう人間らしくなつたか。こゝは料理屋の座敷だが、手前を調べるのは御用聞きの半七といふ者だ。樂屋番を相手に微塵棒を舐つてゐるときとは譯が違ふから、そのつもりで返事をしろ。手前は今朝、柳橋の藝妓屋へ這ひ込んで、親父を剃刀で殺したらう。覚えがねえとは云はせねえ、臺所の柱に手前の手のあとが確かに残つてゐた。さあ、有體に申立てろ。第一、手前に後暗いことがねえならば、なぜ番屋を逃げ出した。おまけに途中で笠を盗んで逃げやあがつたらう。さあ、證據はみんな揃つてゐるんだ。これでも恐れ入らねえか。」

相手は子供である。半七に鋭く睨みつけられて、河童は脆く恐れ入った。彼は叔父の長平にそのかされて、お照の父の新兵衛を殺したに相違ないと素直に白状した。

「それにしても何故その新兵衛を殺す氣になつたんだ。手前の叔父さんは新兵衛に遺恨でもあるのか。」

「新兵衛といふ奴はおいらのお父さんの仇なんだ。おいらあ其仇討を立派にしたんだ。」と、河童は鍋墨のまだ消え切らない顔に大きい眼をひかせて、俄に肩をそびやかした。

「仇討……。ほんたうか。」と、半七は少し案外に思った。併しだん／＼其話を聴いてみると、これも一種の復讐には相違なかつた。

長吉の父は長左衛門と云つて、信州善光寺の在に住んでゐた。お照の父の新兵衛もむかしは新吉と云つて、やはり同じ村に生まれた者であつた。長左衛門も新兵衛も土地では札附の悪黨であつたらしい。今から十三年まへに二人は共謀して隣村の或大盡の家へ押込みに入つて、主人夫婦と娘とを酷たらしく斬殺した。その詮議があまり嚴重になつたので、新兵衛は土地の御用聞きのところへ駆込んで、その罪人は長左衛門であると密告した。かれも共犯者であるらしいことは御用聞きも薄々察したであらうが、密告の功によつて彼は自由に土地を立退くことを黙許され

た。彼はすぐに何處へか逃げてしまつた。長左衛門は召捕られて磔刑になつた。

新兵衛は友を賣つて自分の身を全うしたのである。その事情が長左衛門の遺族の耳にも洩れたが、御用聞きも黙許で彼を逃したのであるから、今更どうすることも出来なかつた。長左衛門の女房は非常にそれを口惜がつて、死ぬ際までも不實の友を呪つてゐた。長左衛門には長平といふ弟があつて、これも兄とおなじ血をわけた悪黨で、兄が仕置になつた當時は隣國の越後の方にさまよつてゐたが、これを聞き傳へて故郷へ歸つて來た。新兵衛の裏切りを聞いて、彼もひどく憤つたが、自分も後暗い身のうへで、表向きには立派な口は利けないので、恨みを呑んで再びどこへか立去つてしまつた。

それから十年ほど経つて、長平は久振りで故郷へ歸つてくると、嫂はもう死んでゐた。甥の長吉は兩國の河童に賣られたといふ噂も聞いた。かさね／＼の一家の悲運を見て、長平も流石に心さびしくなつた。こゝらでもう料簡を入れ替へて、兄や自分の罪ほろばしに六十六部となつて廻國修行の旅に出ようと思ひ立つた。彼は佛の像を入れた重い笈を背負つて、錫杖をついて、信州の雪を踏みわけて中仙道へ出た。それから諸國をめぐるいて江戸へ這入つて來たのは、今年の花ももう散りかゝる三月のなかばであつた。彼は下谷邊のある安泊を假の宿として、江戸市

中を毎日遍歴してゐた。

彼が二月あまりも江戸に足をとどめてゐる間に、殆ど同時に敵と味方とにめぐりあつたのであつた。敵は彼のお照の父で、新吉の名を今は新兵衛と呼びかへて、柳橋に藝妓屋を開いてゐることが判つた。甥の長吉はやはり河童になつて、兩國の觀世物小屋に晒されてゐることが判つた。長平は甥にも逢つた。偶然の機會から新兵衛にも出逢つた。

新兵衛はもう生れ變つたやうな善人になつてゐるので、むかしの友達のおとくに逢つて切りに過去の罪を謝した。自分達が手にかけて大盡一家の菩提を弔ふばかりでなく、長左衛門が仕置に逢つたのは二月の四日で、その命日には毎月かならず放し鰻の供養を怠らないと云つた。彼はある寺から長左衛門の戒名を買つて来て、佛壇に祀つてあることも話した。長平はむかしとは人間が違つてゐるので、悔い改めてゐる此の善人を執念ぶかく責めることも出来なくなつた。かれは新兵衛の罪を免すと云つた。新兵衛はよろこんで、御報捨のしるしだと云つて彼に廿兩の金を贈つた。

その金が二人の禍であつた。久振りで廿兩の大金をうけ取つた六十六部は、その晩すぐに服装をこしらへて吉原へ遊びに行つた。それが口火になつて、彼の殊勝らしい性根はだんぐくに溶けてしまつた。六十六部は再び昔の長平に立復つて、新兵衛のところへ度々無心に行つた。しまひには金の無心ばかりでなく、彼は新兵衛の貰ひ娘のお照の美しいのを見て、飛んでもない無心までも云ひ出すやうになつた。相手の飽くことのない誅求には、新兵衛も流石にもう堪へられなくなつて、終には手きびしくそれを拒絶すると、長平はいよく羊の皮裘をぬいで狼の本性をあらはした。彼は甥の河童をそゝのかして親のかたきを討たせたのであつた。

「これは河童の長吉の白状と、長平の白状とを搦きませたお話で、長吉は叔父の手さきに使はれて、たゞ一圖に親父のかたき討の料簡で遣つた仕事なんです。」と、半七老人は説明した。「つまり新兵衛の方はすつかり善人になり切つてゐたんですが、長平の魂はまだほんたうの善人になり切らないもんですから、すぐにあと戻りをして、到頭こんな事件を出来させてしまつたんですよ。」

「長平は無論つかまつたんですね。」と、わたしは訊いた。

「河童の白状で大抵見當が付きましたから、それからお照の家の近所に毎晩張り込んでゐますと、新兵衛の初七日が濟んだ明るる晩に、案の定その長平が短刀を呑んで押込んで来て、どうする

積りかお浪を嚇かしてゐるところを、すぐ踏み込んで召捕りました。長平は無論に死罪でしたが、長吉の方はまだ子供でもあり、どこまでも親のかたきを討つつもりで遣つた仕事ですから、上にも御憐愍の沙汰があつて、遠島といふことで落着きました。これが作り話だと娘の藝妓やその情夫の定次郎の方にも色々の疑ひがかゝつて、面白い探偵小説が出来上るんでせうが、實録ではさう巧く行きませんよ。はゝゝゝゝゝ。たゞ些つとばかりわたくしの味噌をあげれば、はじめから藝妓や情夫の色つぼい方には眼をくれないで、なんでも善人の親父の方に因縁があるらしいと、その方ばかりを睨み詰めてゐたことですよ。腕に入墨が這入つてゐるくらゐですから、新兵衛はその前にも悪いことを澤山遣つてゐたんでせうが、折角善人に生れ變つたものを可哀さうなことをしました。河童を投げ出した武士ですか、それはどこの人だか判りません。その人は向島で河童を退治したなどと一生の手柄話にしてゐたかも知れませんよ。まつたく其頃の向島は今とはまるで違つてゐて、狸も出れば狐も出る、河獺も出る、河童だつて出さうな所でしたからね。」

鬼娘

馬道の庄太といふ子分が神田三河町の半七の家へかけ込んで来たのは、文久元年七月廿日の朝であつた。

「お早うございます。」

「やあ、お早う。」と、裏庭の縁側で朝顔の鉢をながめてゐた半七は見かへつた。「大變早いな。めづらしいぜ。」

「なに、この頃はいつも早いのだ。」

「さうでもあるめえ。朝顔の盛りは御存じねえ方だらう。だが、朝顔ももういけねえ、この通り蔓が伸びてしまつた。」

「さうですなえ。」と、庄太は首をのばして覗いた。「時に親分。すこし耳を貸して貰ひてえことが

あるんですよ。わたしの近所にどうも變なことが流行出してね。」

「なにが流行る。麻疹ぢやあるめえ。」

「そんなことぢやあねえので……。」と、庄太は眞面目で囁いた。「實はわたしの隣の家のお作といふ娘がゆうべ死んでね。」

「どんな娘で、いくつになる。」

「子供のやうな顔をしてゐるが、もう十九か廿歳でせうよ。まあ、ちよいと濼皮の剥けた方ですね。」

それが普通の死でないことは、半七にもすぐに覺られた。かれはすぐに起ちあがつて、茶の間の方へ庄太を連れ込んだ。

「そこで、その娘がどうした。殺されたか。」

「殺されたには相違ねえんだが……、そいつが啖ひ殺されたんですよ。」

「化猫にか。」と、半七は笑つた。「いや、冗談ぢやあねえ。ほんたうに啖ひ殺されたのか。」

「ほんたうですよ。なにしろわたしの隣ですからね。こればかりは間違ひ無しです。」

庄太の報告はかうであつた。

今から半月ほどまへの宵に、馬道の鼻緒屋の娘で、今年十六になるお捨といふのが近所まで買物に出ると、白地の手拭をかぶつて、白地の浴衣をきた若い女が、往來で彼女とすれ違ひながら、もしく〜と聲をかけた。何心なく振りかへると、その女はうす暗いなかで薄氣味のわるい顔をして、やく〜と笑つた。年のわかいお捨は俄におそろしくなつて、返事もしないで一生懸命に逃げ出した。勿論それぎりの話で、その若い女はまさかに幽霊や化物でもあるまい。おそろく氣ちがひであらうといふ噂であつた。

それから又五六日経つと、更におそろしい出来事が起つた。やはり同じ町内の酒屋の下女で、今年廿一になるお傳といふのが、裏手の物置へ何か取出しにゆくと、やがてきやつといふ聲をあげて倒れた。その悲鳴を聞きつけて、内から大勢がかけ出して見たが、薄暗い灯ともし頃で、そこらに物の影も見えなかつた。お傳は何者にか喉笛を啖ひ切られて死んでゐた。それだけでも已におそろしい出来事であるのに、それにもう一つの怪しい噂が附け加へられて、更に近所の人々を脅かしたのである。

それはこのあひだの晩、彼の鼻緒屋のお捨を嚇したといふ怪しい娘によく似た女が、恰もそれと同じ時刻に酒屋の裏口を覗いてゐたのを見た者があるといふのであつた。前後ともに暗い時刻

であるので、よくその正體を見とゞけることは出来なかつたが、前の女も後の女もおなじく白地の手拭をかぶつて、白地の浴衣を着てゐて、どうも同じ人間であるらしく思はれた。さうして、その怪しい女とお傳の死と、そのあひだにも何かの關係があるらしく思はれて來た。鼻緒屋の娘は運よく逃れたが、酒屋の下女は運悪く啖ひ殺されたのではあるまいか。かういふ風に二つの事件をむすび附けて解釋すると、かれは一種のおそろしい鬼女であるかも知れない。鬼婆で名高い浅茅ヶ原に近いだけに、鬼娘の噂がそれからそれへと仰々しく傳へられて、残暑の強いこの頃でも、氣の弱い娘子供は日が暮れると門涼みに出るのを恐れるやうになつた。

それでも鬼娘の奇怪な事實はまだ一般には信じられなかつた。ある人々はそれを臆病者の噂と聞き流して、いはゆる高箒を鬼と見るたくひに過ぎないと冷笑つてゐた。しかもそれから又十日と経たないうちに、強い人々もいよく臆病者の仲間入りをしなければならぬやうな事件が重ねて出來した。鬼娘が又もや一人の女を屠つたのである。それは山の宿の小間物屋の女房で、かれは誰も知らない間に、裏の井戸端で啖ひ殺されてゐた。勿論それも同じ鬼娘の仕業であることに決められてしまつた。

諸人の不安がだん／＼募つて來た時、鬼娘は更に第三の生贄を求めた。それは庄太のとなり

住んでゐるお作といふ娘であつた。庄太の家は彼の酒屋から遠くない露路のなかで、そこには裏店としてはやゝ小綺麗な五軒の小さい格子作りがならんでゐた。庄太の家は露地の口から四軒目で、隣の五軒目の長屋にお作といふ娘が母のお伊勢と二人で暮してゐた。その奥は空地になつてゐて、そこには大きい掃溜があつた。昔から栽ゑてある大きい櫻が一本立つてゐた。お作は浅草の奥山の茶店に出てゐるが、そのほかに内々で旦那取りをしてゐるとかいふので、近所の評判は餘りよくなかつた。そんな噂もあるだけに、親子はいつも身綺麗にして、不足もないらしく暮してゐた。隣同士でもあり、殊に庄太の商賣を知つてゐるので、お作親子はふだんから愛想よく彼と付き合つて、色々の物を呉れたりした。

お作が啖ひ殺されたのは、ゆうべの六つ半(午後七時)を過ぎた頃であつた。いつもの通りに奥山の店から歸つて來て、かれは臺所で行水をつかつてゐた。母のお伊勢は小さい庭にむかつた奥の側で蚊いぶしをしてゐると、臺所で娘の聲がきこえた。お作は何者かを咎めるやうな口ぶり、「誰、そこから覗くのは誰。」と云つてゐるのが耳に這入つたので、おそらく近所の者が戯つてゐるのであらうと思ひながら、お伊勢は蚊いぶしを煽いでゐる團扇の手をやめて、臺所の方を見かへると外のうす暗いところに一人の女の立つてゐる姿がぼんやりと浮んで見えた。女は

白地の手拭をかぶつて、おなじ浴衣を着てゐるらしかった。お作はまた咎めた。「なにを覗いてゐるのよ、おまへさんは……。」
 その聲が終らないうちにお作はきやつと叫んだ。おどろいてお伊勢は臺所へかけ着けてみると、赤裸の彼女は大きい盥から轉げ出して倒れてゐた。お伊勢は再び奥へ引返して、行燈を持ち出して来た。その灯に照らされた行水の湯は眞紅に染まつてゐて、それが娘の喉から溢れて出る生血であることを知つた時に、お伊勢は腰をぬかすほどに驚いた。かれは表通りまで響くやうな聲をあげて人を呼んだ。

近所の人達もすぐに駆付けた。町内の醫者もすぐに来たが、お作は何者にか喉笛を啖ひ破られてゐるので、もう手當を加へる術もなかつた。お伊勢は夢のやうで、なにが何うしたのか些つとも判らなかつた。お作の行水をうかゞつてゐるらしい女は、このどさくさのあひだに何處へか消え失せてしまつた。しかし前後の事情から考へると、お作を殺した疑ひは先づ第一にその女のうへに置かなければならなかつた。白地の浴衣を着た女、酒屋の下女を啖ひ殺した女、小間物屋の女房を啖ひ殺した女、それが又もやこゝにあらはれて、赤裸の若い女を啖ひ殺したのであらうとは、誰の胸にもすぐに浮び出る想像であつた。鬼娘が又来たといふ噂はたちまち擴がつて、近所

の人達をいよく脅かした。庄太の女房もゆうべはおちく／＼眠らなかつた。

こゝまで話して来て、庄太は一息ついた。

「その時におめえは家にゐたのか。」と、半七は訊いた。

「ところが、親分。その時わたしは表の足袋屋の店へ行つて、縁臺で將棋をさしてゐたんですよ。この騒ぎにおどろいて歸つて来たときには、長屋の者が唯わあく／＼云つてゐるばかりで、ほかに誰もゐませんでした。白地の浴衣を着た女なんぞは影も形も見せませんでした。」

「あの露地は抜裏か。」

「以前は通りぬけが出来たんですが、もつ／＼廣い露地でも無し、第一不用心だといふので、一昨年頃から奥の出口へ垣根を結つてしまつたんですが、もう好加減に古くなつたのと、近所の子供がいたづらをするので、竹はばらばらに毀れてゐますから、通りぬけをすれば出来ますよ。」
 「むゝ。」と、半七は考へてゐた。「無論、檢視もあつたらうが、なんにも手がかりは無しか。」
 「どうも判らねえやうですね。今も田町の重兵衛の子分に逢ひましたが、重兵衛はなにか色戀の遺恨ぢやあねえかと、専らその方を探つてゐるさうです。なるほど、お作はあんな女ですから、そこへ眼をつけるのも無理はありませんが、双物で突つとか斬るとか云ふなら格別、啖ひ殺すの

がどうも可怪い。それもお作一人で無し、ほかに二人も死んでゐるんですからね。田町の子分共もこれには些つと行き惱んでゐるやうでしたよ。」

「喉笛へ食ひ付くとはよく云ふことだが、なか／＼それが出来る藝ぢやあねえ。」と、半七はまた考へてゐた。「ほんたうに啖ひ殺したのかしら。鐵砲疵には似たれども、まさしく刀でゑぐつた疵、とんだ六段目ぢやあねえかな。」

「さあ。と、庄太もすこし考へてゐた。「わたしも死骸をみましたがね。喉笛はたしかに啖ひ切られてゐたやうでしたよ。醫者もさう云ひ、檢視でもさう決まつたんですが……。おまへさんには何かほかに見込みがありますかえ。」

「いや、おれにもまだ見當はつかねえが、どうも腑に落ちねえやうだな。それにしても、その鬼娘といふのは何者だらう。」

「それも判りませんよ。」

「わからねえぢやあ困る。おれも考へてみるから、おめえも考へてくれ。」

云ひかけて、半七は不圖何事かを思ひ出したらしく、持つてゐる團扇を下に置いた。

「だが、なにしろ一度は行つてみよう。家にばかり涼んでゐちやあ埒があかねえ。重兵衛の繩張

りをあらすやうだが、おめえも土地に住んでゐるんだ。おれが一つ手傳つて、おめえの顔を好くして遣らうか。」

「ありがたい。何分ねがひます。」

親分を案内して、庄太が出ようとする、半七の女房がうしろから聲をかけた。

「庄さん。どこへ。」

「親分を引張り出して淺草の方へ……。」と、庄太は笑つた。「方角が悪いが、朝つばらだから大丈夫ですよ。」

「朝つばらでも晝つばらでも、おまへさんぢやあ油斷が出来ない。おかみさんがお盆に来て、愚痴を云つてゐたよ。」

女房に笑はれて、庄太は頭をかいてゐた。

二

「どうも暑いな。」

「今年は残暑が強くござんすね。これで九月に袷が着られるでせうか。」

「ちげえねえ。九月に帷子を着て顛へてゐるか。」
 二人は笑ひながら浅草の仲見世の方へ來かゝると、そこらの店から大勢の人がばら／＼駆け出した。往來の人たちも何かわや／＼云ひながら駆け出して行つた。餌を拾つてゐる鳩もおどろいて飛び起つた。

「なんだらう。」と、半七は境内の方を見た。

「みんなお堂の方へかけて行くやうですね。喧嘩か巾着切りでせう。」

「そんなことかも知れねえ。江戸は相變らず物見高けえな。」

左のみ氣にも留めないで、二人は矢はりぶら／＼あるいてゆくと、駆けあつまる人の群はだんだんに多くなつた。それに誘はれて、二人もおのづと早足に仁王門をくぐると、觀音堂前の大きい銀杏の木に一人の男が縛りつけられてゐた。男は廿三四で、どこかの武家屋敷の中間らしく、帯のうしろには木刀をさしてゐるが、兩腕を荒縄で固く縛られて、兩足を投げ出して、銀杏の木の根に繋がれてゐた。そのまへには一羽の白い鶏をかゝへた男が立つてゐた。ほかにも七八人の男がその中間を取りまいて何か大きい聲で罵つてゐるらしかつた。中間はく／＼り着けられるまでに散散の打擲をうけたらしく、頬にはかすり疵の血が滲んで、髪も着物もみだれたまゝで、意

氣地もなく俯向いてゐた。

それを遠巻きに見物してゐる人達をかき分けて、半七と庄太は前に出た。庄太は土地の者だけに、そのなかには顔なじみの者もあるらしく、一人の男に聲をかけた。

「もし、どうしたんですえ。その中間は……。」

「鶏をぬすんで絞めたんですよ。しかも眞晝間、ぶら／＼しい奴です。」

觀音の境内には鳩を奉納するものがある、鶏を奉納する者がある。それは誰も知つてゐることであるが、その鶏がこの頃たび／＼紛失するので、土地の者も内々注意してゐると、今朝この中間が紙につゝんだ一粒の米を餌にして、木のかげに遊んでゐる鶏を釣り寄せようとしてゐるらしいのを、鳩の豆を賣つてゐる婆さんが見つけて、寺内に住んでゐる町家の人達に密告したので、二三人が駆けつけて來た。つゞいて五六人が駆けつけてみると、かの中間は大きい銀杏のかげに身を隠すやうにして、二三羽の鶏に米を遣つてゐた。

その舉動が怪しいので、氣の早い者はすぐに彼を引つ捕へて詮議すると、中間は奉納の鶏に餌をあたへてゐるのだと云つた。鳩に豆をやると同じわけで、勿論それだけならば仔細はない。却つて奇特といふべきでもあつたが、その言譯は立たなかつた。彼はそのふところに一羽の白い鳥

を隠してゐることを發見された。かれは鶏を釣り寄せて、手早く頸を絞めてゐることが判つたので、死んだ鶏は無論取返された。さうして、逃げる間もなしに引摺り倒されて、袋叩きの仕置に遭つたのである。武家に奉公してゐる者でも、場所が觀音の境内で、しかも奉納の鶏を殺したのであるから、このくらゐの仕置はこの時代としては當然であつた。まして多勢に無勢であるから、中間はとて反抗する力はなかつた。かれは彼等のなすまゝにおめく服従して、白晝諸人のまへに生恥を晒すのほかはなかつた。苦しいのか、面目ないのか、立木に繫がれた彼は眼を瞑ぢたまゝで俯向いてゐた。その話を聽いて庄太は冷笑つた。

「馬鹿な奴だな、若え者のくせに飛んだ業晒した。」

「これから何うするんですね。」と、半七は訊いた。

鶏をぬすんだ罪人の仕置は、まだこれだけでは濟まない。彼は斯うしてこゝに半日晒し物にした上で、棒しばりにして廣小路は勿論、馬道から花川戸のあたりまで引き廻してあるくのであると彼等は云つた。半七は顔をしかめた。

「そりやあ些つと酷過ぎるやうだね。いくら寺内でしたことでも、土地の人達がそんなに勝手な仕置をするのはよくないだらう。なぜすぐに自身番へでも連れて行かないんですえ。」

かれらは半七の顔を識らなかつたが、それでも庄太の連れであるので、薄々はその身分を覺つたらしく、餘計な世話を焼くなと云ふやうな反抗の顔色を見せなかつた。鶏をかゝへてゐる男は叮嚀に答へた。

「それがおまへさん。今もいふ通り、今朝初めてぢやあない、これまでも度々盗んでゐるんですからね。いや、まだこゝばかりぢやあない、此頃この近所でもたびく飼鶏を取られるんですよ。」

寺内の鶏をぬすみ、人家の鶏を盗み、その悪事重々の奴であるから、そのくらゐの仕置は當然であると云ふやうな彼の口ぶりであつたが、それならば猶更のこと、土地の者が私の刑罰を加へるのはよくないと半七は思つた。それを聽くと、今まで俯向いてゐた中間は俄に顔をあげた。「やい、やい、こいつ等。さつきからおとなしくしてゐれば、圖に乗つて何を云やあがるんだ。」と、かれは呶鳴つた。

「おれが取つたのはその鶏一匹だ。これまでに一度だつて取つた覺えはねえ。まして手前達の家飼鶏なんぞ誰が知るものか。今日はおれ一人だから、かうして手籠めに遭つてゐるんだ。部屋へ歸つたら、みんなを狩りあつめて来て、片つ端から手前達の頸を絞めて、骨を叩きにして遣る

からさう思へ。」

「なにを云やあがるんだ。この狐野郎め。」

二三人が又なぐりに行かうとするのを、半七は制した。

「まあ、待ちなせえ。疵でも附けると面倒だ。そこでお中間。おめえはまつたくこの一羽を取つただけかえ。」

「あたりめえよ、部屋へ持つて歸つて、みんなで鍋焼にしよと思つただけだよ。」と、中間は大きい眼をひからせて云つた。「一匹で止せばよかつたのを、もう一匹と長追ひをしたのが運の盡きだ。おれは軍鶏屋のまはし者ぢやあねえ、そこら中の鶏を取つてあるくものか、ばか／＼しい。」かれは吐き出すやうに罵つた。

「まあ、いゝ。」と。半七はまた制した。「たとひ一羽でも取つた以上おめえが悪い。まあ我慢するがいゝぜ。わたしもこゝへ来たのが係り合だ。まあなんとか皆んなと話し合をつけてみよう。」そのなかで重立つてゐるらしい三四人を、すこし離れた木のかげへ連れ込んで、半七は小聲で注意をあたへた。いかに観音の寺内でも土地の者がみだりに刑罰を加へるのは穩當でない。萬一あの中間が口惜まぎれに舌でも食ひ切つたらどうするか。あるひは自分の部屋へ引返して大勢で

仕返しにでも来たら何うするか。そんな事件が出来た場合には、わたくしに刑罰を加へた人々は當然何等かの御咎めをうけなければなるまい。あれだけの仕置をしたらもう十分であるから、このまゝに免してやるのが無事であらうと、彼は云ひ聞かせた。相手が相手であるので、かれらももう逆らはなかつた。中間は繩を解いて放された。

「こいつ等。おぼえてゐろ。」

睨みまはして立去らうとする中間を、半七は呼び止めた。

「お前、それがおとなしくねえ。悪いことをして威張る奴があるものか。まあ、黙つて引取りなせえ。」

云ひながら彼は中間の手に二朱の金をそつと握らせた。

「どうも濟まねえ。いよく御厄介になりました。」と、中間は顔の色を直して立去つた。

「はゝ、これでいゝ。ついでと云つちやあ濟まねえが、こゝまで来たからお詣りをして行かうよ。」

大勢の挨拶をうしろに聞きながら、半七は觀音堂の段をのぼつて行つた。參詣が濟んで、横手の隨身門を出ると、庄太があとから追つて来た。

「親分。つまらねえ散財をしましたね。みんなもよろしく云つてくれと云つてみましたよ。だが、だんく聞いてみると、まったく今朝ばかりぢやあねえ、この頃はたびく鶏を取つていく奴があるさうですよ。それだもんだから皆んなも餘計に憎しみをかけて、あんな仕置をするやうにもなつたんだから、親分にもよく其譯を云つてくれと頼んでみました。」

「むゝ。」と、半七は笑ひながら首肯いた。「あの中間はとんだ人身御供だつたな。」

「さうでせうか。」

「一朱や二朱は惜しくねえ。これで大抵あたりも付いたやうだ。」

「あたりが付きましたかえ。」

「だが、もう少し考へてみよう。」と、半七はまた笑つた。「まだほんたうにお膳立が出来ねえからな。」

庄太に案内させて、半七は先づ馬道の鼻緒屋をたづねた。娘のお捨に逢つて、このあひだの晩彼女が嚇されたといふ若い女の年頃や風俗について色々詮議したが、お捨はまだ十五六の小娘で、殊に怖い方が先に立つて一生懸命に逃げ出してしまつたので、その女が凄顔をして牡丹のやうな眞紅な口をあいたといふ以外に、その正體を確かに見とどけてゐる餘裕がなかつたので、

この詮議は結局不得要領に終つた。しかし彼女が見たところでは、その女はどうも跣足であつたらしいと云ふのであつた。

こゝの詮議はそれだけにして、半七は更に同町内の酒屋をたづねた。

三

酒屋では帳場に居あはせた亭主が庄太の顔を見て叮嚀に挨拶した。ふたりは店に腰をかけて、下女のお傳が何者にか啖ひ殺された當夜のありさまを聞きたゞしたが、これも薄暗がりの時刻であり、且は不意の出来事であるので、亭主は二人が満足するやうな詳しい説明をあたへることが出来なかつた。しかしお傳は二年越しこゝに奉公してゐる正直者で、今までに浮いた噂などは勿論なかつたと亭主は説明した。

二人はこゝを出て、山の宿の小間物屋をたづねたが、これは誰も知らない間の出来事であるので、その女房がどうして殺されたのか、まるで判らなかつた。

「親分。仕様がありませんねえ。」と、庄太はその店を出て、汗をふきながら舌打ちした。

「まあ、あせるな。これでも眼鼻はだんくに附いて行く。これからおめえの隣へ行かう。」

庄太は自分の住んでゐる露地のなかへ半七を案内すると、となりのお作の家には近所の人達があつまつてゐた。庄太の女房も手傳ひに行つてゐたが、半七の來たのを知つてあわたしく歸つて來た。お作のとむらひは今日の夕方に出る筈だと彼女は話した。

半七は更に庄太に案内させて、露地の奥を見まはつた。庄太の云つた通り、ぬけ裏のゆき止まりを竹垣で塞いであつたが、その古い竹はもうばらばらに頽れかゝつてゐた。傍には共同の大きい掃溜めがあつて、一種の臭ひが半七の鼻を衝いた。かういふ露地の奥の習で、そこの土はじくじくと濕つてゐるのを、半七は嗅ぐやうに覗いてあるいた。家へ歸ると、庄太はさゝやいた。

「お作のおふくろを呼んで來ませうか。」

「さうさなあ。こつちへ來て貰つた方が静かでないな。」と、半七は云つた。

お作の母はすぐに隣から呼ばれて來た。ひとり娘をうしなつたお伊勢は眼を泣き腫して半七のまへに出た。かれは五十に近い大柄の女であつた。

「どうも飛んだことだつたね。」と、半七は一通りの悔みを云つた上で、あらためて訊いた。「そこで早速だが、ゆうべのことに就て何にも心あたりはねえのかえ。」

お伊勢は鼻をすゝりながら昨夜の顛末を訴へたが、それは庄太の報告とおなじもので、別に新

しい事實を探り出すことは出来なかつた。半七はまた訊いた。

「その女の人相といふのは些つとも判らなかつたかえ。」

その女が白地の手拭をかぶつて、白地の浴衣を着てゐたのは、お伊勢もたしかに認めたが、そのほかのことは夜目遠目で矢はりはつきりと判らなかつた。しかしそれが若い女であるらしいことは、彼女もお捨の申立てと一致してゐた。

「その女は跣足だつたかえ。」

「はい。どうもさうらしいうございました。」と、お伊勢は思ひ出したやうに云つた。

年のわかい、白地の浴衣を着た跣足の女、それだけのことはもう疑ふ餘地がなかつた。半七はその上にもう少し何かの手がかりを得たかつたが、相手は兎かくに涙が先に立つので、しどろもどろの其口から何を聞き出せさうもないと諦めて、半七はそのまゝお伊勢を歸して遣ふことにした。

「どうぞ娘のかたきをお取りください。」

お伊勢はくり返して頼んで歸つた。やがてもう午に近くなつたので、半七は庄太を誘ひ出して近所の小料理屋へ飯を食ひに行つた。

「どうですえ、親分。お調べはもうこんなものですか。」と、庄太は酌をしながら小聲で訊いた。「どうも仕方がねえ。差當りはこのくらゐかな。」と、半七も小聲で云つた。「そこで、おれの考へぢやあ、この一件は二つの筋が一つにこぐらかつてゐるらしい。先づ人を啖ひ殺す奴は獸物だな。」

「さうでせうか。」

「人を啖ふばかりぢやあねえ。そこらで鶏がたびくなくなるといふ。勿論、鬼娘が見あたり次第に相手を取つ捉まへて、人間でも鳥でも構はずに、その生血を吸ふのだと云へば云ふもの、どうもさうは思はれねえ。ちよいと、これをみてくれ。」

半七は袂をさぐつて、鼻紙にひねつたものを出すと、庄太は大事さうにあけて見た。

「こんなものはどこで見つけたんですえ。」

「それは露地の奥の垣根に引つかゝつてゐたのよ。勿論、あすこのことだから何がくゞるめえものでもねえが。なにしろそれは獸物の毛に相違ねえ。」

「さうですね。」と、庄太は丁寧に紙をひろげて、その上にうづ巻いてゐるやうな五六本の黒い毛を透すやうに眺めてゐた。

「まだそればかりぢやあねえ。垣根の近所には四足のあとが附いてゐた。と云つたら、犬や猫のやうなものは幾らも其處らにうろつてゐると云ふだらうが、おれには些つと思ひ當ることがあるから、かうして大事に持つて來たんだ。」

半七はかれの耳に口をよせて囁くと、庄太は幾たびか首肯した。

「さうかも知れませぬね。ところで、鬼娘の方はなんでせう。やつぱり氣ちがひでせうかね。」
「氣ちがひかなあ。」と、半七は相手をじらすやうに笑つてゐた。

「だつて、おまへさん。猫ぢや猫ぢやでも踊りやあしめえし、手拭をかぶつて、浴衣をきて、跣足でそこらをうろろしてゐるところは、どうしても正氣の人間の所作ぢやありませんせ。ねえ、さうでせう。」と、庄太は少し口を尖らせた。

「それもさうだが、まあ聽け。」

半七は再びかれに囁くと、庄太はだんくんに顔を崩して笑ひ出した。

「なるほど、なるほど。いや、どうも恐れ入りました。屹とそれです、それに相違ありませんよ。」

「ところで、それについて何か心あたりはねえかな。」

庄太は更に顔をしかめて考へてゐたが、やがて両手をぽんと打つた。

「あります、あります。」

「あるかえ。」

「もし、親分。かういふお誂へ向きのがありませんぜ。」

今度は庄太がさゝやくと、半七は微笑んだ。

「もう考へることはねえ。それだ、それだ。」

二人は手筈をしめし合せて一旦別れた。半七はそれから小梅の知己をたづねて、夕七つ（午後四時）を過ぎた頃に再び庄太の家をたづねると、となりの葬式の時刻はもう近づいて露地のなかは混雑してゐた。ふだん評判のよくない親子ではあつたが、それでも近所の義理があるのと、もう一つにはお作の横死が人々の同情を惹いたとみえて、見送人は案外に多いらしかつた。庄太の家では女房が子供を連れて會葬することにして、庄太は半七の來るのを待つてゐた。

「もう歸つたのか。」

云ひながら半七は家へ這入ると、庄太は待兼ねたやうに出て來て、すぐに半七を内へ招き入れた。

「さつき歸つて來て、待つてゐましたよ。」と、庄太は誇るやうに云つた。「まつたく親分の眼は高げえ。十に九つは間違ひなしですよ。大抵のことはもう判りました。」

「そりやお手柄だ。やつぱりおれの鑑定通りだな。」

「さうです。さうです。」

かれが摺寄つて囁くのを、半七は一々うなづきながら聽いてゐた。

「さうすると、さつきの約束通りにするかな。」

「さうするより外に仕様がありますまい。」と、庄太も云つた。「なにしろ確かな證據を握らないぢやあ、あとが面倒ですからね。」

「まつたくだ。あとで世話を焼かされるのも困るからな。ぢやあ、仕方がねえ。いよく一と汗かくかな。」

「それほどのことありませんめえ。」

「さうでねえ。むかうには怖ろしい味方が附いてゐるからな。」と、半七は笑つた。「だが、まだ早い。隣のとむらひの門送りでも済ませてから、まあ、ゆつくり出掛けるとしようぜ。」

「えゝ、暗くなるにはまだ間がありますからね。腹ごしらへでもして、ゆつくり出かけませう。」

「違えねえ。戰場だからな。」

「鰻でも取りますか。」

「それがよからう。」

鰻の蒲焼を注文して、二人は早い夕飯をすませると、七月の日もかたむいて来た。露地のなかは一としきり騒々しくなつて、となりの葬式もとどほりなく出てしまふと、半七ひとりを残して庄太は再びどこへか忙がしさうに出て行つた。あたりはだん／＼に薄暗くなつて、どこからとも無しに藪蚊のうなり聲が湧き出して来たので、半七は舌打ちした。

「庄太の奴め、そ／＼くさして、蚊いぶしを忘れて出て行きやがった。とても遣切れねえ。そこらに道具があるだらう。」

半七は臺所へ行つて、土焼の豚をさがし出して来た。更にそこらを捜しまはつて、やうやく蚊いぶしの仕度をしたところへ、一人の男がたづねて来た。

「庄太さん。内ですかえ。」

「あい、あい。」と、半七はすぐに起つて出た。「おまへさんは庄太にたのまれて来なすつたんぢやあねえかね。わたしは半七ですよ。」

「親分さんですか。」と、男は會釋した。「さつき庄太さんから話があつたもんですから。」

「どうも御苦勞。おまへさんに少し手を貸して貰はなけりやあならねえ事が出来たんでね。ま

あ、おかけなせえ。」

この男にも何か囁くと、かれは笑ひながら首肯した。

「大丈夫かね。」と、半七は念を押した。

「まあ、うまく遣りませう。」

「こゝにゐて藪蚊に責められてゐるのも智慧がねえ。おまへさんが恰度来たから、もうそろ／＼出かけるとしようか。」

型ばかりに戸をひき立て、内は留守だからと隣の人に斷つて、半七は彼の男と共に露地を出ると、表通りはもう夜になつてゐた。かねて打合はせがしてあるので、半七はなるべく往來の少いところを擇んで、善龍院といふ寺の角に立つた。この寺には辨天が祀つてあるので近所でも知られてゐた。こゝらは一種の寺町ともいふべきところで、兩側に五六軒の寺が向ひ合つてゐて、古い練堀や生垣の内から大きい樹木の枝や葉の擴がつてゐるのが、宵闇の夜をいよ／＼暗くしてゐた。そこらの大溝ではもう秋らしい蛙の聲が寂しくきこえた。半七は頬かむりをして寺の門前

に立つと、連の男は折り曲つた練堀の横手にかくれて、蜘蛛のやうに堀際に身をよせてゐた。
よし原通ひらしい鼻唄の聲を聴きながら、二人はこゝに半時ほど待ち暮してゐると、暗いなかから人の来るやうな足音が低くきこえた。勿論、今までに幾人も通つたが、北の方からきこえて来るその足音がどうも待つてゐるものであるらしく直覺されたので、半七は小聲で咳きの合圖をする、堀の横手からもその返事があつた。

北から来る足音はだん／＼近いて、それは素足で土を踏んでゐるやうな、極めて低い潜めいた響きであつたが、耳の敏い半七にはよく聴き取れた。注意して耳をすますと、それは人の足音ばかりでなく、四つ這ひに歩く獸の足音もまじつてゐるらしかつた。何分にも暗いので、半七は星あかりに透しながら聲をかけた。

「もし、姐さん。」

人はなんにも答へなかつたが、暗い底で俄に獸の唸るやうな聲が低くきこえた。半七は再び咳き拂ひをすると、堀の横手から彼の男が跳り出た。かれは太い棒を持つてゐるのであつた。暗いなかで獸の吠える聲がけたましく聞えた。同時にこゝへ駆けてくる草履の音がきこえた。

逃げようとする女は、半七に曳き戻されて、寺の門前に捻ぢ伏せられた。人と獸との闘ひもやがて終つたらしく、寺町の闇は元の静けさに復つた。
「どうした。」と、半七は聲をかけた。「石橋山の組討で、ちつとも判らねえ。」
「大丈夫です。」
それは庄太の聲であつた。

四

灯のあかるい往來へ引き摺つてゆかれたのは、白地の浴衣をきた廿歳あまりの女であつた。かれは左のみ醜い容貌ではなかつたが、白く塗つた顔をわざと物凄く見せるやうに、その眼の縁を青くぼかしてゐた。口唇にも齒齦にも紅を濃く染めて、大きい口を眞赤にみせてゐた。とんだ芝居をする奴だと、かれは半七に笑はれた。

自身番へ引つ立てられた時、彼女は狂女を粧つてその場を逃れる積りであるらしかつたが、あとから彼の男と庄太とが大きい黒犬の死骸を引き摺つて來たので、かれの狂言は結局不成功に終つた。

彼女はお紺といふ獸つかひであつた。子供るときから熊や狼をつかふことを習ひおぼえて、

以前は兩國の見世物小屋に出てゐたこともあつた。方々の寺内で縁日の小屋掛け興行に出たこともあつた。近在や近國の祭禮などに出稼ぎに行つたこともあつた。本職の藝當はなか／＼上手であつたが、かれは色々の悪い癖を有つてゐた。女に似あはない大酒は、かういふ商賣の者として大目にも見られたのであるが、そのほかに誰にもゆるされないので、彼女の手癖のわるいことであつた。それは殆ど天性ともいふべきで、お紺は手あたり次第に樂屋中のものを何でも盗んだ。金は勿論であるが、櫛でもかんざしでも、貰入れでも煙管でも、眼に觸れるものは何でも逃さなかつた。それも最初のうちは、あやまつて堪忍されたのであるが、あまりにそれが度重なるので、ほかの藝人がすべて彼女と一座するのを嫌ふやうになつた。結局かれは香具師の仲間から構はれて、どこの小屋へも出ることが出来なくなつた。

お紺はよんどころなく商賣をやめて、そこらを流れ渡つてゐるうちに、吉原のある女郎屋の妓夫と一緒になつて、よし原の堤下の孔雀長屋に世帯を持つことになつた。亭主も元より身持のよくない男であつたが、お紺は亭主を持つても大酒をやめないもので、その内證はひどく苦しかつた。夏が過ぎても、かれは白地一枚のほかには洗ひ替への浴衣すらも持たなかつた。近所となり

かうなると、かれの悪い癖はいよ／＼増長して來た。お紺は方々の店先で手あたり次第に品物を搔つ攫つた。而もあるところではそれを見つけられて、店の者に袋叩きにして追ひ拂はれたことがあつたので、その苦い經驗から彼女は一種の味方を作ることを考へ出した。彼女はそこらにさまよつてゐる野良犬のなかで、性質の癡猛らしいのを二匹も拾ひあげた。暴い獸を仕込むのに馴れてゐる彼女は、巧みに二匹の犬を教へて、自分の仕事に出る時にはかならず一匹づつを連れてゆくことにした。晝では人の目に立つので、かれは日の暮れるのを待つて犬を連れ出すと、犬は教へられた通りに、主人のあとを追つて行つた。それも人の注意をひかないやうに、主人より二三間ぐらゐは距れてゆくのを例としてゐた。熊や狼をあつかつてゐたお紺に取つては、犬を狎らすのは容易であつた。二匹の犬はなんでも素直に主人の命令をきいた。

彼女はかういふことに一種の興味を有つてゐるので、更に自分の顔を怪しくみせることを考へた。それは自分が仕事をする場合に、ひとを嚇すためでもあつた。萬一取押へられた場合に狂女を粧つて巧みに逃れようとする用心の爲でもあつた。彼女は怪しく化粧した顔を手拭につゝんで、わざと跣足であるいた。さうして、彼女のゆくところには、必ず一匹の癡猛な犬が影の形にしたがふが如くに附いて行つた。

鼻緒屋のお捨はそれに嚇されたのであつたが、時刻は宵で、しかも往來のまん中であつたので、彼女は單にその弱い魂を脅やかされたに過ぎなかつたが、酒屋のお傳は若い命をうしなつたのである。お紺が酒屋の裏口をうかゞつて、その物置から何か持出さうとするところへ、恰もお傳が來あはせて、かれを怪しんで取押へようとしたので、忠實な犬はたちまち相手に飛びかゝつて主人を救つた。犬がその敵に噛みつくのは、いつも喉笛の急所であるべく教へられてゐた。第二の生贄となつた小間物屋の女房も、やはり同じ運命であつた。而も第三のお作の場合は、見咎められたまゝにお紺がおとなしく立去つてしまへばよかつたのであるが、彼女はお作が白い肌をあらはして素つ裸で行水をつかつてゐる姿をみて、一種の残酷な興味を湧かせた。かれは血に飢ゑてゐる犬を嗾かけて、お作を咬ませたのであつた。さうして、自分の運命をも縮める端緒を作り出したのであつた。

そのほかにもお紺は所々で盗みを働いてゐたが、幸ひに人にも見咎められなかつたのである。そこらで鶏をぬすんだのも、やはり彼女の仕業であつた。その申立てによると、お紺も最初は鶏に眼をつけてゐなかつたが、ある時にその犬が一羽の鶏を咬んだのをみて、なんでも盗むことに興味を有つてゐた彼女は、その以來、犬をつかつて鶏を捕らせることをも思ひ付いたのである。その鶏は自分も食つたが、多くは千住あたりの鳥屋へ賣つたと白狀した。かれは更にその犬をつかつて、猫を捕らせることをも考へてゐるうちに、自分が半七の手に捕はれてしまつた。

お紺は引きまはしの上で、千住で獄門にかけられた。三人までも人の命をほろぼしてゐるのであるが、ひとりも自分が手をおろしたのでない。いづれも犬を使つたのであると云ふことが諸人の好奇心を唆つて、それが江戸中の評判になつた。江戸の町奉行所が開かれて以來、こんな人殺しの記録は曾てなかつた。

かれが引きまはしになる時に、一匹の犬も頑丈な口輪をはめられて、その馬のあとから牽かれて行つた。しかし侍の刀で畜生の首を斬ることはしなかつた。犬は主人の首の晒されてゐる獄門臺の下に生きながら埋められて、その首だけを土の上に晒されてゐた。かれも勿論幾日かの後に主人のあとを追つたが、其後も刑場のあたりでは夜ふけに犬の悲しい啼聲がきこえるとかいふ噂が傳へられて、通行の人々を恐れさせた。お紺の亭主はなんにも知らないといふので、この事件に關する重い仕置は免れたが、平生の身持よろしからずといふ罪名の下に、入牢百日の上で追放を申渡された。

「まあ、かういふ譯なんです。」と、半七老人は一息ついた。「わたくしも初めは何がなんだか見當が付かなかつたんですが、淺草へ出かけて、鶏の一件に打つかつてから、何うもその鶏の一件と鬼娘の一件とが何かの糸を引いてゐるらしいと思ひ付いたんです。それからだん／＼調べて行つた揚句に、なんでも人間が犬をつかつて遣る仕事だらうと睨んだので、庄太にそれを相談すると、よし原の堤下にお紺といふ獸物使ひで、質のよくない女が住んでゐるといふ。それから庄太を探索にやると、果してお紺の家には二匹の強さうな犬が飼つてあるといふ。もうそれで、種がすつかり擧つてしまつて、案外に譯なく片付いたんです。捕物の方から云へば樂なんです、唯そのお紺が犬を連れてゐるといふので少し困りました。そこで、庄太の近所にある腕つ節の強い男を味方にたのんで、人間も犬も一緒に片付けてしまつたんです。それでも其場でぶち殺された犬は仕合せで、生残つてゐた方は飛んだ酷たらしいお仕置をうけて可哀さうでした。これが江戸中の評判になつて、お紺は犬神使ひだなどといふ噂もありましたが、種を割つてみれば今云つたやうなわけで、唯その遺口がめづらしいので、ちよつと世間をおどろかしただけのことですよ。でも、まあ、いゝ鹽梅に、その後再びそんな眞似をする奴も出ませんでした。今日ならば死骸の疵口をあらためただけで、人間が咬んだのか、獸が咬んだのか、そのくらゐのことはすぐに鑑定が付くでせうが、昔はそれがよく判らなかつたんですね。それだけに探索の方も餘計に骨が折れたんですよ。」

熊の死骸

神信心といふ話の出たときに、半七老人は云つた。

「むかしの岡つ引などといふものは、みんな神まゐりや佛参りをしたものです。上の御用とはいひながら、大勢の人間に繩をかけては後生が思はれる。それで少しでも暇があれば、神佛へ参詣する。勿論それに相違ないのですが、一つにはそれもやつぱり商賣の種で、何かのことを聞き出すために、諸人の寄りあつまる所へ努めて顔出しをしてゐたんです。わたくしなども其のお仲間であつた。年を取つた今日よりも却つて若いときの方が信心参りをしたものです。いや、その信心に關係のあることではないのですが、弘化二年正月の廿四日、けふは龜戸の鷺替へだといふので、午少し前から神田三河町の家を出て、龜戸の天神様へおまゐりに出かけました。さうすると、晝の八つ時（午後二時）過ぎに、青山の權太原——今はいつの間にか權田原といふ字に變つてゐるやうで

す。——の武家屋敷から火事が始まつたんです。この日は朝から強い北風で、江戸中の砂や小砂利を一度に吹き飛ばすといふやうな物騒な日に、生憎とまた紅い風が吹き出したのだから堪りません。忽ちにそれからそれへと燃えひろがる始末。しかし初めのうちは龜戸の方でもよくは判らず、どこか山の手の方角に火事があるさうだくらの噂だつたのですが、兎も角もこの大風に燃え出した日にはなかく、容易に鎮まる氣遣ひはないと思つたので、龜戸からすぐに引返して来たのは夕七時半（午後五時）を過ぎた頃でしたが、もうその頃には青山から麻布の空が一面に眞紅になつてゐました。三田の魚籃の近所に知り人があるので、丁度そこに居あはせた徳次といふ子分をつれて、すぐにまた芝の方面へ急いで行くと、こゝに一つの事件が出来したんです。」

前にもいふ通り、この火事は青山の權太原から始まつて、その近所一圓を焼き拂つた上に、更に麻布へ飛んで一本松から鳥居坂、六本木、龍土の邊を焼き盡して、芝の三田から二本榎、伊皿子、高輪まで燃えぬけて、夜の戌の刻（午後八時）を過ぎる頃にやうく鎮まつた。今日の時間によれば僅かに六時間ぐらゐのことであつたが、何分にも火の足が疾かつたので、焼亡の町数は百廿六ヶ町といふ大火になつてしまつて、半七が三田へ駆けつけた頃には、知り人の家などはも

う疾うに灰になつてゐて、その立退先も知れないといふ始末であるので、江戸の火事に馴れ切つてゐる彼も呆氣に取られた。

「馬鹿に火の手が早く廻つたな。やい、徳。これぢやあ仕様がねえ。今度は高輪へ行け。」

「伊豆屋へ見舞に行くんですか。」と、徳次は云つた。

「この分ぢやあ見舞の挨拶ぐらゐぢや濟むめえ。火の粉をかぶつて働かなけりやなるめえよ。」高輪の伊豆屋彌平はおなじ仲間であるから、半七はそこへ見舞にゆく積りで、更に高輪の方角へ駆けぬけてゆくと、日はもうすつかり暮れ切つて、闇やみの空の下に眞紅な火の海が一面にがう／＼と沸きあがつてゐた。ふたりは濡手拭に顔をつゝんで、尻端折りの足袋はだしで、兎もかくも高輪の大通りまで出て来たが、もうその先へは一足も進むことが出来なくなつた。

なにぶんにも風の勢ひが強いので、飛火はそれからそれへと燃え擴がつて、うしろが焼けてゐるかと思ふうちに、二三町先がもういつの間にか燃えてゐるので、前後をつゝまれて逃場をうしなつた類焼者は、風と火とに追ひ遣られて海邊の方へよんどころなく逃げあつまると、その頭の上には火の粉が容赦なく振りかゝつて来るので、こゝでも逃げ惑つて海のなかへ轉げ落ちたものが幾百人と傳へられてゐる。かうした怖ろしい阿鼻叫喚のまん中へ飛び込んだ二人は、いくら物

馴れてゐても流石に面喰つて、あとへも先へも行かれなくなつた。うっかりしてゐれば自分等の肩へも火が付きさうなので、ふたりは火の粉の雨をくゞりながら、互ひの名を呼んだ。

「徳。氣をつけるよ。」

「親分。とてもいけませんぜ。伊豆屋まで行き着くのは命懸けだ。第一、これから行つたつて間に合ひませんぜ。」

「さうかも知れねえ。」と、半七も云つた。「間に合つても合はねえでも、折角来たもんだから兎も角もそこまで行き着きてえと思つてゐるんだが、どうもむづかしさうだな。」

「怪我でもすると詰らねえ。もう好加減にしませうよ。伊豆屋の見舞なら、これから家へ引返して握り飯の仕度でもさせた方がようござんす。どうで消めつた後でなけりや行かれやしません。さういふ中にも、なだれを打つて逃げ迷つてくる半狂亂の人々に押されて揉まれて、二人も幾たびか突き顛されさうになつた。火は大通りまで燃え出して、その熱い息が二人を蒸して来たので、半七ももうあきらめるより外はなかつた。

「ぢやあ、徳。もう歸らうよ。」

「歸りませう。」と、徳次もすぐに同意した。くゞくゞしてゐて烟にまかれでもした日にやあ助か

らねえ。」

ふたりは方向を換へようとして本芝の方へ振り向く途端に、わつといふ叫びがまた俄に激しくなつて、逃げ惑ふ人なだれが二人を押倒すやうに頽れて来た。

「親分。あぶなうがすぜ。」

「手前もしつかりしろ。」

群集に揉まれて、ふたりは四五間も押戻されたかと思ふときに、大きい獣が自分達のそばに來てゐることを發見した。晝よりも紅い火に照されて、混雑の中でもその正體がすぐに判つた。それは大きい熊であつた。どこから飛び出して來たのか知らないが、彼もおそらくこの火に追はれて、人間と一緒に逃場をさがしてゐるのであらう。しかし人間に取つては怖ろしい道連れであるので、猛火に焼かれようとして逃げ惑つてゐる人たちは、更にこの猛獸の出現に脅かされた。むかしの合戦に火牛の計略を用ゐたとかいふことは軍書や軍談で知つてゐるが、いま眼のあたりに火の粉を浴びた荒熊の哮り狂つてゐる姿を見せられた時には、どの人も異常の恐怖に襲はれて、悲鳴をあげながら逃げ迷つた。

熊もいたづらに人を脅かすために出て來たのではない。火を恐るゝ彼は殆ど死物狂ひの勢ひ

で、どこからか逃げ出して來たらしく、勿論人間に咬みつくやうな餘裕はなかつたが、それでも時々起ちあがつて、自分のゆく先の邪魔になる人々をその強い手で殴き倒した。殴かれた者はもう起きることは出來ないで、あとから駆けて來るものに慘たらしく踏みにじられた。火事場の混雑はこの猛獸の出現のために、更に一層の恐怖と混乱とを加へた。

「あぶねえ。あぶねえ。」と、半七は誰に注意するともなしに思はず叫んだ。

「あぶねえ、あぶねえ。熊だ、熊だ。」と、徳次も一緒に喚いた。

「熊だ、熊だ。」と、大勢も逃げながら叫んだ。

丁度そのときに十七八の若い娘が下女らしい女に手をひかれながら、混雑のなかをぐりぬけて來て、どう狼狽へたか恰も彼の熊のゆく先へ迷つて出たので、怒れる熊は人のやうに突つ立ちあがつて、邪魔になる其娘を引つ摺まうとした。その危い一刹那に、ひとりの若い男が横合から轉がるやうに飛び出して來て、いきなり熊の胸腹に組み付いた。かれは幾らかの心得があると思へて、自分の頭を熊の月の輪のあたりにしつかりと押付けて、両手で熊の前足を摺んでしまつた。しかも熊の強い力で振飛ばされては堪らない、かれは大地に手ひどく叩き付けられた。

それは實に一瞬間の出來事ではあつたが、かれが身を楯にして熊を遮つてゐるひまに、娘も下

女も危難を逃れた。そればかりでなく、熊は何者にか眞向に斬られた。つゞいてその急所といふ月の輪を斬られた。それは二人の武士の仕業で、いづれも刀をぬき閃かしてゐた。かれ等は熊の斃れたのを見とゞけて、そのまゝ何處へか立退いてしまつた。

「このふたりは西國の某藩中の父子連れださうです。」と、半七老人はこゝで註を入れた。「後にそのことが聞えたので、殿様から御褒美が出たと云ひます。なんとといふ人達だか、その名は傳はつてゐませんが、永代橋の落ちた時に刀をぬいて振りまはしたのと同じやうな手柄ですね。」

二

熊は殺されてしまつたが、それを遮らうとした彼の若い男はそこに倒れたまゝで、なか／＼起きあがりさうにも見えなかつた。打つちやつて置けば、大勢に踏み殺されてしまふかも知れないので、半七はすぐに駆け寄つてかれを抱き起すと、徳次も寄つて来て、兎もかくも彼を混雜のなかから救ひ出した。

「親分。どこへ擔ぎ込みませう。」

この騒ぎの中でどうすることも出来ないで、かれを徳次に負はせて、半七はそのゆく先を拂

ひながら、どうにか斯うにか混雜の火事場からだん／＼に遠ざかつて、本芝から金杉へ出ると、こゝらは風上であるから世間も左のみ騒がしくなかつた。こゝまで来れば大丈夫だと思つたので、二人はその自身番に怪我人をつぎ込んで、先づほつと息をついた。

「どなたでございますか。どうも有難うございます。」と、徳次の背中からおろされた男は禮を云つた。

挨拶が出来るほどならば大したことはあるまいと安心して、半七は自身番の男どもと一緒に彼を介抱すると、男は熊に殴られたために左の二の腕を傷めてゐるらしかつたが、そのほかにひどい怪我もなかつた。自身番から近所の醫師を迎ひに行つてゐる間に、かれは自分の身許をあかした。彼は加賀生まれの勘藏といふもので、二三年前から田町の車湯といふ湯屋の三助をしてゐると云つた。

「家は焼けたのかえ。」と、半七は訊いた。

「さあ。たしかには判りませんが、なにしろ火の粉が一面にかぶつて来たので、あわてゝ逃げ出してまゐりました。」

「熊に出つくはした娘は主人の娘かえ。」

「いゝえ。一軒隔いて隣の備前屋といふ生薬屋の娘さんでございます。」と、勘藏は答へた。「わたくしが人込のなかを逃げて来る途中、丁度あすこで出會つたもんですから、前後の考へもなしに飛び出して、いやどうも危い目に逢ひましてございます。」

「だが、好いことをした。」と、半七は褒めるやうに云つた。「お前だからまあその位のことでは済んだが、あんな屏細い娘つ子が荒熊に取つ捉まつて見ねえ、どんな大怪我をするか判つたもんぢやあねえ。備前屋でも定めて有難がることだらうよ。あの娘はなんと云ふ子だえ。」

「お絹さんと云つて、備前屋のひとり娘でございます。」

「備前屋は古い暖簾だ。そのひとり娘が熊に傷られるところを助けて貰つたんだから、向うぢやあどんなに恩に被ても好いわけだ。」

こんなことを云つてゐるうちに、醫師が来た。醫師は勘藏の痛み所を診察して、左の腕の骨を傷めてゐるらしいから、なか／＼手輕には癒るまいと云つた。しかし命に別條のないことは醫師も受合つたので、半七はあとの始末を自身番にたのんで歸つた。

あくる朝、半七は再び徳次を連れて高輪へ見舞にゆくと、伊豆屋の家は果して焼け落ちてゐた。その立退先をたづねて、それから三田の魚籃の知り人の立退先をも見舞つて、歸り途に半七

はゆうべの勘藏のことを云ひ出した。あれからどうしたかと噂をしながら、ふたりは田町へ行つてみると、車湯も備前屋も本芝寄りであつたので、どつちも幸ひに焼け残つてゐた。半七は先づ車湯をたづねて、勘藏のことを女房にきくと、彼は自身番で醫師の手當をうけて、左の腕をまいて歸つて来たが、痛みはなか／＼去らないので、ゆうべからそのまゝ寝てゐるとのことであつた。

「備前屋から見舞にでも来たかえ。」と、半七はかさねて訊いた。

「いゝえ。一度もたづねて来ないんです。」と、湯屋の女房は不平らしく訴へた。「ねえ、お前さん。備前屋もあんまりぢやありませんか。あんな大きな家臺骨をしてゐながら、自分の家のひとり娘を助けて貰つた。云はゞ命の親の勘藏のところへ一度も見舞を遣さないといふのは、あんな義理も人情も知らない仕方ぢやありませんか。」

それは勘藏に對する不義理不人情ばかりでなく、主人の自分に對しても禮儀を知らない仕方ではあるまいかと女房は憤つた。それも畢竟はこつちが女主人であると思つて、備前屋ではおそれなく馬鹿にしてゐるのであらうといふ、女らしい偏執まじりの愚知も出た。その偏執や愚知は別として、備前屋が今まで素知らぬ顔をしてゐるのは確かに不義理であると半七も思つた。

「併し備前屋ぢやあどさくさ紛れで、まだその事を知らねんぢやねえか。」

「なに、知らないことがあるもんですか。」と、女房は鐵漿の齒をむき出した。「備前屋の小僧がちやんとさう云つてゐるんですもの、家のお絹さんは熊に啖はれやうとすると、こゝの勘さんに助けられたと……。奉公人がみんな知つてゐるくらゐですから、主人が知らない筈はありません。第一、女中だつて一緒にゐたんぢやありませんか。」

「それもさうだな。」と、半七は徳次と顔を見あはせた。「なにしろ勘藏は氣の毒だ。俺が行つて備前屋に話してやらう。ちよくら癒る怪我ぢやあねえといふから、なんとか懸合つて療治代ぐらゐ貰つて遣らなけりやあ、當人も可哀さうだし、こゝの家でも困るだらう。」

「何分よろしく願ひます。ですけれども、あの備前屋は町内でも名代の因業屋なんですから。」
 「吝でも因業もで理窟は理窟だ。」と、徳次も口を尖らした。「そんなのを打つちやつて置く癖になる。ねえ、親分。これから押掛けて行つて因縁をつけて遣らうぢやありませんか。」

「無理に因縁をつけるにも及ばねえが、ひと通りの筋路を立て、懸合つてみよう。」

その足で備前屋へ行くと、家のなかはまだ一向片附いてゐないらしく、ゆうべ持ち出したまゝの家財諸道具が店一杯に積み重ねられて、埃と薬との匂ひが眼鼻にしみた。その混雜の最中にこ

んな懸合をするのも拙いと思つたが、半七はそこらに立働いてゐる店の者をよんで、主人は家にゐるかと言くと、主人夫婦と娘とは橋場の親類の方へ立退いてゐるとのことであつた。そんなら番頭に逢はせてくれと云ふと、四十ばかりの男が片襪の手拭をはづしながら出て來た。

「手前が番頭の四郎兵衛でございます。」

此方の身分をあかした上で、半七はゆうべの熊の一件を話した。こゝの娘のあやふいところを車湯の三助の勘藏が自分のからだを楯にして救つたのは事實で、自分とこの徳次が確かな證人である。命に別條はないが、勘藏の傷は重い。多寡が湯屋の三助で、長い療治は、随分難儀なことであらうと思ひやられるから、主人とも相談してなんとか面倒を見てやるやうにして遣つては何うであらう。勿論これは表向きの御用事ではないが、自分もそれにかゝり合つた關係上、まんざら知らない顔もしてゐられないから折入つて頼みに來たのであると、半七はおとなしく云ひ出すと、四郎兵衛はすこし考へてゐた。

「いえ、勘藏が怪我をしたと云ふことはわたくしも聞いて居ります。見舞にでも行つて遣らうと思ひながら、なにしろ此方も御覽の通りの始末だもんですから、まだ其儘になつてゐるやうなわけでございます。そのことに就きまして、勘藏がお前さんに何かおねがひ申したのでございます。」

か」

「別に頼まれたわけぢやあねえが、あんまり可哀さうだから何とかして遣つて貰ひたいと思ふんだが、番頭さん、どうですな。」

「判りました。」と、四郎兵衛もおとなしく答へた。「いづれ主人とも相談しまして、なんとか致しませう。さう致しますと、勘藏から別にお願ひ申した譯ではございませぬのですな。」

忌に念を押すとは思つたが、半七はどこまでも頼まれたのではないと云ひ切つて別れた。

「變な奴ですな。忌に念を押すぢやありませんか。勘藏が頼めばどうだと云ふんでせう。」と、徳次は表へ出てから囁いた。

「むゝ。どうであんなところの番頭なんて云ふものは判らねえ獣物が多いもんだ。」と、半七は笑つてゐた。「いや獣物といへば、あの熊はどうなつたらう。侍は叩つ切つたまゝで行つてしまつたんだが、その死骸はどうしたらう。犬や猫とは違ふんだから、無暗に取捨てゝもしまはねえだらうが、誰か持つて行つたかしら。品川邊の奴等かな。」

「さうでせうね。」と徳次もうなづいた。「品川とばかりは限らねえ。世間には慾の深え奴が多いから、何かの金にする積りで、どさくさまぎれに引つ擔いで行つたかも知れませぬよ。一體あの熊はどこから出て來たんでせうね。」

「それは判らねえ。江戸のまん中にむやみに熊なんぞが棲んでゐる譯のものぢやあねえ。どこかの香具師の家にでも飼つてある奴が、火におどろいて飛び出したんだらう。伊豆屋でさつき聞いたんぢやあ、あの熊のために廿人からも怪我をしたさうだ。こんな噂は兎かく大きくなるもんだが、話半分に聞いても十人ぐらゐは飛んだ災難にあつたらしい。馬鹿なこともあるもんだ。」

その日はそれで歸つたが、熊の噂はだん／＼に高くなつた。それは麻布の古河の近所に住んでゐる熊の膏藥屋が店の看板代りに飼つて置いたものであることが判つた。膏藥屋は親父とむすめの二人暮して、自分の子のやうにその熊を可愛がつてゐたが、火事の騒ぎで逃がしたのであつた。店は焼かれる。看板の熊には逃げられる。おまけにその熊が大勢の人を傷けたといふので、父子は後難を恐れてどこへか影をかくしたと傳へられた。しかしその熊の死骸はどうなつたか判らなかつた。

三

それから二三日の後に、備前屋では車湯の勘藏に十兩の見舞金を贈つたといふことも半七は聞

いた。夫婦や娘たちは橋場の親類から戻つて来たが、娘のお絹は火事の騒ぎにあまり驚かされたので、それ以来どうも気分が悪いと云つて床に就いてゐる。さうして、とき／＼に熱の加減か言のやうに、「あれ、熊が来た」などと口走るので、家内の者も心配してゐるとのことであつた。その時代では大金といふ十兩の見舞金を貰つて、療治がよく行き届いたせゐるか、勘藏の腕の痛み所がだん／＼に快くなるといふ噂を聞いて、半七も蔭ながら喜んでゐた。

そのうちに今年の春もあわた／＼しく過ぎて、初鯉を賣つて来る四月になつた。その月の晴れた日に勘藏が新しい袷を着て、干菓子ひごかしの折せを持つて、神田三河町の半七の家へ先ごろの禮を云ひに來た。

「どうだね。もうすつかり快いかえ。」と、半七は訊いた。

「ありがたうございます。お庇かきさまでもうすつかりと癒なりました。その節はいろ／＼御心配をか
けまして恐れ入りました。おかみさんもくれ／＼も宜しく申してくれと云つて居りました。」

「なにしろ、早く癒つてよかつた。」と、半七も嬉し／＼に云つた。「時に備前屋の娘はどうした
ね。その後病み付いてゐるとかいふ噂だが……。」

「さうでございます。一時は何だかぶら／＼してゐて、とき／＼に熊が出るとか云つて騒ぐの

で、親達も困つてゐたさうでございます。備前屋は店の大きい割合に奥が狭いので、もう一度、
橋場の親類の離座敷を借りて、そこでゆつくり養生させようかなどと云つてゐたさうですが、こ
の頃は大分快いとか云ひますから、どうなりますか。」

「なるほど、そりや困つたね。」と、半七は眉をよせた。「折角お前に助けて貰つても、あとがそれ
ぢやあ何にもならねえ。併しさういふ病氣ぢやあ無暗に薬を飲んでもいけめえ。どこか閑靜なと
ころへ行つて、ゆつくりと氣を落付けてゐたら、自然に癒るだらうよ。」

「さうかも知れません。」

勘藏はくり返して禮を云つて歸つた。最初から深くも氣に留めてゐなかつたので、備前屋の娘
の噂もいつか半七の記憶から消え失せてしまつた。その月末に、半七は三田の方角へ行つた序に
高輪の伊豆屋を久振りであつた。焼けた家は新しく建て直つたが、主人の彌平は風邪が本で
寝込んでゐた。かれは半七の顔を見てよろこんだ。

「やあ、三河町。いゝところへ来てくれた。實は少し御用事があるんだが、なにしろこの始末で
動きが取れねえ。と云つて、若え奴等にはかり任せて置くのも不安心だと思つてゐたところだが、
どうだらう、おれの代りに采配を振つて、若え奴等を追ひ廻してくれめえか。」

「そこで、その御用といふのはどんな筋だね。」
 「田町の備前屋といふ生薬屋の娘が殺されたのだ。」
 「備前屋の娘が殺された……。」と、半七もすこし驚かされた。「そこで、その相手は誰だか判らねえのか。」

彌平の説明によると、備前屋のお絹の死骸は高輪の海端に横はつてゐたのであつた。海へ投げ込むつもりで引摺つてゆくと、恰もそこへ人でも通り合せたので、あわてゝ其儘に捨てゝ行つたらしい。かれは鋭い刃で胸を抉られてゐた。この頃までぶらゝ病のやうなありさまで、毎日寝たり起きたりしてゐた彼女が、床を揚げてからまだ幾日にもならないのに、どうして夜なかに家をぬけ出したのか。さうして、何者に殺されたのか。勿論誰にも想像は付かなかつた。

「ところが、お前に見せるものがある。」と、彌平は蒲團の下から紙につゝんだものを出した。「これを先づ鑑定して貰えてえ。」

「獣物らしいな。」と、半七はその紙包みをあけて見て云つた。「犬や猫ぢや無さうだ。何の毛だらう。」

このあひだの熊が半七の胸に不圖うかんだ。その獣の毛が五六本、死んだ娘の右の手につかま

れてゐたと云ふのを聞いて、彼はしばらく考へてゐた。

「それは子分の彦の野郎が、何かの手がかりになるだらうといふので、検視の来る前に死骸の手から窃と取つて来たんだ。彼奴なかく敏捷つこい奴よ。どうだい、三河町。なにかのお役に立ちさうなもんぢやあねえか。」

「むゝ、こりや大手柄だ。これを手がかりに何とか工夫してみよう。」

彦八といふ若い手先は親分の枕もとへ呼び付けられて、半七の前で備前屋の娘の死状をもう一度くはしく話せと云はれた。彌平のいふ通り、かれはなかく敏捷つこさうな男で、その報告は頗る要領を得てゐたが、なにぶんにも自分が現場を見とゞけてゐないので、半七にはなんだか慥つたく感じられた。しかし備前屋の娘の手に残つてゐた獣の毛がたしかに熊の毛であるらしいことが少からぬ興味を惹いた。彼はこゝで午飯の馳走になつて、彦八をつれて伊豆屋を出た。

「親分、なにぶん御指圖を顔ひます。」と、彦八は如才なく云つた。

「いや、こゝらはお前達の縄張内で、おれは一向ぼんくらだ。まあ、よろしく頼むぜ。」

差當りどこへ行かうかと思つたが、半七は先づ備前屋をたづねて、なにかの手がかりを探り出さうと、田町の方角へ急いでゆくと、途中で廿五六の男にすれ違つた。男は彦八に挨拶して通り

すぎた。

「あの野郎はどこの奴だえ。」と、半七は彦八に小聲で訊いた。

「六三郎と云つて、小博奕を打つてゐるやくざな野郎ですよ。」

「六三郎……粹な名前だな。その六三郎にお園が用があると云つて牽引いて来てくれ。いや、冗談ぢやあねえ。御用だ。」

御用と聞いて、彦八はすぐに駄げ戻つて、六三郎を引張つて来た。四月末になつてもまだ満足に移りかへが出来ないらしく、かれは汚れた女物の袴を着てゐた。吝な野郎だと多寡をくつつて。半七はいきなり彼を嚇し付けた。

「やい、六。手前、太えことをしやがつたな。眞直に白状しろ。」

「へえ、なんでございます。」

「え、白ばつくれるな。手前の襟つ首にぶら下つてゐるのは何だ。千手観音の上這ひぢやああるめえ。よく見ろ。」

六三郎の襟には何かの黒い毛が二本ほど引つかゝつてゐた。彦八も始めて気がついてよく見ると、それは備前屋の娘の手に残つてゐたのと同じ物であつた。それを発見すると、彦八は俄に眼

をひからせて彼の腕を引つ掴んだ。

「なるほど、親分の眼は捷え。さあ、野郎、神妙に申立てろ。」

「まあ、待て。」と、半七は制した。「なんぼこんな野郎でも往來で詮議もなるめえ。やつぱり自身番へ連れて行け。」

ふたりに引つ立てられて、六三郎は近所の自身番へゆくと、年の若い彦八はすぐに嘯鳴つた。

「この親分は三河町の半七さんだ。内の親分が寝てゐるんで、けふは名代に出て来て呉んなすつたんだが。内の親分より些つと手荒いからさう思へ。手前の襟つ首にぶら下つてゐるものに、親分の不審がかゝつてゐるんだ。さあ、なにも彼も正直に云つてしまへ。辻番の老爺だつて、もうむく犬を抱いて寝る時候ぢやあねえのに、なんだつて手前の中からだに獸物の毛がくつ着いてゐるのか。わけを云へ。」

「手前の襟についてゐるのは熊の毛に違えねえ。」と、半七も云つた。「もう面倒だから長い臺詞は云はねえ。手前は備前屋のお絹といふ娘を殺したらう。物取りか遺恨か拐引か、それを云へ。」調べる者と調べられる者と、はじめから役者の格が違ふので、六三郎は意氣地もなく恐れ入つてしまつた。

「かうなれば何も彼も有體に申上げますが、備前屋の娘はわたくしが殺したんぢやございませんから、どうぞ御慈悲を願ひます。いや、嘘をつくと思召すかも知れませんが、まつたく不思議な話なんです。」

今年の正月、かれは博奕にすつかり負けてしまつて、表へも出られないやうな始末になつて、狭い裏店に猫火鉢をかゝへて燻ぶつてゐると、彼の大火事が起つた。着のみ着のまゝの彼はそれを待つてゐたやうに表へ飛び出して、どさくさまぎれの火事場泥坊を思ひ立つたが、あまりに風と火とが烈しいので、彼も思ふやうな仕事が出来なかつた。いたづらに火の粉に追はれながら混雑のなかをうろ付いてゐると、どこからか荒熊が暴れ出して來たので、かれはいよく面喰つた。しかもその熊がふたりの侍に退治られたのを見とゞけて先づ安心したところへ、かねて顔を識つてゐる車力の百助といふのが來合はせたので、二人はすぐに相談して、その熊の死骸を引つかついで逃げた。熊の膽と熊の皮とは高い價であると云ふことを、彼等はふだんから聞いてゐたからであつた。

二人は兎も角もその熊を六三郎の家へかつぎ込んだが、素人の彼等はそれをどう處分していかを知らなかつた。二日ばかりは縁の下に隠して置いて、百助はそれを自分の知つてゐる皮屋に

賣込まうとしたが、相手は足もとを見て無法に廉く値切り倒したので、ふたりは怒つて破談にしてしまつた。さりとて生物をいつまでも打つちやつて置くわけにも行かないので、今度は品川から傳吉といふ男を呼んで來て、儲けは三人が三つ割りにする約束で、夜ふけに熊の死骸を高輪の裏山へ運び出した。生皮をあつかふのはむづかしい仕事であるが、傳吉は少しくその心得があるので焚火の前でどうにか斯うにかその腹を割いてその皮を剥いだ。しかし肝腎の熊の膽がどれであるか判らないので、三人は當惑した。腹を截ち割つたら知れるだらうぐらゐに多寡をくゞつてゐた彼等は、今更のやうに途方にくれた。

そこで三人は相談を仕直して、更にもう一人の味方を拵へることにした。それは彼の備前屋の番頭の四郎兵衛で、かれは大きい藥種屋の番頭であるから熊の膽の鑑別が付くに相違ない。彼をこつちの味方に誘ひ込んで、かれの口からその主人にうまく賣込んで貰はうといふことになつて、三人は穴を掘つて一先づ熊の死骸を埋めた。剥いだ生皮は自分の方で鞣してやると云つて、傳吉が持つて歸つた。二度目の相談はそれと決まつたものゝ、馴染のうすい四郎兵衛を呼び出して、だしぬけにこんな相談を持ちかける譯にも行かないので、六三郎は車湯の勘藏にその橋渡しを頼まうと思ひついた。

勘藏は四郎兵衛と同國者で、かれは四郎兵衛を頼つて江戸へ出て来て、その世話で近所の車湯へ住み込んだのである。その關係から彼は今でも何かにつけて四郎兵衛の世話になつてゐるらしい。殊にかれは備前屋の娘を救ふために大怪我までしてゐるのであるから、熊の一件とは逃れない因縁もある。かたぐ彼から話し込んで貰ふのが、利であるかと考へて、六三郎はあくまで日すぐに勘藏をたづねてゆくと、かれは痛む腕をかゝへて寝てゐた。備前屋へ熊の膽を賣り込む相談について、かれは一旦躊躇してゐたが、結局その仲間入りをすることになつて、いづれ自分が起きられるやうになつたらば、番頭に話してみようと受合つた。しかし此方は生物をかゝへてゐるのであるから、なるたけ早く相談を持ち込んでくれと掛合つてゐるところへ、恰も彼の番頭の四郎兵衛が主人の使で勘藏を見舞に來たので、その枕邊ですぐにその相談をはじめると、相當の値段ならば引取つてもいゝと四郎兵衛は云つた。

その晩、六三郎は四郎兵衛を高輪の裏山へ案内して、熊を埋めたところへ忍んでゆくと、ゆうべ新しく掘つた土は更に何者にか掘返されたらしい跡がみえるので、かれは一種の不安に襲はれた。あわてゝ其土を掘つてみると、生々しい熊の死骸は元のまゝに埋められてゐたが、その腹のなかに肝腎の熊の膽が無いといふことを四郎兵衛から云ひ聞かされて、六三郎もおどろいた。何

者かが彼等よりも先に死骸を掘り出して、熊の膽を盗み去つたのであらうといふ説明を聞かされて、かれはいよゝく驚いてがっかりした、四郎兵衛も失望したやうな顔をして歸つた。六三郎もその盗人の疑ひを品川の傳吉と車力の百助とにかけて、すぐに二人を詮議したが、かれ等はなんにも知らないと言つた。いくら眞赤になつて云ひ合つても、所詮は水掛論で果てしが付かなかつた。かれら三人の所得は傳吉の手に渡された熊の皮一枚に過ぎないことになつてしまつた。

四

六三郎が傳吉と百助とを疑ふと同時に、ふたりの方でもまた六三郎を疑つてゐるので、彼等のあひだには自然に仲間割れが出來た。傳吉は彼の生皮を糶してしまつたが、なんとか理窟をつけてゐて、素直にそれを此方へ渡さうとしないので、六三郎は腹を立てた。熊の皮一枚が一體いくらを有つてゐるものか、六三郎もよくは知らなかつたが、兎もかくも折角の獲物を彼等ふたりに着服されるのは、あまりに忌々しいと思つたので、かれは車力の百助のところへ度々催促に行つて、しまひには腹立ちまぎれに喧嘩をして歸つた。すると、ゆうべになつて彼の百助は熊の皮を持つて六三郎の家へたづねて來た。

皮はこの通りに鞣めしたが、こつちには何分には賣口がないから、この皮をそつちで引き取つて、自分たち二人には骨折賃として三兩の金をくれと百助は云つた。そんな金を持つてゐる筈も無し、またそんな金を拂ふ理窟もないと六三郎は剣もほろゝに跳ねつけて、結局こゝで二度の喧嘩になると、百助も腹立ちまぎれに、そんならこの皮を證據にして貴様の罪を訴へてやると毛皮を引つかゝへて表へ飛び出した。訴へれば彼も同罪である。よもやそんな無鐵砲な眞似はしまいと思ひながらも、根がそれほどの大膽者でない六三郎はなんとなく不安心にもなつて、彼のあとからつゞいて飛び出した。高輪の海邊で追ひついて、かれは百助を引き戻さうとすると、百助はおそらく嚇し半分であらう。無理に振切つて行かうとするので、ふたりは夜の海端で搦みあひを始めた。なにしろ證據物の毛皮を取戻してしまはうと燥つて、六三郎はかれの手から一旦それを奪ひ取ると、百助がまた取返した。取つたり、取られたりして争つてゐるうちに、二人は毛皮をそこへ投り出して死身のむしり合ひになつた。

かうして、ふたりが夢中でむしり合つてゐる最中に、うしろの方で突然に女の悲鳴がつけけて聞えたので、かれ等もびつくりして見かへると、ひとりの女がそこに倒れてゐた。喧嘩もしばらく中止になつて、ふたりは兎も角もその女を引き起さうとすると、かれは恰も毛皮の上に倒れてゐて、おそらく苦痛のためであらう、片手は熊の毛を強くつかんでゐた。更によくみると、その女の胸のあたりには、温い生血が流れ出してゐるらしいので、二人はまた驚かされた。百助は後刻を恐れて先づ逃げ出した。六三郎も一緒に逃げかけたが、なにかの證據になるのを恐れて又あわただしく引つ返して来て、女の手からその毛皮をもぎ取つて逃げた。

お絹と六三郎と熊の毛との關係はこれで判つたが、お絹を殺した下手人は判らなかつた。六三郎はまつたく知らないと言ひ切つた。その申立てに詐りがありさうにも見えないので、六三郎は單に火事場かせぎとして大番屋へ送られた。同類の百助も自分の家にぼんやりと寝轉んでゐるところを彦八に召捕られたが、その申口は六三郎と符合してゐた。血に染みた毛皮は六三郎の家の縁の下から發見された。

さて何奴がお絹を殺したか。と、半七もかんがへた。

兎もかくも備前屋へ行つて聲をかける、番頭の四郎兵衛は蒼ざめた顔をして出て来た。吉五郎は先づ娘の悔みを云つて、かれの家出や下手人に就いてなにか心當りはないかと訊くと、四郎兵衛は一向に心あたりがないと答へた。お絹は五六日前から氣分が快いと云つて起きてゐたが、毎日奥にばかり引籠つてゐて、店へも碌々に出たことはないと言つた。併しかれの何だかおどお

どしてゐるやうな、落ちつかない眼の色が半七の注意をひいた。

「この店には内風呂があるんですか。」と、半七はまた訊いた。

「ごさいます。店の者は車湯へまゐりますが、奥では内風呂に這入ります。」

「この頃に風呂の傷んだことはありませんでしたかえ。」

「よく御存じで……。」と、四郎兵衛は相手の顔を見た。「風呂が古いもんですから、ときどきに損じまして困ります。昨年暮にも一度損じまして、それから四五日前にもまた損じましたが、出入りの大工がまだ来てくれないので困つて居ります。」

「風呂が傷んでゐる間は、奥の人たちも車湯へ行くんでせうね。」

「はい。よんどころなく町内の銭湯へまゐります。」

これだけのことを確めて、半七は更に車湯へ行つた。釜前に働いてゐる勘藏をよび出して、かれは小聲で云つた。

「おい。この間は有難う。ときに少し用があるからそこまで一緒に来てくれ。」

「へえ。どちらへ……。」

「どこでも好い、當分は歸られねえかも知れねえから、おかみさんに暇乞ひでもして行け。」

勘藏の顔色はたちまち灰のやうになつた。半七に引つ立てられて自身番へゆく途中もかれの足は殆ど地に附かなかつた。彼はときどきに眼をあげて青空をじつと眺めてゐた。

「このあひだお前に貰つた干菓子も綺麗だつたが、備前屋の娘も綺麗だつたな。」と、半七は歩きながら云つた。

勘藏は黙つてゐた。

「あの娘には情夫でもあるかえ。」

「存じません。」

「知らねえことがあるものか。」と、半七はあざ笑つた。「橋場の親類の店にゐるぢやあねえか。熊が出るなんて詰らねえ嘘言を云つて、娘はもう一度橋場へ遣つて貰はうといふ算段だらう。火事が取持つ御縁とは、とんだ八百屋お七だ。自分の家へ火をつけねえのが見附物よ。又その味方になる振りをして誘ひ出す奴も誘ひ出す奴だ。」

勘藏は矢はり黙つてうつつむいてゐた。

「去年の暮に、備前屋の内風呂が傷んだので、娘はおまへの湯へ来たさうだな。」と、半七はまた笑つた。「そのときにお前が背中を流して遣つたか。容貌は好し、年ごろの箱入娘の肌障りはまた

格別だからな。は、飛んでもねえ衆の仙人が出来上つたものだ。なるほど命賭けで荒熊にむしり付くのも無理はねえ。折角助けた娘は橋場へ行つてゐるあひだに、向うで男が出来てしまつた。家へ歸つてもやつぱり橋場が戀しいので、假病をつかつて熊が出るなんて騒いでゐる。しかしその計略がうまく運ばないので、娘もひとりで焦れ込んでゐるうちに、内風呂がまた傷んだ。ねえ、さうだらう。そこで又お前の湯へ遣つて来ると、衆の仙人が脊中をこすりながら旨い相談を持ちかけた。わたくしが橋場へ御案内しませうかとか何とか親切振つて云つたもんだから、若え娘はあと先みずに欺されて、ゆうべ窃と家をぬけ出すと、外には待つてゐた奴があつて……。それから先はおれも知らねえ。おい、勘藏。おれにばかり饒舌らせて、なぜ黙つてゐるんだ。前座はこのくらゐで引き退るから、あとは眞打に頼まうぢやあねえか。」

脊中をぼんと叩かれて、勘藏はあぶなく倒れかゝつた。

「こゝまで漕ぎ付ければ、このお話も大抵おしまひです。半七老人はひと息ついた。勘藏の白狀によると、前の年のくれに備前屋の娘の綺麗な肌を見たときには、まだ何うしようと云ふほどの煩悶も起らなかつたんですが、火事の後片付けの済むまで娘は橋場の親類へ立退いてゐるうちに、その店の若い者と出来合つてしまつた。なんにも知らない親たちは娘の假病を心配して、もう一度橋場へ遣らうかと云つてゐるが、やつぱり其儘になつてゐると、店の者のうちに何處からどうして聞き出して来たのか橋場の一件を知つてゐる者があつて、それが男湯へ来た時に勘藏にうっかりしやべつたので、勘藏は急に氣を悪くした。そこへ丁度内風呂がまた毀れて、娘が車湯へ這入りに来たので勘藏はもう堪らなくなつて、その脊中を流しながら巧く誘ひ出したんです。」

「娘はひとりで女湯へ来たんですか。」と、わたしは訊いた。

「いゝえ、一人ぢやありません。女中と一緒に附いて来たんですが、こいつが柘榴口のなかで町内の人と何かおしやべりしてゐる間に、勘藏がこつそり娘の耳へ吹き込んでしまつたんです。娘ももう少しと假病をつかつてゐれば、なんにも間違ひはなかつたのかも知れませんが、陽氣もだんだん暑くなつて来るので、もう我慢が出来なくなつて、うっかり車湯へ出て行つたのが運の盡きです。橋場へ案内して遣ると嘘をついて、夜ふけに娘を誘ひ出して、勘藏は品川にゐる自分の友達の家へ連れ込もうとしたんですが、橋場と品川ではまるで方角が違ふので、なんぼ世間知らずの娘でも少し變に思つたらしく、途中でぐづく云ひ出したので、勘藏もだんくじれ込んで、

無理無體に娘を引き摺つて行かうとすると、娘はいよ／＼怖くなつて、聲をあげて逃げ出すといふ始末。いや、斯うなるとおそろしいもので、勘藏はもつ逆上せしてしまつたんです。もし云ふことを聞かないときには嚇して手籠めにする積りで、隠して持つてゐた小刀をいきなりに抜いて、いつそ一と思ひにと娘の胸を抉つてしまつた。勿論、自分も一緒に死ぬ氣であつたがそこへ六三郎と百助が駆けて來たので、急に怖くなつて逃げ出したと云ふわけです。」

「そこで、その熊の膽を盗み出したのは誰だか判らないのですか。」と、わたしは又訊いた。

「この方のお話をするとき長くなりますから、手取り早く申上げると、熊の死骸をほり出して熊の膽を盗んだ奴は、備前屋の番頭の四郎兵衛でした。晝間のうちに六三郎から死骸を埋めた場所を聞いて置いたので、日のくれるのを待つて忍んで行つて、一足先きその熊の膽を占めてしまつたんです。いや、どうも悪い奴で……。それが露顯して、四郎兵衛もたうとう召捕られました。品川の傳吉といふ奴だけはどこへか姿をかくしてしまひました。吟味の上で、勘藏は無論獄門、六三郎、百助と四郎兵衛三人同罪といふことになりました。今と違つて、火事場どろぼうは重い處刑になるんですが、盗んだ品が箆筒長持や夜具蒲團のたくひでなく、なにしろ熊の死骸といふのですから、罪も大變に輕くなつて、たしか追放ぐらゐで落着いたやうに聞いてゐます。」

蝶合戦

江戸つ子は他國の土を踏まないのを一種の誇りとしてゐるので、大體に旅嫌ひであるが、半七老人も矢張りその一人で、若い時からよんどころない場合のほかにはめつたに旅をしたことが無いさうである。それがめづらしく旅行したと云ふことで、わたしが尋ねたときに留守であつた。ばあやの話によると、宇都宮の在にゐる老人の甥の娘とかゞ今度むこを取るについて、わざ／＼呼ばれて行つたのだと云ふことであつた。それから十日ほど経つと、老人から老婢を使によこして、先日は留守で失禮をしたが、昨日歸宅しました。これはおめづらしくもない物だが御土産のおしるしでございませと云つて、日光羊羹と乾瓢とを届けてくれた。

その挨拶ながら私が赤坂の家をたづねたのは、あくる日のゆふ方で、六月なかばの梅雨らしい細雨がしとしと降つてゐた。襟に落ちる雨だれに首をすくめながら、入口の格子をあけると、

老人がすぐに顔を出した。

「は、ばあやにしては些つと早い。屹とあなただらうと思ひました。」

いつもの笑顔に迎へられて、わたしは奥の横六疊の座敷へ通つた。ばあやは近所へ買物に行つたといふことで、老人は自身に茶を淹れたり、菓子を出したりした。一通りの挨拶が済んで、老人は機嫌よく話し出した。

「あなたは義理が堅い。この降るのによくお出かけでしたね。あつちにあるあひだも兎かく降られ勝で困りましたよ。」

「なにか面白いことはありませんでしたか。」と、わたしは茶を飲みながら訊いた。

「いや、もう。」と、老人はすこしく顔をしかめながら頭を掉つてみせた。「なにしろ、宮から三里あまりも引込んでゐる田舎ですからね。いや、それでもわたくしの行つてゐるあひだに、雀合戦がある」と云ふのが大評判で、わたくしも一度見物に出かけましたよ。何萬匹とかいふ評判ほどではありませんでしたが、それでも五六百羽ぐらゐるは入りみだれて合戦をする。あれはどう云ふわけですらうかね。」

「東京でも曾てそんな噂を聞いたことがありませんね。」

「雀合戦、蛙合戦、江戸時代にはよくあつたものです。此頃そんな噂の絶えたのは、雀や蛙がだん／＼に減つて来たせいでせう。あいつ等も大勢ゐると、自然繩張り争ひか何かで仲間喧嘩をするやうになるかも知れません。まあ、人間と同じこととせうよ。は、は、は。」

それから枝がさいて、江戸時代の蛙やすめの合戦話が始まつた頃に、ばあやが歸つて来た。雨の音が又ひとしきり強くこえた。

「よく降りますね。」と、老人は雨の音に耳をかたむけながら又云ひ出した。「今もお話し申し合戦、蛙合戦のほかに、螢合戦、蝶合戦など云ふのもあります。螢合戦もわたくしは一度、落合の方で見たことがあります。それから蝶合戦……。いや、その蝶々合戦について一つのお話があります、まだお聴かせ申しませんでしたかね。」

「まだ伺ひません。聴かしてください。」と、私はひと膝のり出した。その蝶合戦が何か捕物に係があるんですか。」

「大有りで、それが妙なんですよ。」

これが口切りで、わたしは今夜もひとつの新しい話を聴き出すことが出来た。

萬延元年六月の末頃から本所の豎川通りを中心として、その附近に澤山の白い蝶が群がって来た。はじめは千匹か二千匹、それでも可なりに諸人の注意をひいて、近所の子ども等は竹竿や箒などを持ち出して、面白半分には追ひまはしてゐると、それが日ましに殖えて来て、六月晦日にはその数が實に幾萬の多きに達した。なにしろ雪のやうに白い蝶の群が幾萬となく亂れて飛ぶのであるから、まつたく一種の奇觀であつたに相違ない。

「蝶々合戦だ。」と、みな口々に云つた。

むらがる蝶は狂つてゐるのか戦つてゐるのか能く判らなかつたが、兎もかくも入りみだれて追ひつ追はれつ、あるひは高く、あるひは低く、纏れ合つて飛んでゐる。疲れたのか傷いたのか、水の上にはらくと舞ひ落ちるものもある。風に吹きやられて大空にひらくと高く舞ひあがるものもある。そこらは時ならぬ花吹雪とも見られる景色であるので、屋敷の者も町家の者も總出になつて、この不思議のありさまを見物してゐるうちに、誰が云ひ出すともなく、こんな噂がそれからそれへと囁かれた。

「やつぱり善昌さんの云ふのはほんたうだ。辨天様のお告に嘘はない。これは何かの知らせに相違あるまい。」

氣の早いのは松坂町の辨天堂へ駈着けて、おうかどひを立てるのもあつた。松坂町は彼の吉良上野介の屋敷のあつた跡で、今は大かた町家となつてゐる。その露地の奥に善昌といふ尼が住んでゐる。以前は小鶴といつて、そこらを托鉢の比丘尼であつたが、六七年前から自分の家に辨財天を祭つて諸人に参拜させることにした。本所には窟の辨天、薬づと辨天、鉦作り辨天など、辨天の社はなかく多いのであるが、かれが祭つてゐるのは光明辨天といふのであつた。かれ自身の云ふところによれば、ある夜更けに下谷のお成道を通ると、路ばたの町家の雨戸の隙間から唯ならぬ光が洩れてゐるので、不思議に思つて覗いてみると、それは古道具屋で、店先にかざつてある古い木彫りの辨天の像から赫灼たる光明を放つてゐた。いよく不思議を感じて歸つて來ると、その夜の夢に彼の辨財天が小鶴の枕もとにあらはれて、我を祭つて信仰すれば、諸人の災厄をはらひ、諸人に福運を授けると告げたので、かれは翌朝早々に下谷へ行つてその尊像を買ひ求めて來たのである。その話が世間に傳はつて、それを拜みに來る者がだん／＼に殖えて來た。

小鶴はその名を善昌とあらためた。今までは長屋同様の小さい家であつたのを建て換へて、一つの辨天堂のやうに作りあげた。かれは托鉢をやめて、堂守のやうな形で、そこに住んでゐるが、参詣者の頼みに因つては一種の祈禱のやうなこともした。身の上判断もした。彼女がかうし

て諸人の信仰や尊敬をうけるやうになつたのは、辨財天の靈驗あらたかなるに因ること勿論で、二三年前にもかういふ實例があつた。ある日の午後、獨身者の善昌が近所へ用達しに出ると、その留守へ矢はり近所のお國といふ女が參詣に來た。

こゝでお國をおどろかしたのは、一人の若い男が佛前に倒れ苦しんでゐることであつた。男は口からおびたゞしい血を吐いて、蟲の息で倒れてゐる。お國はびつくりして聲をあげると、近所の人たちも驅集まつて來て、一體どうしたことかと詮議したが、男はもう口を利くことが出來なかつた。かれはそこに轉じてゐる餅や菓子指さしたまゝで、息が絶えた。それからだんく調べてみると、かれは賽錢箱の錠をこぢあけて賽錢をぬすみ出したのである。そればかりでなく、佛具のなかでも金目になりさうな物を手あたり次第にぬすみ取り、風呂敷につゝんで背負ひ出さうとしたが、それでもまだ飽足らないで、佛前にそなへてある餅や菓子を食べ、水を飲んだ。さうしてなにかの毒にあたつて死んだらしいと云ふことが判つた。

取りあへずそれを善昌の出先へ報せてやると、彼も驚いて歸つて來た。彼の男はどうして死んだのか判らないが、佛前の餅や菓子に毒の這入つてゐる筈はないと善昌は云つた。かれは諸人のうたがひを解くために、かれらの見てゐる前でその餅や菓子を買つてみせたが、別になんにも變つたことはなかつた。そんなら彼の男はなぜ死んだか。かれは盗人で、賽錢をぬすみ、佛具をぬすみ、あまつさへ佛前の供物までも盗み喰つたので、たちまちその罰を蒙つて供物が毒に變じたのであらうと、諸人は判斷した。かれらは今更のやうに辨財天の靈驗あらたかなるに驚嘆して、信心いよく膽に銘じた。その噂がまた世間にひろまつて、信者は以前に幾倍するやうになつた。諸方からの寄進も多分にあつまつて、辨天堂は再び改築されたので、狭い露地の奥にありながらも、その赫灼たる燈明のひかりは往來からも拜まれて、まことに光明辨天の名にそむかないやうに尊く見られた。

その善昌が今年の三月、辨財天のお告げであると稱して、一種の豫言めいたことを信者たちに云ひ聞かせた。今年はおそるべき厄年であつて、井伊大老の死ぐらゐは愚かのことである。五年前の大地震、四年前の大風雨、二年前の大コロリ、それらにも優したる大きい禍が江戸中に襲ひかゝつて來るに相違ない。但しそれには必ず何かの前兆があるから、いづれも用心を怠つてはならぬと云ふのであつた。附近の信者はみなそれを信じた。大地震、大風雨、大コロリ、黒船騒ぎ、大老要撃、それからそれへと變災様事が打ちつゞいて、人のこゝろが落ち着かないところへ、又もやこの怖ろしい御託言を聽かされたのであるから、彼等の胸に動悸の高まるのも無理は

なかつた。

かならず何かの前兆があると善昌は云つた。その警告におびえてゐる彼等の眼のまへに、不思議の蝶合戦が起つたのである。氣の早い者はあわて、辨天堂へかけ着けると、佛前の燈明はすべて消えてゐた。幾匹かの白い蝶がどこからか飛んで来て、燈明の火を片端から消してしまつたのであると、善昌は不思議さうに話した。

二

蝶の最も出盛つたのは、朝の四つ時（午前十時）頃から晝の八つ時（午後二時）頃までで、八つを過ぎるところから無数の蝶の群もだん／＼に崩れ出して、鐘撞室のゆふ七つ（午後四時）がきこえるには、消えるやうに何處へか散り失せてしまつた。水に落ちたものは流れもあへずに、夏の日暮れ果てるまで堅川を白く埋めて、涼みがてらの見物を騒がせてゐたが、あくる朝は一匹もその姿をとどめなかつた。

「辨天さまのお告げに嘘はない。おそろしいことごとざります。」

善昌は再び信者達に云ひ聞かせた。信者達ももう疑ふ餘地はないので、善昌と相談の上で、七

月の朔日から盂蘭盆の十五日まで半月の間、辨天堂で大護摩を焚くことになつた。護摩料や燈明料はいふまでもなく、そのほかにも色々の奉納物が山のやうに積まれた。

かうして、はじめの七日は無事に済んだが、たなばた祭もきのふと過ぎた八日の朝になつて、善昌は突前に佛前の御戸帳をおろした。今までは何人にも拜ませるた光明辨天の尊像をむらさきの帳の奥に隠してしまつたのである。これは夢枕に立つた辨財天のお告で今後百日のあひだは我が姿を人に見せるな、そのあひだに禍の日は過ぎ去つてしまふとのことであつたと、善昌は説明した。さうして引きつゞいて護摩を焚き、祈禱を行つてゐたのであるが、それから三日と過ぎ、四日と経つうちに、誰が云ふともなしにこんな噂がまた傳はつた。

「御戸帳のなかは空だ。辨天様はなくなつてしまつたらしい。」

信者のなかでも有力の三四人がその噂を氣に病んで、諸人のうたがひを解くために、たとひ一目でもいゝから御戸帳の奥を覗かせてくれと交渉したが、善昌は頑として肯かなかつた。本尊の秘佛を厨子に納めて何人にも直接に拜むことを許さない例は幾らもある。おまへ方のうちに淺草觀世音の御本體を見た者があるか、それでも諸人は渴仰參拜するではないか。百日のあひだは我が姿を人にみせるなといふお告げにそむいて、みだりに奥をうかがふ時は、佛罰によつて眼が潰

れるか、氣が狂ふか、どんな禍を蒙らないとも限らない。おまへ方はおそろしい禍を避けるために、護摩を焚き、祈を行つてゐながら、却つて佛罰を蒙るやうなことを仕出來して、どうする積りか。尊像のあるか無いかは百日を過ぎれば自然に判ることである。それを疑ふものは參拜を止めたらよからうと、彼女はきつぱりと云ひ切つた。

かう云はれると一言もないので、誰も彼もみな黙つてしまつた。さうして、日々の祈禱は今までの通りに續けられたが、尊像紛失のうたがひはまだ全く消えないので、信者のあひだには色々噂が傳へられてゐるうちに、いよいよ孟蘭盆の十五日が來た。祈禱はこの日を限りでどこほりなく終つた。

あくる十六日の朝になつても、辨天堂の扉は開かなかつた。日々の祈禱の疲れで、けふは善昌さんも朝寢坊をしてゐるのであらうと、近所の者も初めのうちは怪しまなかつたが、やがて午ごろになつても扉をあけないので、不思議に思つて裏口へまはつて窺ふと、水口の戸には錠がおろしてないとみえて、自由にさらりと明いた。幾たびか聲をかけても返事がないので、近所の二三人が思ひ切つて薄暗い奥へ這入ると、どこにも善昌のすがたは見えなかつた。かれは六疊の小座敷に寝起きをしてゐる筈であるが、そこには蚊帳さへも釣つてなかつた。

ひとり者であるから、今までも家をあけて出ることは珍しくなかつたが、午頃までも表の扉をあけないと云ふのは不思議である。それを聞き傳へて、信者の誰彼もあつまつて來て、大勢が立會の上で堂内をあらためたが、どこも綺麗に片付いてゐて、別に怪しむべき形跡もなかつた。そのうちに一人が云ひ出した。

「善昌さんは若しや駈落をしたのではあるまいか。」

辨財天の尊像紛失はやはり事實で、かれはその申譯なさに、十五日間の祈禱料や賽錢のたぐひを掻きあつめて、どこへか駈落をしたのではあるまいかと云ふのである。或はそんなことが無いとも云へない。それでなくとも、このあひだから諸人の疑問になつてゐるので、大勢は立寄つて恐る恐るその帳をあけると、彼の尊像のおん姿は常のごとくに拜まれたので、一同は案に相違した。善昌の云つたのは嘘でなかつた。その疑ひが解けると同時に、それならば善昌がなぜ其姿をかくしたかといふ新しい疑ひが更に深くなつた。

辨天堂は信者の寄進によつて善昌が作りあげたものではあるが、かういふ事件が起つた以上、この露地のなかを差配してゐる家主にも一應斷つて置かなければならないと云ふので、誰かがそれを届けにゆくと、家主もとりあへず出て來た。そこで相談の上、あらためて家捜しをすること

になつて、念のために床下までも検めると、臺所の揚板の下には炭俵が二三俵押込んである。その一つのあき俵のなか、首を突つ込んで、善昌がうつむきに倒れてゐるのを発見したときに、大勢は思はず驚きの聲をあげた。善昌は手足をあら縄で嚴重に縛られてゐた。

それだけでも諸人をおどろかすに十分であるのに、更に人をおどろかしたのは、二三人がそのからだを抱き起さうとすると、あき俵をかぶせられてゐる善昌には首がなかつた。かれは首を斬り落されてゐるのであつた。今度は誰も聲を出す者がなく、いづれも啞のやうに眼を見あはせてゐるばかりであつた。

「善昌さんの首がない。」

その噂が隣町まで傳はつて、他の信者達もおどろいて駈着けた。見物の彌次馬も續々あつまつて来た。狭い露地のなかは人を以て埋められ、おくれ馳せに來た者は往來に溢れ出して、唯いたづらにがや／＼と罵りさわいでゐるのであつた。

善昌の死——その仔細は誰にも容易に想像された。この十五日間、厄よけの祈禱をおこなつて、護摩料や祈禱料や賽銭が多分にあつまつてゐるので、それを知つてゐる何者かが忍び込んで彼女を殺害したのであらう。善昌は抵抗したために殺されたのか。あるひは先づ善昌を殺して置

いて、それから仕事に取りかゝつたのか。その順序はよく判らなかつたが、いづれにしても其首を斬り落すのは餘りに残酷である。床板を引きめくつて縁の下を隈なくあらためたが、その首はどうしても見付からなかつた。

首のない尼の死骸は六疊の間に横へられて、役人の検視をうけることになつた。本所は朝五郎といふ男の縄張りであつたが、朝五郎は千葉の親類に不幸があつて、生憎きのふの午すぎから旅に出てゐるので、半七が神田から呼び出された。半七は丁度來あはせてゐる自分の熊藏を連れて駈けつけた。地獄の釜の蓋があくといふ孟蘭盆の十六日は朝から晴れて、八つ頃（午後二時）の日ざかりは灼けるやうに暑かつた。ふたりは眼にしみる汗をふきながら兩國橋をいそいで渡ると、回向院の近所には藪入りの小僧等が押合ふやうに群つてゐた。

「こゝの閻魔さまは相變らず流行るね。」と、熊藏は云つた。

「流行るのは結構だが、閻魔様も些つと睨みを利かしてくれねえぢやあ困る。盆中にも人殺しをするやうな奴があるんだからな。」

こんなことを云ひながら二人は辨天堂にゆき着くと、露地の内外には大勢の見物人が一杯にあつまつてゐる。それを掻きわけて這入つてゆくと、検視の役人も町役人ももう出張つてゐた。

「どうも遅くなりました。皆さん、御苦勞さまでございます。」
 半七は一應の埃掃をして、先づ善昌の死骸を叮嚀にあらためた。死骸の手足はあら縄で嚴重にくくられてゐたが、殆ど無抵抗で縄にかゝつたらしいことは、多年の経験ですぐに覺られた。こちらの疊には血の痕らしいものは見えなかつた。もしや綺麗に拭き取つたのかと、半七は犬のやうに腹這つて疊の上をかいでみた。

「尼さんは酒を飲みますかえ。」と、半七はそこへ控へてゐた信者の一人に訊いた。

「當人は飲まない」と云つてゐた。身分柄としても然う云はなければならぬのであらうが、内證では時々少しぐらゐ飲んでゐたこともあるらしいといふ信者の答へを聽いて、半七はうなづいた。疊には新しい酒の香が残つてゐた。なにか紛失物はないかと訊くと、それはよく判らないが、尼が大切にしてゐる革文庫がみえない。そのなかに金の仕舞つてあるのを知つて盗み出したのではあるまいかと云ふのであつた。半七は又うなづいた。

型の通りの檢視が済んで、そのあと調べを半七にまかせて、役人達は引揚げた。町役人や家主も一旦歸つた。あとに残されたのは町内の薪屋の亭主五兵衛と小間物屋の亭主伊助で、この二人は信者のうちの有力者と見なされ、いはゆる講親とか先達とかいふ格で萬事の擔煎りをしてゐた。

のである。半七はこの二人を残して置いて、善昌の身もと詮議をはじめた。

「善昌は幾つですね。」

「自分でもはつきり云つたことはありませんが、なんでも三十二三か、それとも五六ぐらゐになつてゐませうか。見かけは若々しい人でございました。」と、五兵衛は答へた。

「ひとり者で、ほかに身寄らしい者もないんですね。」

「自分は孤兒で、天にも地にもまつたくの獨り者だと、ふだんから云つてゐました。」と、伊助は答へた。

「よそへ泊つて来たことがありますかえ。」

「祈禱などを頼まれて、よるも晝も出あるくことはありませんでしたが、遅くも屹と歸つて來まして、家をあげたことは一晩もなかつたやうです。」と、伊助は又答へた。

これを口切りに善昌が平素の行狀から先頃の蝶合戦のこと、それから續いて今度の祈禱のことを、半七は残らず聞き糺した。それが済んでから彼の問題の尊像といふのを一應あらためると、木ぼりの辨財天は高さ三尺ばかりで、かなりに舌びたものであつた。半七はその木像を撫でまはして、更に二三ヶ所を嗅いでみた。さうして、小聲で熊藏に云つた。

「熊や、おめえも嗅いでみる。」

三

「尼さんには用のねえ商賣だが、男か女の髪結びで、こゝの家へ心安く出這入りをするものがありますかえ。」と、半七は訊いた。

伊助は小間物屋であるだけに其人をよく識つてゐた。それは隣町に住んでゐるお國といふ女髪結で、善昌とは古いなじみでもあり、勿論信者の一人でもあるので、ふだんから近しく出入りをしてゐる。これも獨り者で、年頃は四十を一つ二つ越してゐるかも知れないと云つた。

「それぢやあすぐに呼んでください。」

「かしこまりました。」

伊助は早々に出て行つたが、やがて引返して来て、お國はゆうべから家へ歸らないと云つた。ひとり者であるから、いつも朝から家を閉めて商賣に出あるいてゐる。親類の家へ泊るとか云つて、夜も歸らないことが屢々ある。きのふも夕方に歸つて来て、湯に行つてから何處へか出かけたが、たぎりで歸らない。大方親類へでも泊りに行つて、けふは藝入りで商賣は休みであるから、どこ

かを遊び歩いてゐるのであらうとのことであつた。

「それぢや何時歸るか判らねえ。」

思案しながら半七は再び善昌の死骸に眼を遣ると、首のない尼は白い麻の法衣を着て横はつてゐた。半七はその冷い手を握つてみた。

もしもお國が歸つて來たらば、そつと自分のところまで知らせてくれと頼んで置いて、半七は一先づこゝを引揚げることになつた。暑い時分のことであるから、信者達があつまつてすぐに死骸の始末をすると五兵衛等は云つてゐた。

「勿論このまゝに打ちちやつても置かれぬが、火葬にするのはお見合せなさい。この死骸について、後日に又どんなお調べがないとも限りませんから。」と、半七は注意した。

「では、土葬にいたして置きます。」

五兵衛と伊助に見送られて、半七と熊藏はこゝを出た。さつきから餘ほどの時が経つたやうであるが、七月なかばの日はまだ沈みさうにもしなかつた。片蔭のない堅川の通りをふたりは再び汗になつて歩いた。

「蝶合戦のあつたと云ふのはこゝらだな。」

「さうでせう。」と、熊藏は云つた。「わたしは見なかつたが、なんでも大變な評判でしたよ。」
 「む、評判だけはおれも聴いてゐる。」と、半七は立ちどまつて川の水をながめてゐたが、やがて子分にさゝやいた。

「おい、お前はさつきあの木像をかいで、どんな匂ひがした。」

「なんだか髪の毛の油臭いやうな匂ひがしましたよ。」

「む。」と、半七はうなづいた。「善昌は尼だ。髪の毛の油に用はねえ筈だ。なんでも油いじりをする奴がある木像に手をつけたに相違ねえ。」

「すると、そのお國とかいふ女髮結が何かいぢくつたのかも知れませんか。」

「おめえはあの死骸を誰だと思ふ。」

「え。」と、熊藏は親分の顔をながめた。

「おれの鑑定では、あれがお國といふ女髮結だな。」

「さうでせうか。」と、熊藏は眼を見はつた。「どうしてわかりました。」

「あの死骸の手にも油の匂ひがしてゐる。梳油や鬢附の匂ひだ。元結を始終あつかつてゐるのは、その指をみても知れる。善昌が三十二三だといふのに、あの肉や肌の工合がどうも四十以上

の女らしい。足の裏も随分硬いから、毎日出あるく女に相違ねえ。」

「それぢやお國の首を斬つて、その胴に善昌の法衣を着せて置いたんでせうか。」

「先づさうらしいな、お國はゆうべから歸らねえといふが、おそらく來年の盆までは娑婆へ歸つちやあ來ねえだらうよ。と、半七は苦笑ひをした。「それにしても、なぜお國を殺したかが詮議物だ。お國を自分の替へ玉に残して置いて、本人の善昌はどこにか隠れてゐるに相違ねえ。お前はこれから引返して、お國といふ女の身許や、ふだんの行狀をよく洗つて來てくれ。さうしたら何かの手がかりが付くだらう。」

「ようがす。すぐに行つて來ます。」

「いや、待つてくれ。おれも一緒に行かう。こんなことは早く埒をあける方がいい。」

ふたりは連れ立つて又引返した。

お國の家は辨天堂のとなり町で、これも狭い露地の奥の長屋であつた。近所でだん／＼聞きあはせると、お國の評判はどうもよくない。若いときから二三人の亭主をかへて、今では獨身で暮してゐるが、絶えず一人ふたりの男にかかり合つてゐるらしく、親類の家へ泊りにゆくと云ふのも嘘かほんたうか判らない。その菩提寺の住職が去年死んで、その後若い住職に變つたが、そ

の僧とも何かの係り合が出来て、ときどきに窺と泊り込みにゆくらしいと云ふ噂もある。それらの事實を探り出して、ふたりはこゝを立去つた。

「さあ、もう一息だ。」

半七は先に立つて歩いた。お國の菩提寺は中の郷の普在寺であると聞いたのを頼りに尋ねてゆくと、その寺はすぐに知れた。小さい寺ではあるが、門内の掃除は綺麗に行きとどいて、白い百日紅の大樹が眼についた。入口の花屋で要りもしない線香と密を買つて、半七はその小娘にそつと訊いた。

「こゝのお住持はなんと云ふ人だえ。」

「覺光さんと云ひます。」

「本所からお國さんといふ髪結さんが時々に来るかえ。」

「え。」と、娘はうなづいた。

「泊つて行くこともあるかえ。」

娘はだまつてゐた。

「それから、やつぱり本所の方から尼さんが来やあしないかえ。」

「え。」と、娘は又うなづいた。

「なんといふ人だえ。」

娘はなにか云はうとする時に、婆さんが手桶をさげて歸つて来た。かれは娘を眼で制しながら半七等に向つて一通りの世辭などを云ひ出した。そのうちに又ひと組の參詣人が花や線香を買ひに来たので、半七は思ひ切つて店を出た。

「この線香をどうしますえ。」と、熊藏は小聲で訊いた。

「捨てるわけにも行くめえ。無縁の佛にでも供へて置かう。」

残暑の強い此頃ではあるが、墓場にはもう秋らしい蟲が鳴いてゐた。半七は何者かをたづねるやうに石塔のあひだを根氣よく縫ひあるいてゐると、墓場の奥の方に紫苑が五六本ひよろ／＼と高く伸びてゐて、そのそばに新しい卒堵婆が立つてゐるのを見つけた。卒堵婆は唯一本で、それには俗名も戒名も書いてなかつたが、きのふ今日に掘りかへされた新しい墓であることは一目に覺られた。

「こゝに新佛がある。こゝらへ供へて置きませうか。」と、熊藏は手に持つてゐる密と線香とを見せた。

「馬鹿。飛んでもねえことをするな。」と、半七は叱つた。「それほど邪魔になるなら、どこへでも打ちやつてしまへ。手前のやうなどぢはねえ。そんなものはこつちへ遣せ。」
熊藏の手から櫛と線香とを引つたくつて、半七はすたくく歩き出した。

四

「これからの道行を下手に長々と講釋してゐると、却つて御退屈でせうから、もうこゝらで種明かしをさせようよ。」と、半七老人は云つた。「今の人みんな頭がいゝから、こゝまでお話をすれば、もう大抵お判りになつたでせうが、辨天堂で死んでゐたのは矢つぱり髪結のお國で、善昌は生きてゐたんです。」

「善昌が殺したのですか。」と、わたしは訊いた。

「さうです。善昌といふ尼はひどい奴で、當人は一々白状しませんでしたけれど、前にも色々な悪いことをしてゐたらしいんです。勿論、お國といふ女も無事には濟まない身の上で、かうなるのも心柄です。初めにお話し申した通り、辨天堂のお賽銭や佛具をぬすみ出さうとして、菓子や餅の毒にあたつて死んだ若い男がある。あれは佛の罰でも何でも無い、善昌とお國とが共謀して

殺したんです。誰もそれには氣がつかないで、可哀さうにその男は身許不詳の明巢狙ひにされて、近所の寺へ投げ込まれてしまつたんですが、實は善昌のむかしの亭主の弟ださうです。善昌は越中富山の生れで、早く亭主に死別れて江戸へ出て来て、本所で托鉢の比丘尼をしてゐるうちに、何處からか辨天様を見つけ出して来て、好い加減の出鱈目を吹聴すると、その山がうまく中つて、だんくにお有難連の信者が殖えて来た。ところへ、ひよつくり出て来たのが先の亭主の弟で與次郎といふ、堀川の猿廻し見たやうな名前男で、これがどうして善昌の居所を知つたのか、だしぬけに尋ねて来て何とか世話してくれといふ。よんどころ無しに幾らか恵んで追つ拂つたのですが、這奴もおとなしくない奴だとみえて、何とか因縁をつけて無心に来る。断れば何か忌がらせを云ふ。こんな者が繁々入り込んで、ほかの信者の手前もあり、もう一つには善昌の方にも何かうしろ暗いことがあつて——これは當人がどうして白状せず、なにぶん遠い國のことで能く判りませんでした。善昌は先の亭主を殺して江戸へ逃げて来たのを、弟の與次郎が薄々知つてゐて、それを種にして善昌を強引つてゐたのではないかとも思はれます。——そんなわけ、この與次郎を生かして置いては末の爲にならないと思つたので、ふだんから仲のいいお國と相談して、與次郎を殺す段取りになつたんです。善昌の申立てによると、自分は殺すほど

の氣もなかつたが、お國がいつそ後腹の病めないやうに殺してしまへと勧めたのだと云ふことです。いづれにしても與次郎を亡き者にすることに決めたが、勿論むやみに殺すことよ出来ないそこで、善昌は與次郎に向つてかういふ相談を持ちかけたんです。

わたしも出来るだけはお前の世話をしてあげたいが、今の分ではなか／＼思ふやうには行かない。就てはお前の力でこの辨天様をもつと流行らせてくれまいか。信者が殖えれば賽錢も殖える、寄進も殖える。したがつておまへの爲にもなると云ふわけであるから、その積りで一つ芝居を打つてくれと云ふことになつたのです。その芝居といふのは、與次郎が泥坊の振りをして辨天堂へ忍び込んで、賽錢や佛具をぬすみ出さうとすると、からだが竦んで動かれなくなる。そこへお國が来て騒ぎ立てる。近所の者もあつまつて来る。好い頃を見計らつて善昌が歸つて来て、これも辨天様の御罰だと云つて何かの御祈禱をすると、與次郎のからだか元の通りになる。ほかの者が縛つて突き出さうと云つても、善昌が宥めて免してやる。さあ、かうなれば諸人の信仰はいよく増して、辨天様の靈驗あらたかであると云ふ評判がいよく高くなる。信者が俄に殖える、収入も多くなる。

この相談を持ちかけられて、與次郎といふ奴は馬鹿か、づう／＼しいのか、それは面白いと受

合つて、たうとうその芝居を實地に遣つてみることになつたんです。そこで、その筋書の通りに運んで行つて、賽錢を袂に入れる。金目になりさうな佛具を百負ひ出すといふ段になると、留守の善昌が奥から出て来て、からだか竦むと云ふだけではいけない、これを食べつて苦む眞似をしてくれと云つて、佛前に供へてある菓子と餅とを把つて與次郎の口へ押込んだので、何心なくむしや／＼と食ふと、さあ、大變、與次郎はほんたうに苦み出して、口や鼻から血を吐くといふ騒ぎ。お國も奥で様子をうかがつてゐて、與次郎がもう虫の息になつた頃をみすまして、善昌は裏口から窃と出てゆく。お國は表口へまはつて来て、今初めてそれを見つけたやうに騒ぎ立てる。與次郎は一杯食はされて、さぞ口惜かつたでせうが、もう口を利く元氣もない、餅と菓子とを指さしただけで、苦み死に死んでしまつたんです。遠國の者ではあり、下谷あたりの木賃宿に轉がつてゐる宿無し様の人間ですから、死ねば死損で誰も詮議をする者もない。心柄とは云ひながら、随分可哀さうな終りでした。

禍を轉じて福となすとか云ふのは此事でせう。善昌の方ではこの芝居が大あたりで、邪魔な與次郎をやすめてしまつた上に、案の通りに信者はますます殖えてくる。萬事がとん／＼拍子に行つて、辨天堂が立派に再建するほどの景氣になつたのですが、與次郎の代りにお國といふも